

さかえ おか
栄 丘 遺 跡

——日高支庁庁舎移転改築用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和 58 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

さかえ おか
栄 丘 遺 跡

——日高支庁庁舎移転改築用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和 58 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

福　　惠　　五　　榮

——多謝諸君賜教予細川文政御用官物此之為吾子書之題目也

五　　榮　　惠　　福

——多謝諸君賜教予細川文政御用官物此之為吾子書之題目也

例　　言

1. この報告書は、日高支庁舎移転改築用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に関するものである。

2. 報告書の作成には、各項目別に下記の者が従事し、それぞれ執筆を分担した。

I - 1 ~ 5、II - 1 -(5)、II - 2、IV - 1 高橋和樹

I - 6 -(2)、III - 2 -(2)、IV - 3 -(2) 佐川俊一

II - 1 -(4) 三浦正人

I - 6 -(1)、III - 1、IV - 2 葛西智義

I - 6 -(2)、II - 1 -(1)~(3)、III - 2 -(1)、IV - 3 -(1) 森岡健治

3. 石質については、以下の略号を使用した。

Aga. : めのう Bl-Mud. : 黒色泥岩 Gne. : 片麻岩 Grano. : 花崗閃緑岩

Gr-Mud. : 緑色泥岩 Ha-Sh. : 硬質頁岩 Obs. : 黒曜石 Sa. : 砂岩

4. 調査および報告書の作成に際し、下記の機関、諸氏の御指導、御助言をいただいた。

北海道教育庁社会教育部文化課 大沼忠春

同 日高教育局指導課

北海道開拓記念館 赤松守雄

浦河町教育委員会社会教育課

浦河町郷土博物館 谷岡康孝

浦河町郷土史研究会 黒崎康雄

静内町郷土博物館 古原敏弘

新冠町郷土博物館 乾 芳宏

札幌市教育委員会文化課 上野秀一

目 次

例 言

I. 調査の概要	5
1. 調査要項	5
2. 調査体制	5
3. 調査の経緯	5
4. 遺跡の概要	6
(1) 位置と環境	6
(2) 遺跡の概要と調査結果	6
5. 調査の方法と層序	9
(1) 調査の方法	9
(2) 層序	9
6. 遺物の分類	14
(1) 土器	14
(2) 石器	15
II. 遺構	18
1. 土 壤	18
(1) P - 1	18
(2) P - 2	18
(3) P - 3	20
(4) P - 4	20
(5) P - 5	20
2. 塹壕	22
III. 発掘区出土遺物	23
1. 土器	23
2. 石器	40
(1) 剥片石器	40
(2) 碓石器	44

IV. ま　と　め.....	83
1. 遺構.....	83
2. 土器.....	84
3. 石器.....	86
(1) 剥片石器.....	86
(2) 磔石器.....	88
引用・参考文献.....	89
写真図版.....	91

I. 調査の概要

1. 調査要項

事業名 日高支庁庁舎移転改築用地内埋蔵文化財発掘調査業務
事業委託者 北海道
事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 栄丘遺跡（道教委登載番号 K-07-23）
所在地 浦河郡浦河町昌平町 63-2 ほか
調査面積 3,000 m²
調査期間 昭和 58 年 9 月 1 日～昭和 59 年 3 月 31 日

2. 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター	理事長	中村龍一
	専務理事	山本慎一
	常務理事	藤本英夫
	業務部長	横田直成
	調査部長	竹田輝雄
	調査第三班長	種市幸生
	文化財保護主事	高橋和樹（発掘担当者）
同		佐川俊一（整理）
同		三浦正人
嘱託		葛西智義（整理）
同		森岡健治

3. 調査の経緯

この調査は、浦河郡浦河町大通 2 丁目にある日高支庁庁舎の移転改築に伴うものである。新庁舎の建設予定地には、周知の埋蔵文化財包蔵地栄丘遺跡があり、北海道から埋蔵文化財保護のための事前協議を受けた北海道教育庁社会教育部文化課は、昭和 57 年 8 月、埋蔵文化財包蔵地の範囲確認調査を実施し、工事予定地内に 3,000 m² に及ぶ包蔵地を確認した。その結果に基づいて包蔵地の保存について協議が行われたが、地震や津波などの災害時にも有効に対処しうる立地条件を具えた代替地は他になく、事前の発掘調査が実施される運びとなつものである。

4. 遺跡の概要

(1) 位置と環境

浦河町は、北海道の脊梁日高山脈の南西麓に位置し、太平洋に面している。日高海岸には、北東から南西方向に流下する河川が、数 km 毎に並んで注いでおり、向別川もその一つである。向別川の河口から東へ約 300 m、国鉄日高本線浦河駅の北北西約 500 m の地点に栄丘遺跡がある(図 1)。浦河地方の海岸線、元浦川から幌別川にかけての一帯には、中世代白亜紀新期に属する上部えぞ層群と呼ばれる地層が発達し、高位および低位の海岸段丘が形成されている(北海道立地下資源調査所編 1980、浦河町史編纂委員会編 1971)。遺跡は、標高 20 m 内外の、この低位段丘上に當されたものである。向別川の河口付近は、市街化や防波堤整備を伴う埋め立てなどにより往時の姿を留めないが、西には砂丘が連なり、東も砂浜で、東風の強い時節には、遺跡のある段丘の直下まで波が押し寄せたといわれる。

一般に、日高地方は四季を通じて温暖で、特に冬期間の積雪は少なく、エゾシカの楽園とも称されている。他の野生動物の生息も多く、また、ニシンやイワシ、サケやマス、コンブなどの水産資源にも恵まれていた。今はサケののばらぬ向別川も、大正 5 年以前には、相当な数の溯上をみたという(浦河町史編纂委員会編 1971)。

遺跡のある段丘は、かつては全面的に耕作されており、段々畑状の整地など、地形の改変が認められた。また、段丘末端部は、鉄道や旧道によってその一部が削られ、失われている(図 2)。

(2) 遺跡の概要と調査結果

栄丘遺跡は、高橋正勝、畠 宏明両氏によって、昭和 40 年秋に実施された発掘調査の結果が報告され(高橋・畠 1976)、その存在が一般に知られるようになった。この時に採集された遺物は、すべて耕作土中に見出されたものだが、静内町中野遺跡出土の土器(河野ほか 1954)に近い土器をはじめ、石鎌、石鋸、石錐、石小刀、スクレイパー、石斧など多数の石器類は、一つのセットを構成するものと判定された。

栄丘遺跡の全体像は、昭和 57 年 8 月に実施された道教委による範囲確認調査によって、より明確に捉えられるにいたった。すなわち、縄文時代前期を主体とする包蔵地は、ほぼ東から西へ突出する海岸段丘の末端部、標高 16~20 m 程のところに分布し、その範囲は約 3,000 m² に及ぶこと、畠の造成や耕作による包含層の破壊があり、保存状態は必ずしも良好ではないこと、遺構は少ないらしいが、比較的多量の遺物の遺存がみられることなどが予測されたのである。

さて、本調査の結果は以下のようであった。

遺構としては、土 壤が 5 基検出されたが(P-1~5)、伴出遺物などが乏しく、どのような目的で構築されたものか不明である。時期的には、第Ⅲ層下部に至って初めてその存在が確認されたことなどにより、縄文時代前期に属するものと判断した。

包含層は、耕作などにより失われた部分も多いが、C-3 区から G-5 区にかけて北西-南東方向にのびる地域や、G-F-7 区など傾斜地では、かなり良好に保存されていた。なお、



図1 栄丘遺跡の位置（この図は国土地理院発行の2万5千分の1の地形図『浦河・西舎』を複製したものである。）



図2 遺跡付近地形図

このような所では、遺物が一括的な出土状態を示す場合もあったが(図版6・7)、いずれも恣意的な認定を超えるものではなく、一括を強調することは、本報告書では敢えて避けている。

遺物量はかなり多く、土器ではII群a-2類が主体で、I、V、VI、VII群などの土器片も少量みられた。石器も豊富で、器種的にも恵まれており、石器組成の解明にとって重要な資料が得られた。

5. 調査の方法と層序

(1) 調査の方法

発掘区における $10 \times 10\text{ m}$ の基本メッシュは、道教委が範囲確認調査に際して設定した区画を踏襲したもので、発掘区外の土地境界杭(43,090.¹²、-203,190.⁴⁶)を基点とし、真北方向を基軸としたものである。基本メッシュには、東西方向にアルファベット、南北方向にアラビア数字を付し、北西の交点における表示をもって、各区の呼称とした。調査は、さらに各区をa-dに4分割し、この $5 \times 5\text{ m}$ の小区画を一単位として進めた(図3)。

(2) 層序

発掘区における層堆積を把握するため、基本メッシュのFラインおよび4ラインについて、断面実測図を作成した(図4・5)。標準的な層序は、以下の第I層から第V層で、第I'、III'、V'層など若干の変異も観察された。

第I層 暗褐色から黒褐色を呈する耕作土。ローム粒を不整に混合する。

第I'層 E-2区からH-4区に至る一帯にみられた、二次堆積と思われる黒色土。ローム粒や細礫を含む。

第II層 黒色土。下半部はやや粘質を帶び、細礫の点在が認められる。D-3区からG-5区にかけて、北西-南東方向にのびる狭長な分布がみられたほか、発掘区の北、西、南の縁辺、傾斜面沿いの地区でも、比較的広い分布が認められた。

第III層 暗褐色から黒褐色を呈する粘質土。C-2、3区あたりからG-5、6区にかけて、第II層のそれをひとまわり拡大した分布域がみられた。縄文時代前期の遺物の包含は、第II層の下部から認められたが、この第III層および次の第III'層に見出されるのが普通で、特に一括的な出土状態を示した遺物は、第III層の下半部に遺存していた例が多い。また、P-1~3などは、この第III層下半部に至って、その存在が確認されている。

第III'層 第III層とほぼ同様の黒褐色粘質土だが、色調はかなり暗く、細礫の混在も多い。

第III'層上半部における遺物の包含は、第III層下半部のそれを想起させる状態を示した。分布の中心は、F~G-7区である。

第IV層 暗黄褐色ローム質土。いわゆる漸移層で細礫を多量に混入させた部分もある。

第V層 黄灰褐色ローム。細礫の混入が多く、堅い。恐らく、支笏降下軽石堆積物(Spfa-1)に由来する層と思われる。

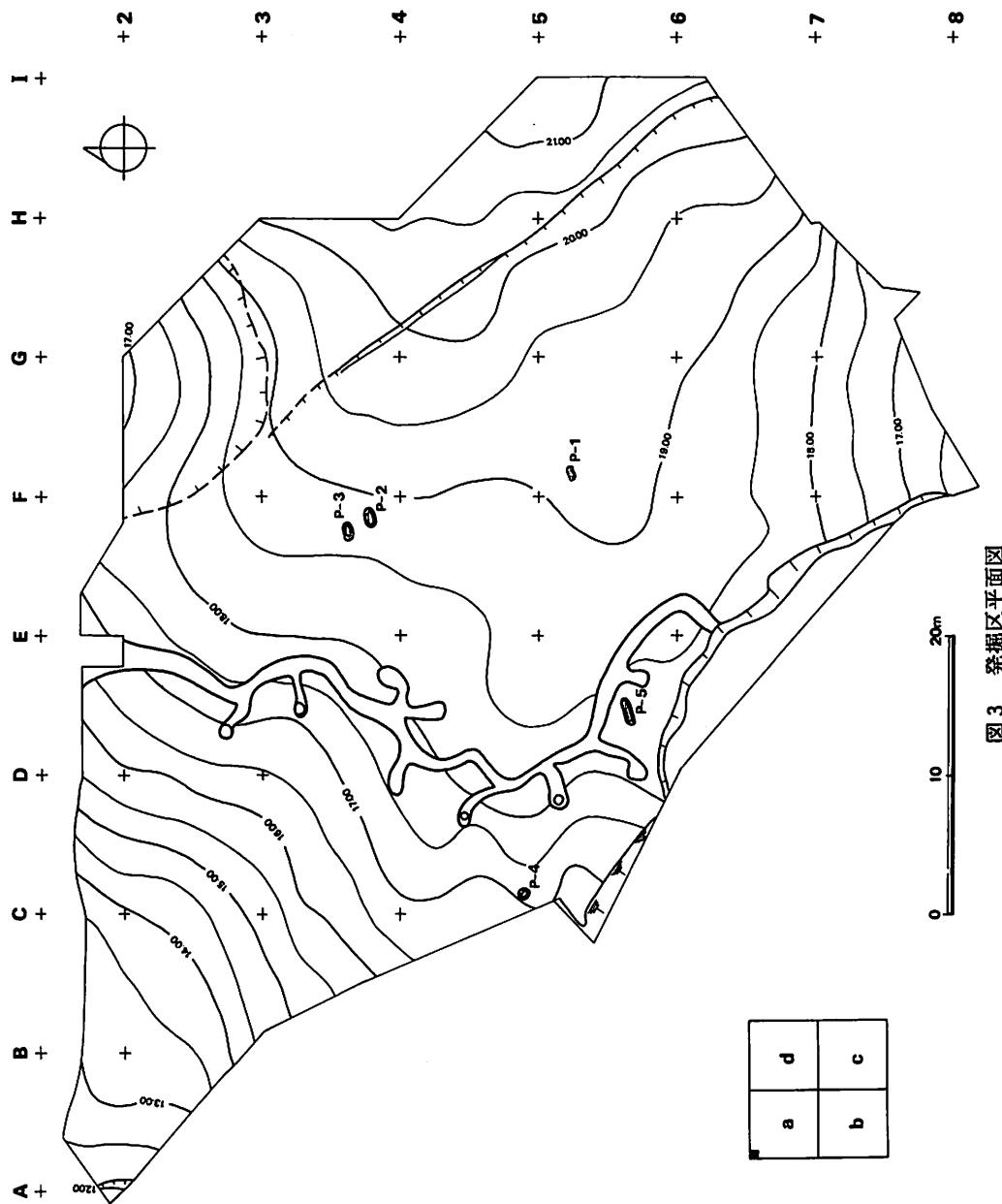


図3 掘削区平面図

第V層 暗黄灰褐色細礫混合ローム。細礫の多い、堅固な層。

なお、静内町、三石町など近傍の遺跡で、その存在がみられる樽前b降下軽石堆積物(Ta—b)は、今回の発掘区内では、確実な検出例はなかった。

次に、攪乱層について簡単に説明する。A、B層が、耕作に関連した土層である。

A層 暗渠排水溝などに詰まった、ローム粒を点在させる黒色土。

B層 いわゆるイモ穴など、農耕に伴う攪乱ピットを充填する耕作土。

C層 太平洋戦争時の塹壕に入れられた埋土。黒色土とロームが不整に互層を成す。下地面では、厚は1~2cmの有機質に富む黒色土の分布する部分が多くかった。

T.P.層 昭和57年8月の道教委による範囲確認調査の試掘穴の埋戻し土で、ロームブロックを混在させた耕作土が主体である。

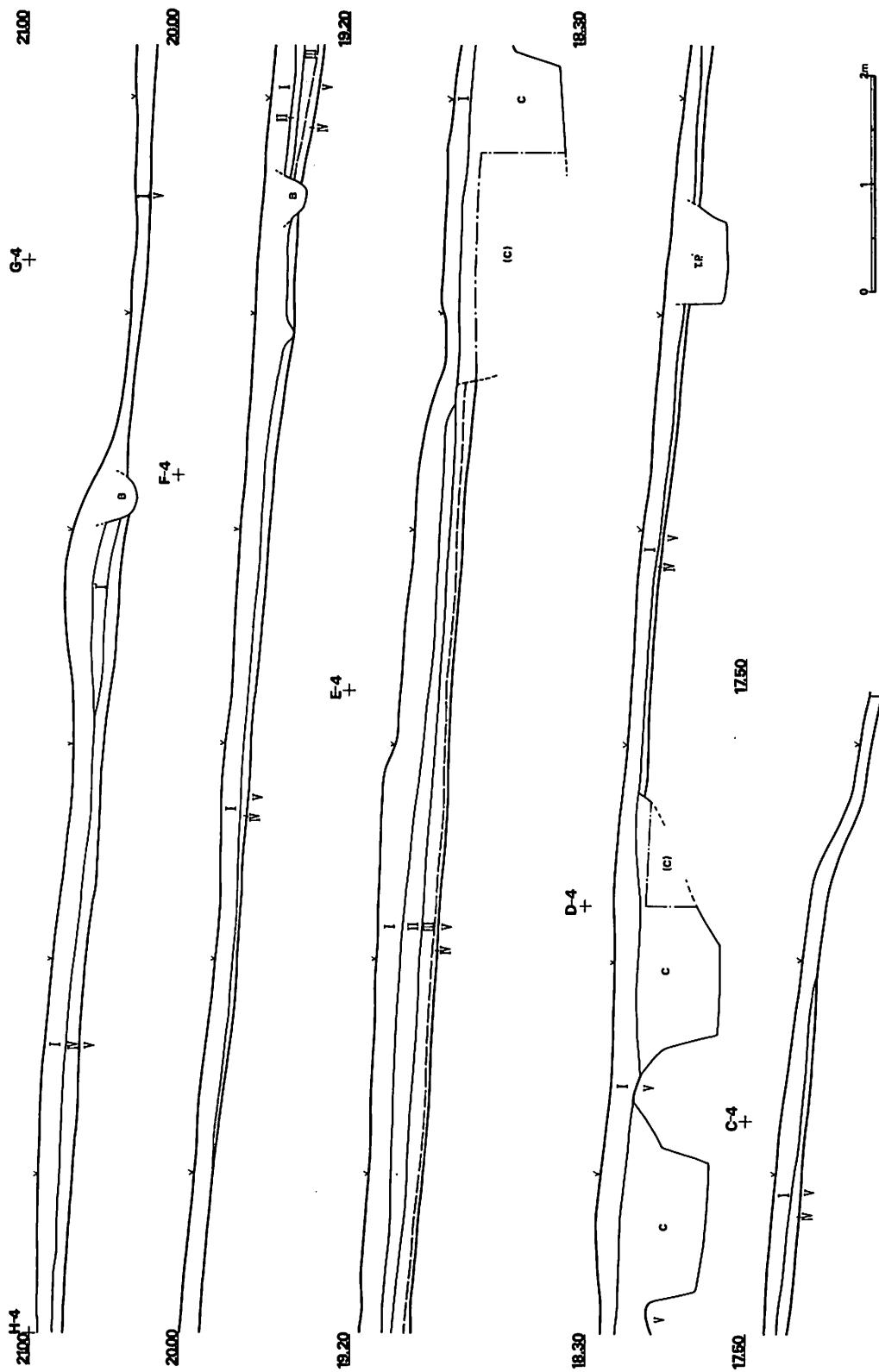


図4 発掘区断面実測図(1)

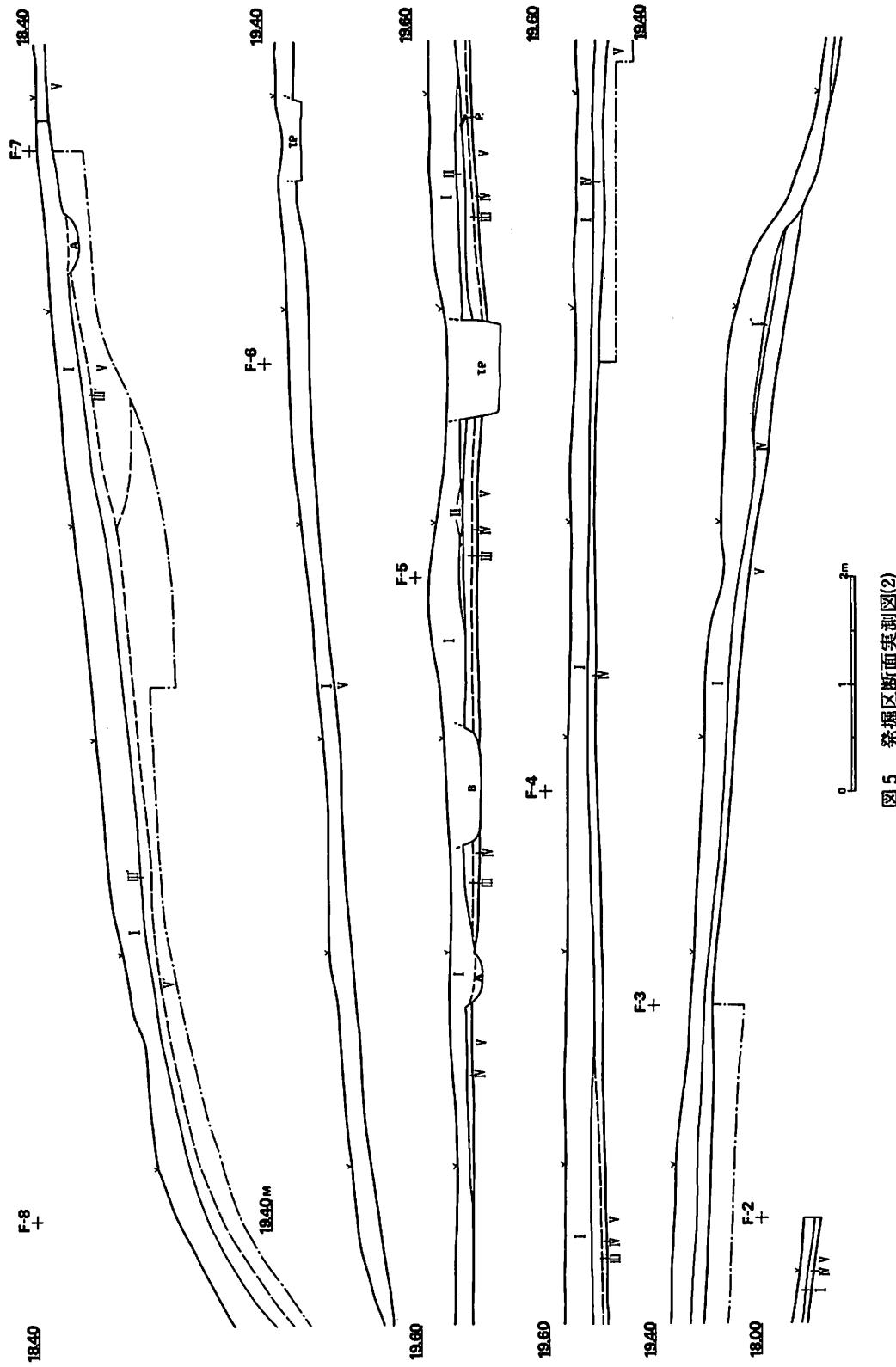


图 5 焰掘区断面实测图(2)

6. 遺物の分類

(1) 土 器

土器の分類にあたっては当センターの分類基準（北埋文 1981）を使用し、時期による区分を行った。縄文時代早期に属する資料をI群として、以下順次前、中、後、晚期をII群、III群、IV群、V群とした。縦縄文時代に属する資料はVI群、擦文時代に属する資料はVII群とした。

I群—縄文時代早期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類され、後者はさらにb-1～4の4類に細分される。

a類：貝殻腹縁文、条痕文のある土器群

b類：縄文、燃糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等のある土器群

b-1類：東釧路III式に相当するもの

b-2類：コッタロ式に相当するもの

b-3類：中茶路式に相当するもの

b-4類：東釧路IV式に相当するもの

今回の調査では、b-3類が少数出土した。

II群—縄文時代前期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類されるが、前者はさらにa-1、a-2の2類に細分される。

a-1類：網文土器とそれに伴う斜行縄文、羽状縄文、組紐回転文等の施された土器群

a-2類：中野式に相当するもの

b類：円筒土器下層式、および植苗式から大麻V遺跡出土資料に相当するもの

今回の調査で得られた土器の大半は、本群のa-2類に分類され、a-1類、b類は出土していない。

III群—縄文時代中期に属する土器群

今回の調査では出土していない。

IV群—縄文時代後期に属する土器群

今回の調査では出土していない。

V群—縄文時代晚期に属する土器群

本群はa、b、cの3類に分類される。

a類：大洞B・BC式に相当するもの

b類：大洞C₁・C₂式に相当するもの

c類：大洞A・A'式に相当するもの。タンネトウL式を含む。

今回の調査では、c類が少数出土した。

VI群—縦縄文時代に属する土器群

VII群—擦文時代に属する土器群

(2) 石 器

本遺跡から出土した石器群については、そのほとんどが、II群a - 2類の土器に伴うものである。

そこで、これらの石器群を I ~ X群に大別し、さらに、形態などによって細別した。しかし、石刀鎌・石のみ・石鋸・石錐・石核については、今回の調査で検出されなかった。

以下、石器の分類基準を示し、図・計測値・グラフを掲載する。

<I群> 石鎌・石槍

A : 石鎌

- 1 : 石刀鎌
- 2 : 細身で薄いもの
 - a : 柳葉形のもの
 - b : 五角形のもの
- 3 : 三角形のもの
 - a : 基部が直線的なもの
 - b : 基部が内湾するもの
- 4 : 茎が明瞭にみられないもの
- 5 : 茎をもつものの

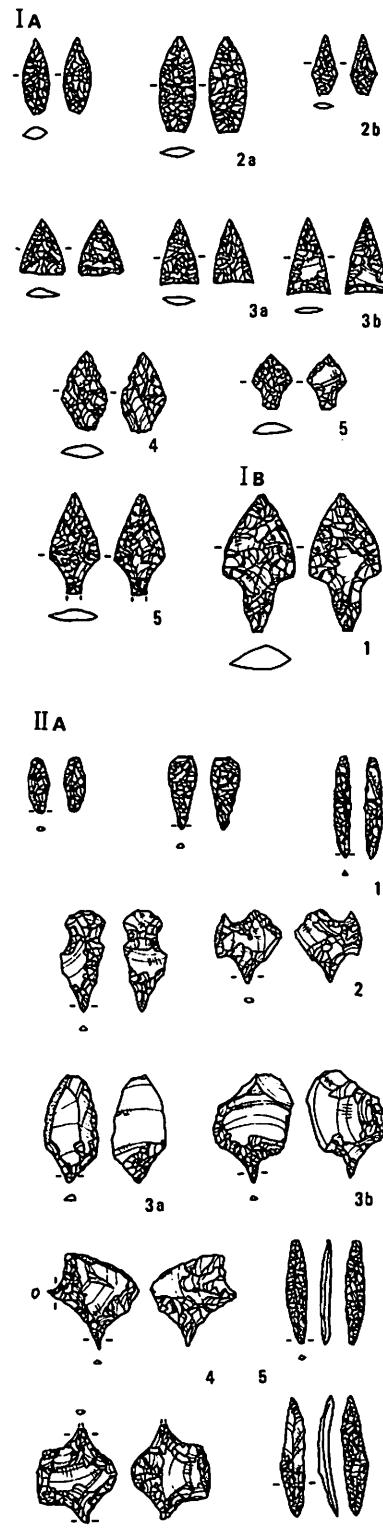
B : 石槍

- 1 : 茎をもつものの
- 2 : 茎が明瞭にみられないもの

<II群> 石錐

A : 石錐

- 1 : 棒状のもの
- 2 : つまみをもつものの
- 3 : つまみが無いもの
 - a : 周辺のみ加工したもの
 - b : 刺突部を顕著に作出したもの
- 4 : 刺突部を2つ以上もつものの
- 5 : 縦長で側面が湾曲するものの



〈III群〉 ナイフ・スクレイパー

A : つまみ付きナイフ

(縦形: 1 ~ 3, 横形: 4 ~ 7)

1 : 両面加工のもの

2 : 片面加工のもの

3 : 周辺のみ加工したもの

a : 両面に周辺加工が施されるもの

b : 片面に周辺加工が施されるもの

4 : 両面加工のもの

5 : 片面加工のもの

6 : 周辺のみ加工したもの

a : 両面に周辺加工が施されるもの

b : 片面に周辺加工が施されるもの

7 : つまみ部の直下に刃部があるもの

B : スクレイパー

1 : 石べらと称されるもの

a : 三角形で両面加工のもの

(台形のものも含む)

b : 三角形で片面加工のもの

(台形のものも含む)

c : 四角形で両面加工のもの

d : 四角形で片面加工のもの

2 : ラウンドスクレイパー

3 : サイドスクレイパー

a : 刃部が張り出すもの

b : 刃部が直線的なもの

c : 刃部が内湾するもの

d : 刃部が尖頭状のもの

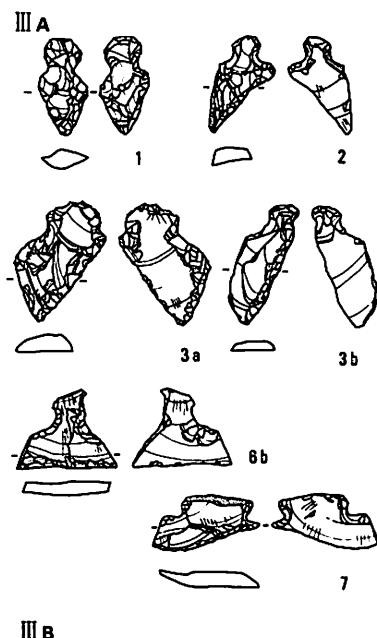
e : 上記以外のもの

4 : エンドスクレイパー

a : 刃部が張り出すもの

b : 刃部が直線的なもの

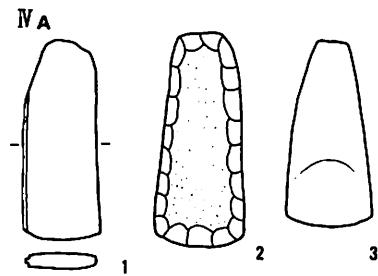
5 : 不定形のもの



〈IV群〉 石斧類

A : 石斧

- 1 : 擦切手法によって製作されたもの
- 2 : 打ち欠きによる整形がみられるもの
- 3 : 全面磨製のもの
- 4 : 素材を大きく変形することなく、刃部のみに磨きがみられるもの

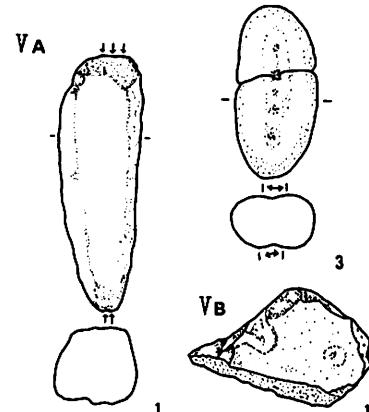


B : 石のみ

〈V群〉 たたき石・台石類

A : たたき石

- 1 : 棒状の一端、もしくは両端にたたき痕がみられるもの
- 2 : 扁平碟の周辺にたたき痕がみられるもの
- 3 : 扁平碟の腹、背面にたたき痕がみられるもの
(一般にくぼみ石とされている)

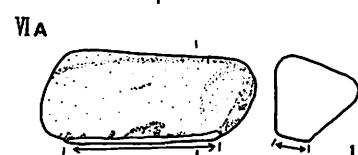


B : 台石 (板状の面の平坦面に使用痕がみられるもの)

〈VI群〉 すり石・石皿類

A : すり石

- 1 : 断面が隅丸三角形の碟の稜をすったもの
- 2 : 扁平碟の側縁をすったもの



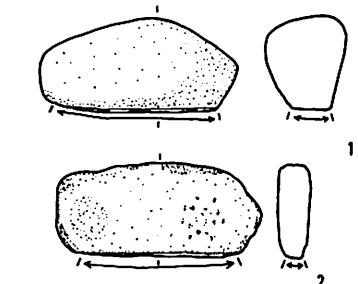
B : 石皿

〈VII群〉 石鋸・砥石類

A : 石鋸

B : 砥石

- 1 : 研磨面に溝があるもの
- 2 : 研磨面だけのもの



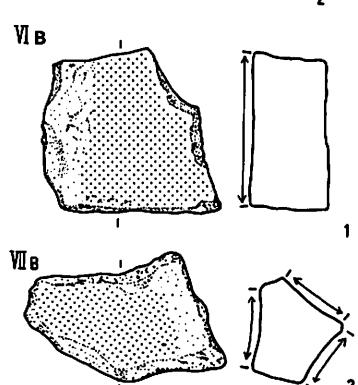
〈VIII群〉 石錘類

〈IX群〉 石核・剝片類

A : 石核

B : 剥片・碎片

〈X群〉 加工痕・使用痕のみられる剝片・碟



II. 遺構

本調査によって、縄文時代前期に属すると思われる土壙が5基と、近年の塹壕とが検出された。それらについて、以下に説明する。

1. 土 壙

(1) P-1 (図6, 図版4-1)

位 置: F-5-a

平面形: 隅丸長方形

長軸方向: 東北東-西南西

規 模: 壇口部 $1.31 \times 0.57\text{ m}$ 壇底部 $1.21 \times 0.43\text{ m}$

深さ 0.16 m

摘要: 第III層中で確認された土壙である。床面は、第V層を掘り込んだもので、ほぼ平坦に近く、固く締まっている。壁は、南側がやや緩く立ち上がるが、ほかは直立する。

遺物は、床面直上から覆土中にかけて、礫片が検出された。うち1点は、大型の礫で、南西の壁に沿って出土した。ほかは、東側に集中し一部、熱を受けている。

(2) P-2 (図7, 図版4-2・3)

位 置: E-3-C

平面形: 長円形

長軸方向: 東-西

規 模: 壇口部 $1.52 \times 0.62\text{ m}$ 壇底部 $1.24 \times 0.38\text{ m}$

深さ 0.25 m

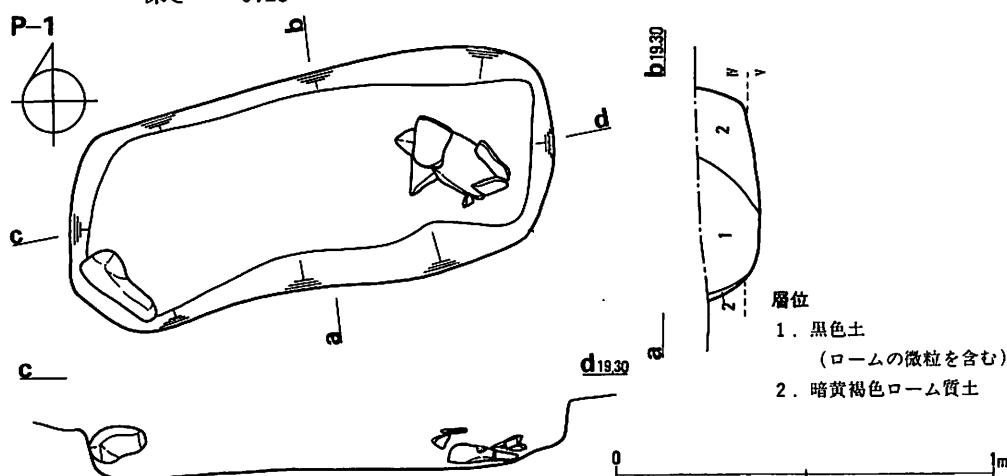


図6 P-1 実測図

P-2・3

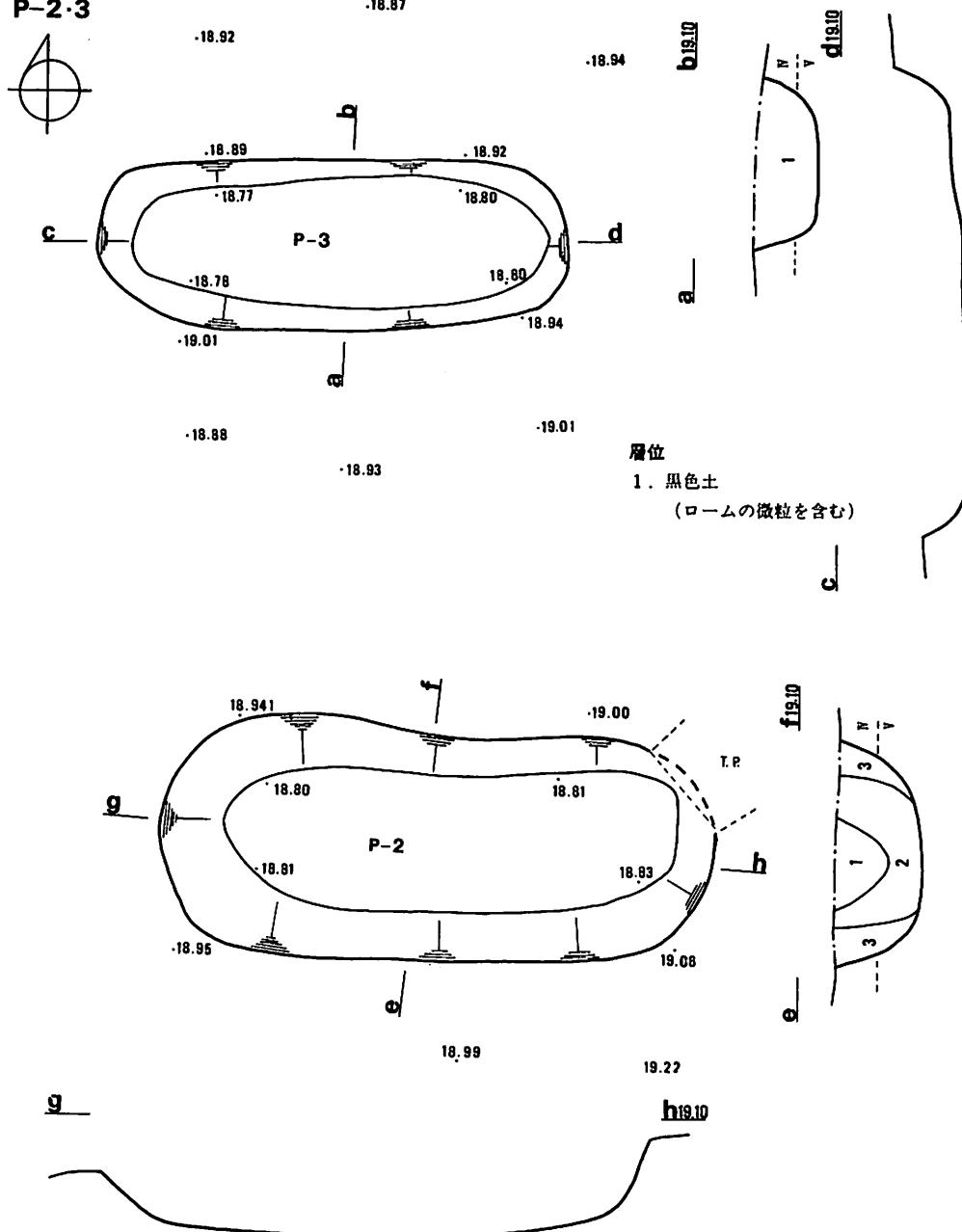


図7 P-2・3 実測図

摘要：P-1と同様に第III層中で確認されたものである。床面は、第V層を掘り込んで、黄褐色ローム質土が固く締まる。壁もほぼP-1と同様であるが、西壁は傾斜が緩い。また、北西の壁が一部、テストピットによって壌口部を切られている。遺物は、第1層中より、黒曜石片・II群a-2類の土器片が数点出土した。

(3) P-3 (図7, 図版4-3)

位置：E-3-C

平面形：長円形 長軸方向：東-西

規模：壌口部 1.30×0.47 m 壌底部 1.51×0.36 m

深さ 0.18 m

摘要：P-2と並んで検出された。底面は、固く締まり、壁はほぼ直立する。P-1、P-2と同様の形態である。層堆積は、1層のみで、黄褐色土の混入は見られない。

遺物は、覆土中より、II群a-2類の土器片が1点検出されたのみである。

(4) P-4 (図8, 図版5-1)

位置：C-4-b

平面形：不整円形 長軸方向：東-西

規模：壌口部 0.88×0.75 m 壌底部 0.39×0.36 m

深さ 0.30 m

摘要：西向き斜面にある。V層に掘り込まれた小ピット。壁・底とも固く締まっており、底に小さなくぼみをもつ。壌口部の東西に幅狭の段を有する。出土遺物はない。

(5) P-5 (図8, 図版5-2)

位置：D-5-b・c

平面形：隅丸長方形 長軸方向：東北東-西南西

規模：壌口部 1.97×0.53 m 壌底部 1.67×0.34 m

深さ 0.20 m

摘要：西側では第V層に至るまで削平してしまったが、東半分ほどは第IV層を切り込んで構築された状態を確認できた。壌底面の西寄りの一部がポンヤリした暗灰黄褐色ローム質土に化していたため、結果的には 29×14 cm、深さ 3 cm の浅い皿状に掘れたが、これは単なる壌底面の汚れで、本来的には、意図的な掘り込みはなかった可能性が強い。これを除くと、壌底面はほぼ水平な平坦面として捉えうる。壁の掘り込みは比較的急角度で、遺物の出土は全くなかった。なお、図版にみられる中央部の深掘りは、壌底面を断面観察によって確認したものである。

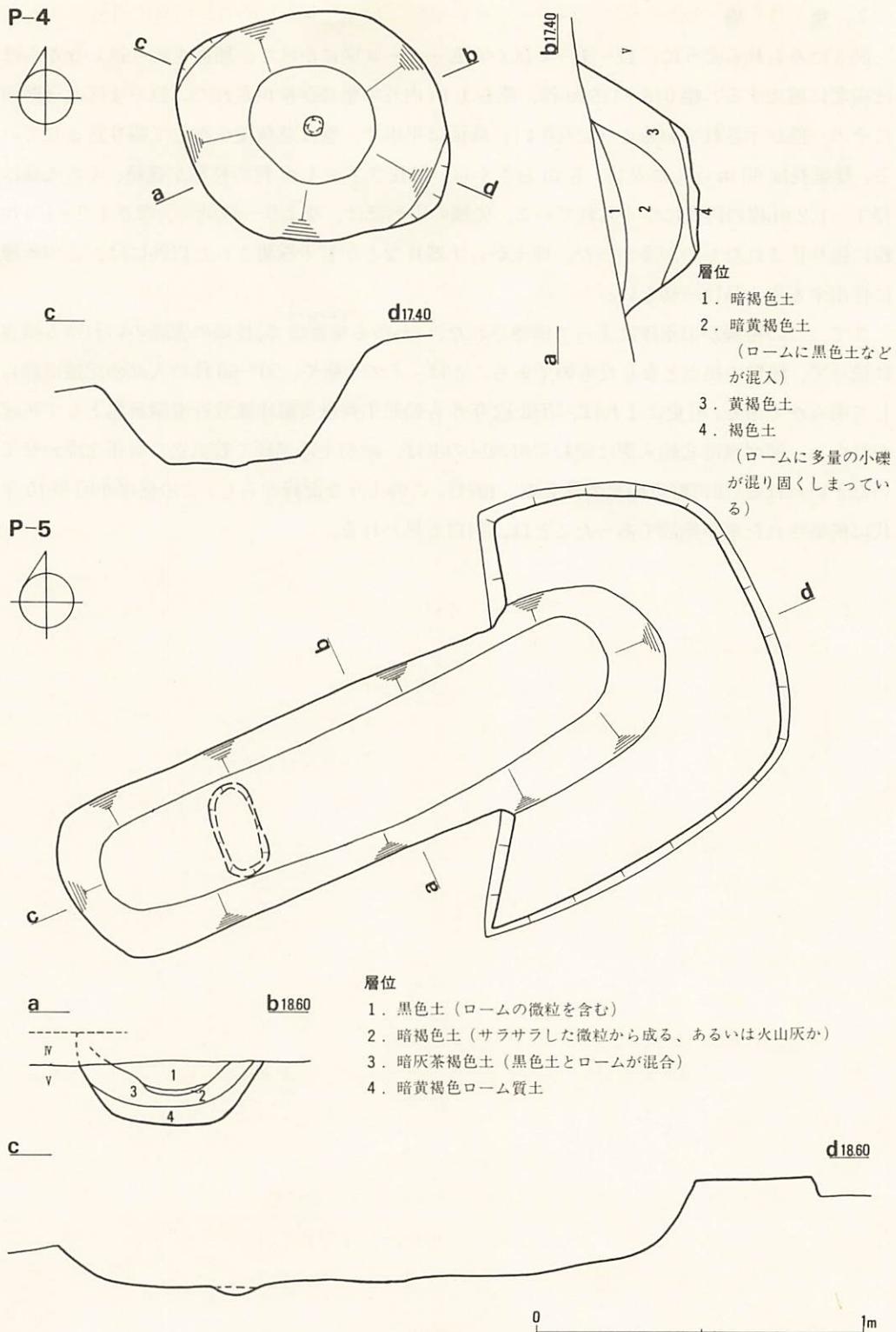


図8 P-4・5実測図

2. 壕

図3にみられるように、D-1-c区からE-6-a区にかけて、屈曲を繰り返しながらほぼ南北に縦走する、幅0.8~1.5m程、深さ1m内外の壘壕が検出された。D-4区北壁断面にその一部が示されているように(図4)、底面は平坦で、壁は急角度をなして掘り込まれている。総延長は60m近くに及び、5mおきくらいに長さ2~4m程の枝壕が連結、その先端は径1~1.2m程の円形につくられている。先端の円形部は、壕より一段低く、深さ1.2~1.5m程に掘り込まれたものが多かった。埋土から土器片などが若干採集された以外には、この壘壕に伴出する出土品は一切ない。

さて、この壘壕が旧軍隊によって構築された、いわゆる掩蔽壕^{えんがいごう}で、枝壕の先端のいわゆる哨壇に倚って、銃撃の拠点となしたものであることは、その形態や、50~60代の人々の記憶に照らして明らかである。町史によれば、昭和12年から船舶工兵隊舟艇庫建設近海演習場として軍隊が駐屯し、浦河漁港北船入洞に望む堺町地区の浜は、敵前上陸訓練で殺氣立つ緊張を漂わせていたといわれる(浦河町史編纂委員会編 1971)。このような記録からも、この壘壕が昭和10年代に構築された軍事施設であったことは、明白と思われる。

III. 発掘区出土遺物

1. 土 器

今回の発掘調査で得られた土器片は、12,000点余である。その大半はII群a-2類土器であり、このほかの土器は1%にも満たない出土点数である。層位的にみると、I群土器は第III層、V-VIII群土器は第I・II層からのみ、出土している。II群土器は、第I・II・III層の各層で出土しており、第III層からの出土が多い。平面的な分布では、発掘区中央部、D・E-3区周辺と台地の縁にあたるB・C-5区、E-7区、F-6区などに濃密である。いずれも、II群a-2類土器が主体を占め、I群土器の出土はG-5区、VII群土器のそれはF-4区・G-7区に限られていた。

I群土器（図10-1～4）

1～4はG-5区第III層から出土し、同一個体と思われる。薄手で、色調は表裏ともに黄褐色である。隆起線と絡条体压痕による文様が施されており、日高地方では、田原B式土器（藤本 1962）として知られている土器に相当する。

II群土器（図9、図10-5～図19-205）

今回の調査で、最も多くの資料が得られたII群土器は、胎土に纖維を含む厚手の縄文尖底土器である。ここでは、その文様から、以下の4つに細分した。ただし、この分類は、必ずしも時間差に基づくものではない。

A：土器の表裏に縄文が施されているもの。

B：斜行縄文が施され、内面に施文されないもの。斜行縄文のほかに、横走縄文と思われる土器も、ここに含めた。

C：羽状縄文の施されたもの。

D：口縁部に肥厚帯をもつもの。

なお、A、C、Dに分類した土器は、出土数が少なく、ほぼその全例を図示してある。また、縄文原体の表記にあたっては、基本的に、山内清男氏の方法（山内 1979）に従った。

A：図10-5～9で、縄文が土器の表裏に認められるものである。

5は口縁部破片で、焼成後に穿たれた孔がある。7の内面の中央部には、親指大のへこみが認められる。また、その器具は不明であるが、沈線様の搔き跡も認められる。5～7とともに、表裏の縄文の原体はLRである。8・9は、内面に縄文が転写された土器である。文様ではなく、縄文の压痕ともいえるものである。すでに縄文の施された土器に、粘土を重ねて焼成し、それが剥落したものであろう（図版14-4）。

B：図9、図10-10～図19-196で、斜行縄文（横走縄文）の施された土器である。縄文に使用された原体には、LR、RL、R、Lの4種類が認められる。LR原体が大半を占め、以下、

RL、R、Lの順に、点数が少なくなる。この使用原体によって、便宜的な区分を行い、B-i : LR 原体による縄文の施された土器、B-ii : RL 原体による縄文の施された土器、B-iii : R 原体による縄文の施された土器、B-iv : L 原体による縄文の施された土器とした。以下、この区分に沿って説明を加える。

B-i (図9、図10-10~図17-170)

図9-1は底部を欠いているが、丸底をなす深鉢と思われる。口径はおよそ35cm、現存する器高は、23.5cmである。口唇は平坦で、断面は角状を呈する。平面図には図示されていないが、口縁部に補修孔と思われる孔が穿たれている。内面は滑らかに調整されているが、下部にいくと滑らかさが失われ、細かなひびが多数認められる。表面の色調は上半部で黒褐色、下半部で赤褐色を呈している。2は丸底の底部である。赤褐色を呈する表面は、摩滅のため、縄目が不明瞭である。内面は茶褐色で、滑らかに調整された様子が窺える。胎土には、纖維の混入とともに、小礫の混入が多い。3は円錐形をなす、尖りぎみの底部である。縄文は、尖底部にも施されている。内面は1と同じく、滑らかさが底部近くで失われている。

10~100、103は、口縁部破片である。口唇の形状には、平坦面をもち、断面角状を呈するもの、丸味を帯びた山形の断面を呈するもの、および、その中間の形状を示すものとがある。10~34は、平坦に作出されたものである。これらの土器では、縄文が整然と施されており、内面も滑らかに調整される傾向がある。その中でも、10は、条の傾斜が他に較べて水平に近い。また、口唇の縁に、平坦面を作出する際に生じた、粘土のはみだしが残る例がある。35~85は、口唇の平坦面の幅が狭く、山形の断面を呈するものと角状のものとの中間的形状を示している。口唇の形状以外に、内面の滑らかさ、焼成状態が、先述した平坦面をもつものより劣る傾向がある。個々の土器をみると、37は、口唇の粘土のはみだしが著しく、底のようになっている。43では、内面に意図の不明な段がついている。44と55には、焼成後に穿たれた孔がある。54は、縄目が浅い。79は、口唇の円弧と割れ口側の円弧との差が大きく、ゆがんだ状態になっている。80にも、同様のゆがみが認められる。86~94は、口唇が丸味を帯び、山形の断面を呈するものである。口縁部が内反する傾向をもつが、内面調整や焼成状態は、先に挙げた中間的な口唇の形状を示すものと差がない。95~106には、縄文の節が比較的に大きく、条の間隔のあいた土器をまとめた。98~101は同一個体、103~106も、前者とは別の、同一個体と思われる。95~102は、内面調整が雑であり、焼成も良くないが、103~106は、内面が滑らかに磨かれ、焼成も良好である。

107~158は、胴部破片である。107~109は、条が横走している。縄文の走行以外には、特別な差は認められない。108の縄文原体はRLであるが、条が横走することから、ここに含めた。109は、底部近くの破片である。胴部の縄文が斜行していても、底部近くで横走、あるいは縦走してくる例が、この種の尖底土器には、しばしば認められる。このことから、109も、底部近くでのみ、条が横走しているのかもしれない。110~158は、条が斜行する土器である。この中では、土器の質感、内面調整による違いが認められる。110~141は、全体に硬質な感じを受け、

内面も滑らかに調整されている。142～153は、質感、内面調整において、先の土器よりいくぶん劣るものである。154～158は、全体に脆い感じを受け、内面調整も雑である。この土器には、縄文の節が、他に較べ、大きい傾向がある。

159～170は、底部、および底部近くと思われる土器片である。168～170は、縄文が施されではいるが、縄目が不明瞭であり、断面図だけを図示した。いずれも丸底である。165～167の底部破片も、丸底を呈すると思われる。166は、平底のようにもみえるが、168のように、全体としては、丸底といい得るものであろう。底部が、極端に肉厚になる例はない。また、これらの破片では、表面が赤褐色、内面は、茶～黒褐色を呈する例が多い。

B - ii (図 18)

171～174は口縁部、185～187は底部破片である。171、172の口唇は、平坦面が作出されており、内面も滑らかに調整されている。173、174は、同一個体である。口唇は平坦であるが、171、172に比べると、滑らかさがない。脆い感じを受ける土器で、内面調整も雑である。これらの土器は、使用された縄文原体が異なるだけで、そのほかにB - iとの違いは認められない。

B - iii (図 19-188～196)

188～191は、口縁部破片である。189は、口唇が肥厚し、外傾している。191は、口唇内側が剥落しているが、丸味を帯びた、山形の口唇と思われる。このグループは、出土数が少なく、図示したもののがそのすべてである。この中では、脆い感じを受ける土器が多い。

B - iv (図 19-197、198)

2点だけが出土している。197は口縁部、198は底部の破片である。両者ともに、赤褐色の色調を呈し、同一個体かもしれない。底部破片の曲率から、小型の土器と思われる。

C : 199～202で、羽状縄文が施された土器である。

199～201は、縄文が浅く、その節も不明瞭である。縄文、色調が以てることから、同一個体とも思われるが、199に結束の痕が確認されたのに対し、200、201では観察されない。202は、単節の原体による羽状縄文である。

D : 203～205で、口縁部に肥厚帯が認められる土器である。

いずれも口唇は平坦で、断面が角状を呈する。内面は滑らかに調整されている。ただし、その肥厚帯には、差が認められる。203、204の肥厚帯は、幅が狭く、厚みもわずかである。図 11-37にみられるような、口唇の粘土のはみだしを折りかえして、器体に密着させたものかもしれない。これに対して、205の肥厚帯は、幅も厚みもあり、意図的に巡らされた可能性が強い。縄文の原体は、3点とも LR である。

V群土器 (図 19-206～208)

206、207には、沈線文が施されている。208は薄手の土器で、焼成は良好である。表面には、炭化物が付着している。

VI群土器 (図 19-209、210)

図示した2点だけが出土した。隆起線による文様が描かれ、後北 C₁式に相当する。209の隆

起線の下位には、縞縄文が施されている。縄文原体は RL である。

VII群土器（図 19-211～219）

G-7 区で出土した 211～215、F-4 区で出土した 216～219 の、2 個体分の土器が得られている。211～215 は、口縁部が外反し、口唇直下には、刻みのつけられた隆起帯が巡っている。この隆起帯の下位には、肥厚部があり、ここで器体に段がついている。肥厚部には、中央に沈線を走らせた横走綾杉文が施されている。頸部から胴部にかけての文様帶も、横走綾杉文と沈線で構成される。さらにこれは、縦の沈線と綾杉文で区画される。216～219 では、口唇に刻みがつけられている。文様は、横走綾杉文を数段重ね、その最下段に横走沈線と点列が加えられている。

2 個体とも、編年的には、佐藤IV期（佐藤 1971）、擦文時代後期後半に位置づけられる土器である。

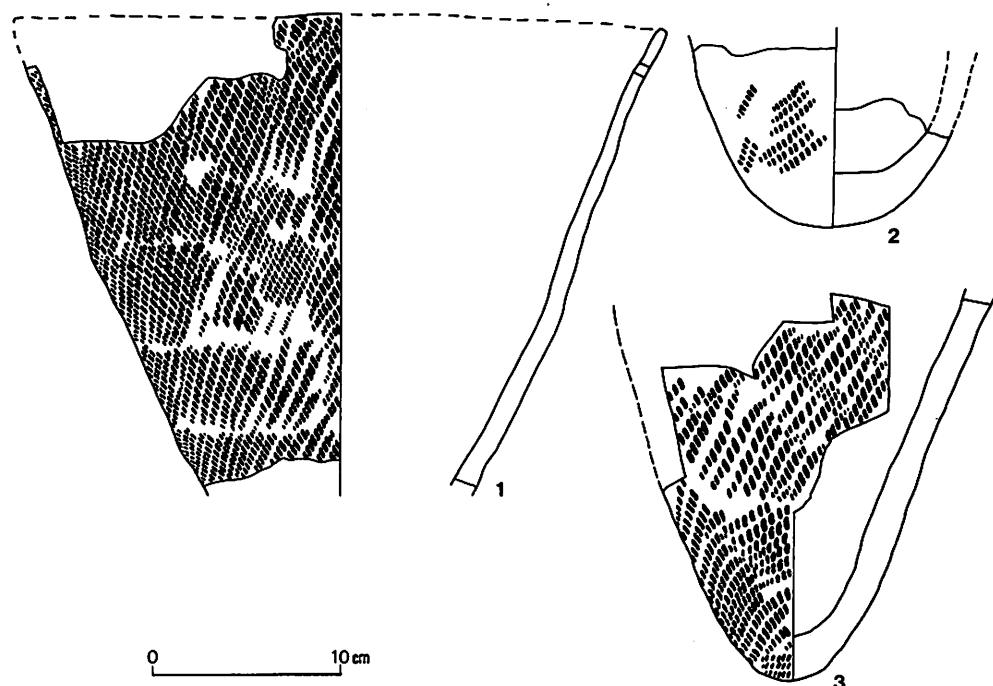


図 9 土器実測図



図 10 土器拓影図(1)

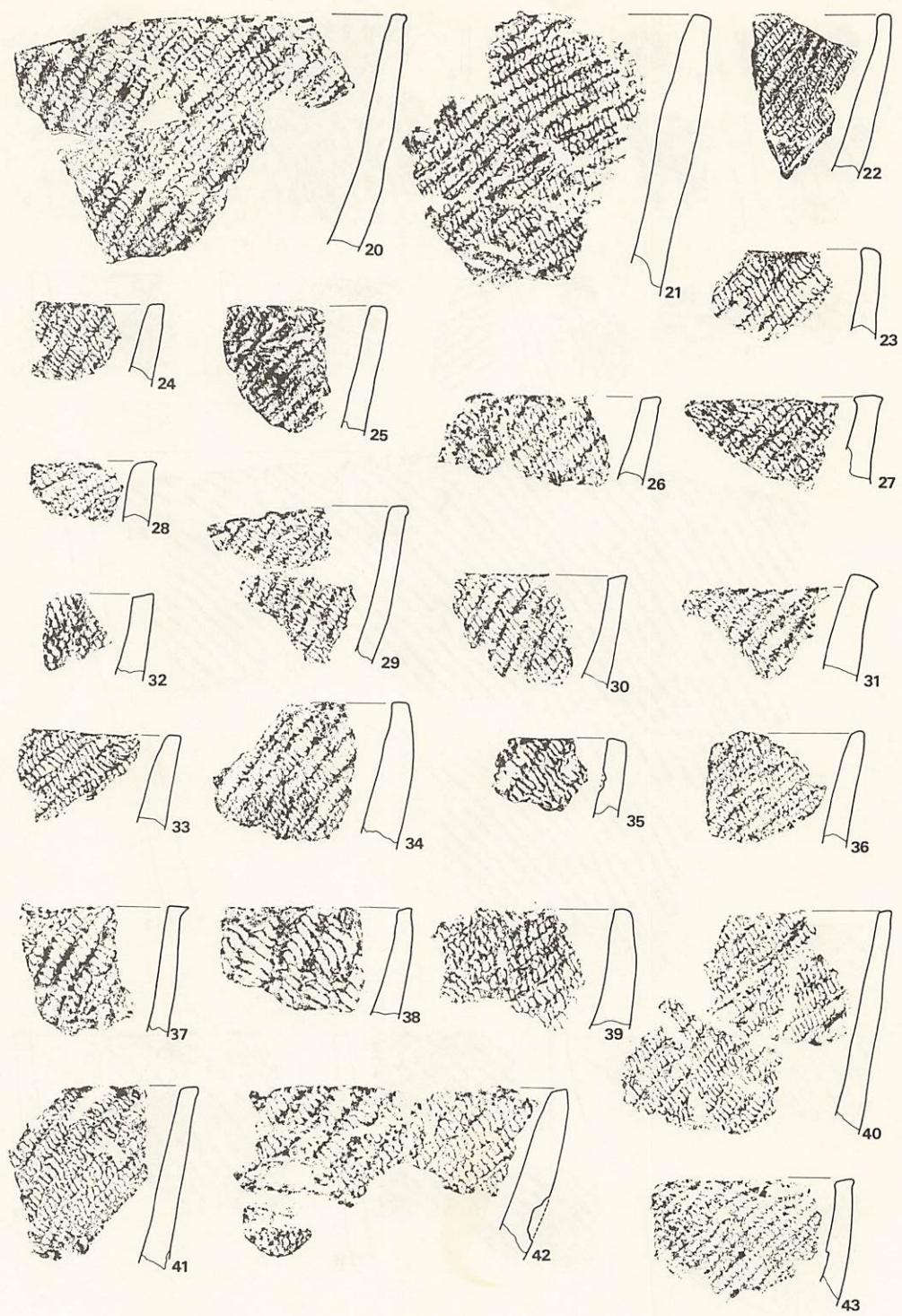


図 11 土器拓影図(2)

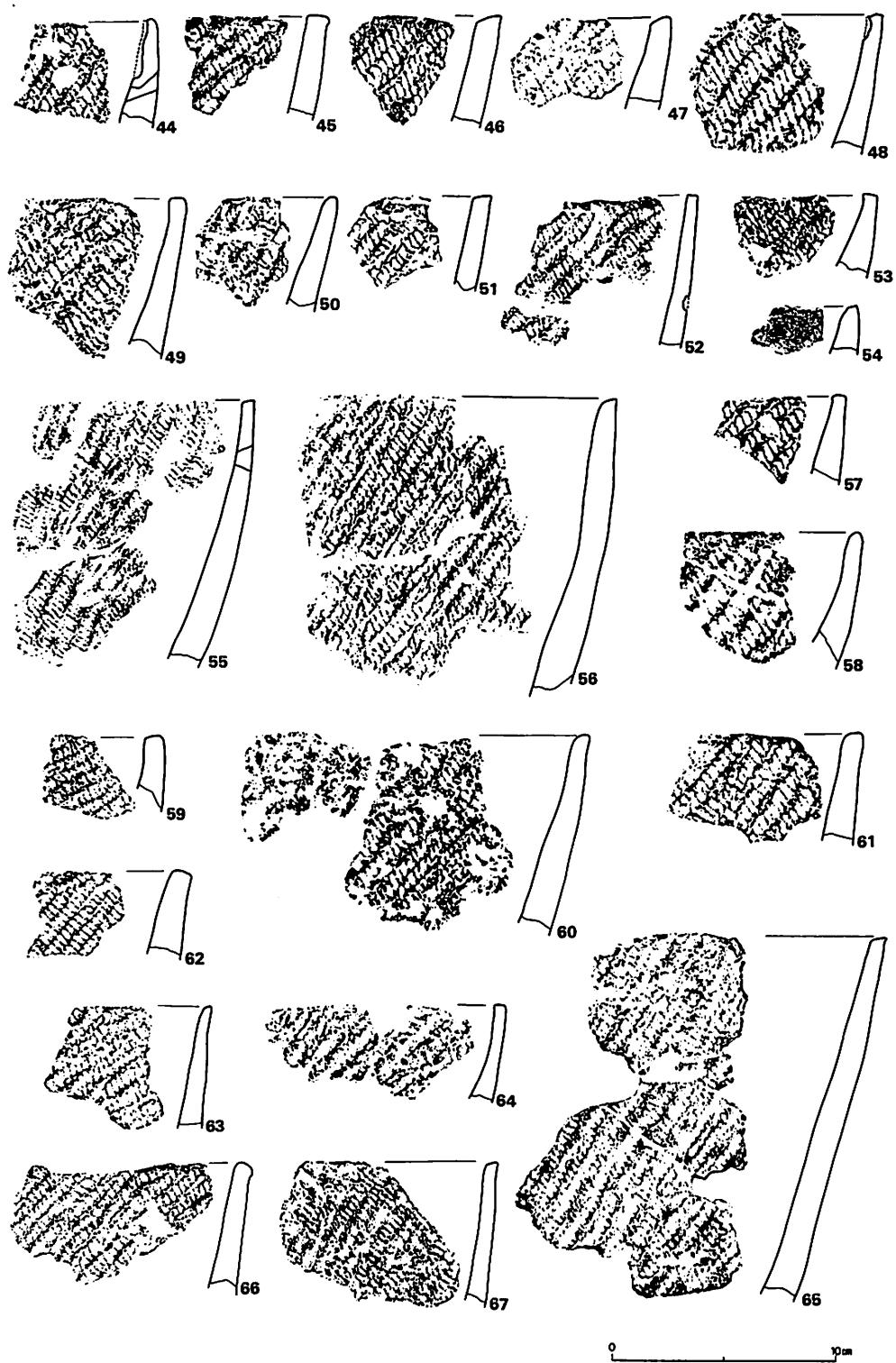
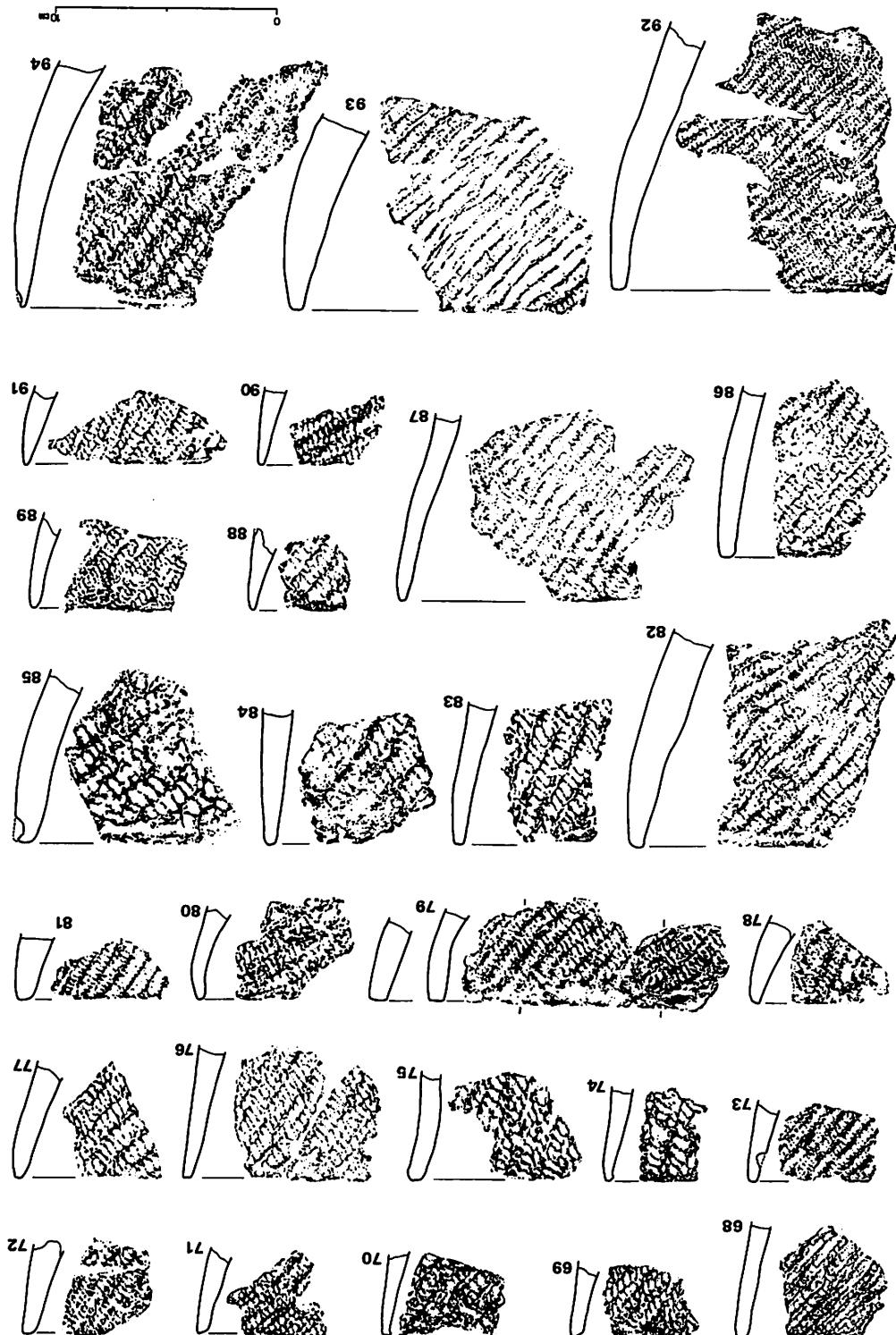


図 12 土器拓影図(3)

图 13 土器拓影图(4)



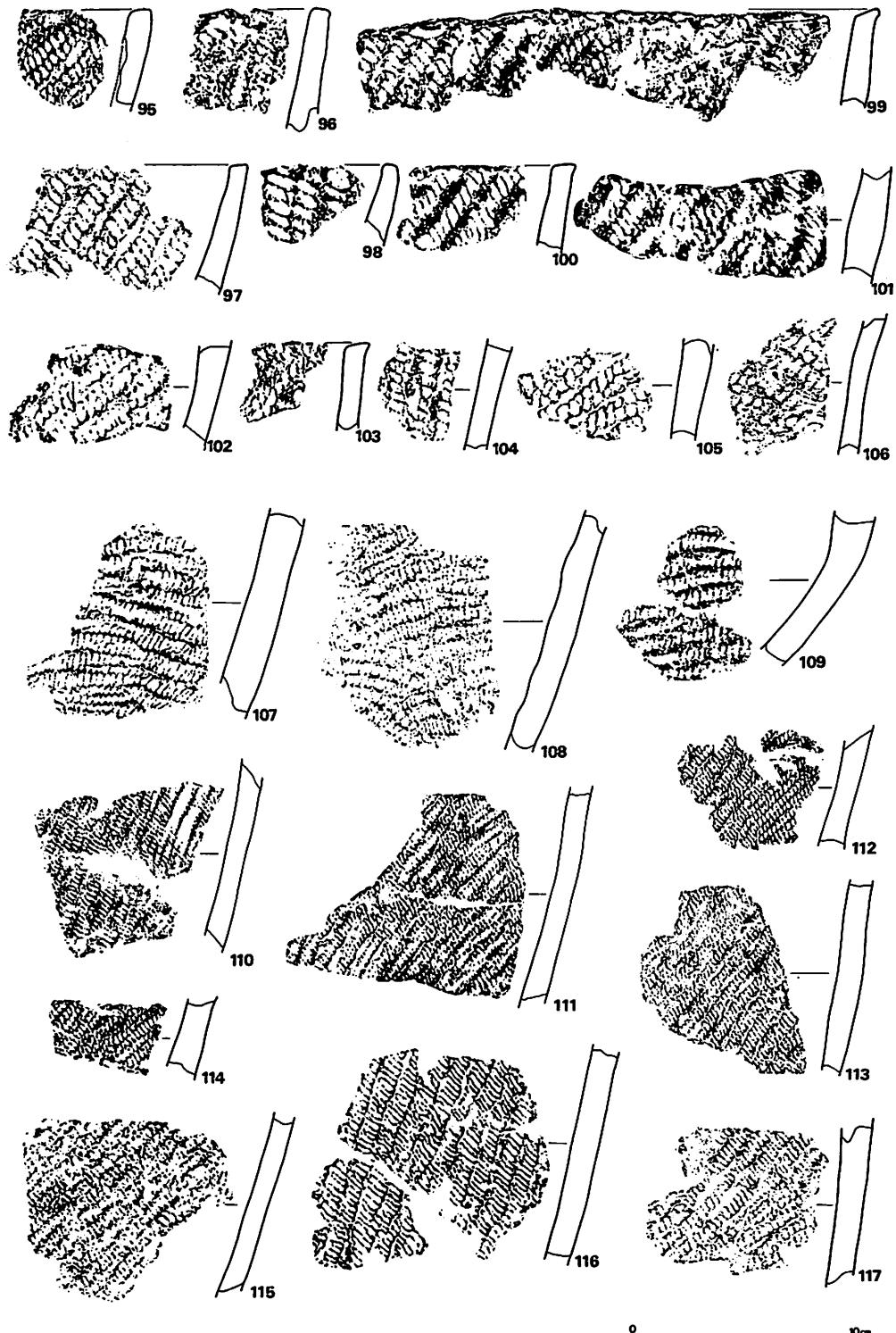


図 14 土器拓影図(5)

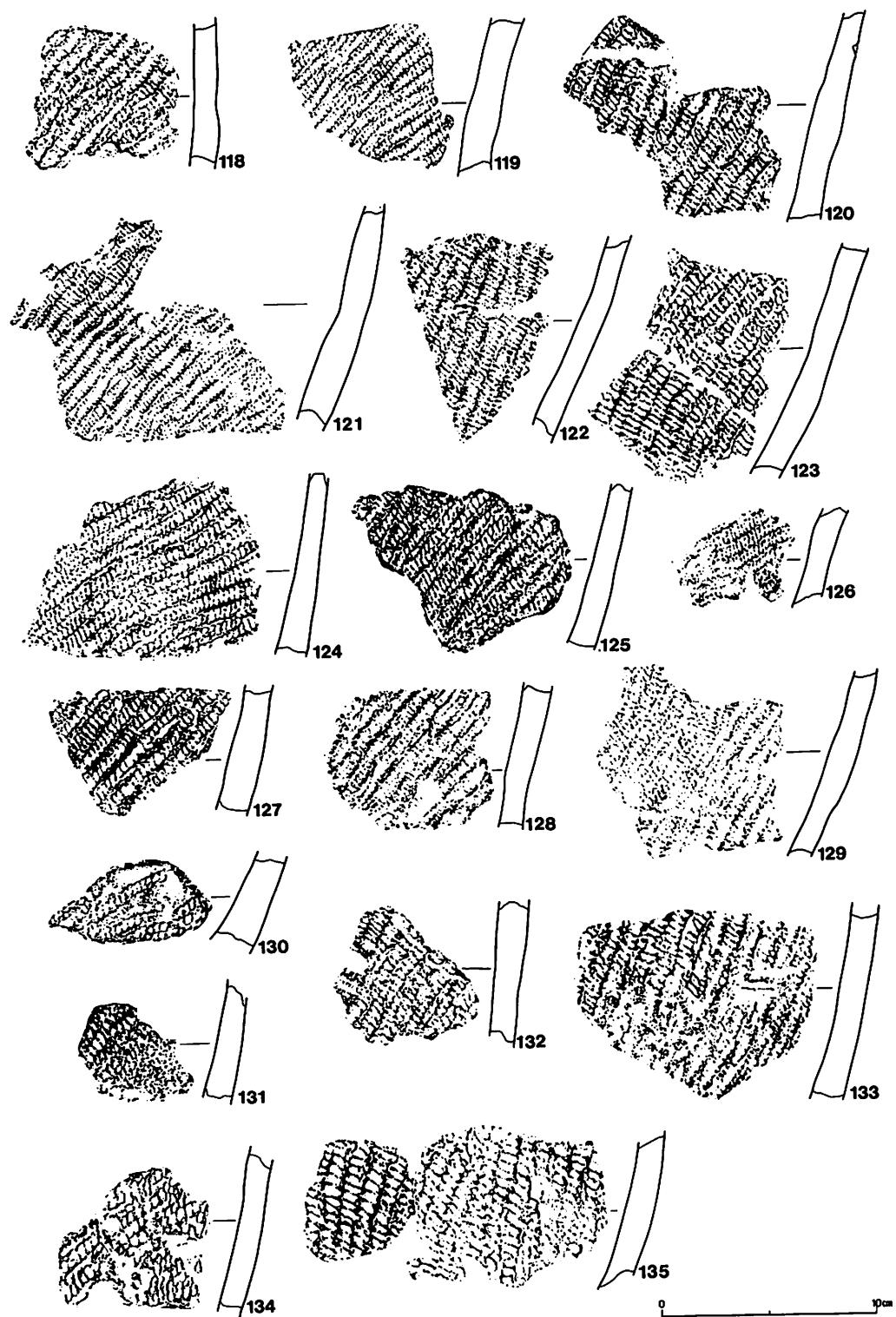


図 15 土器拓影図(6)

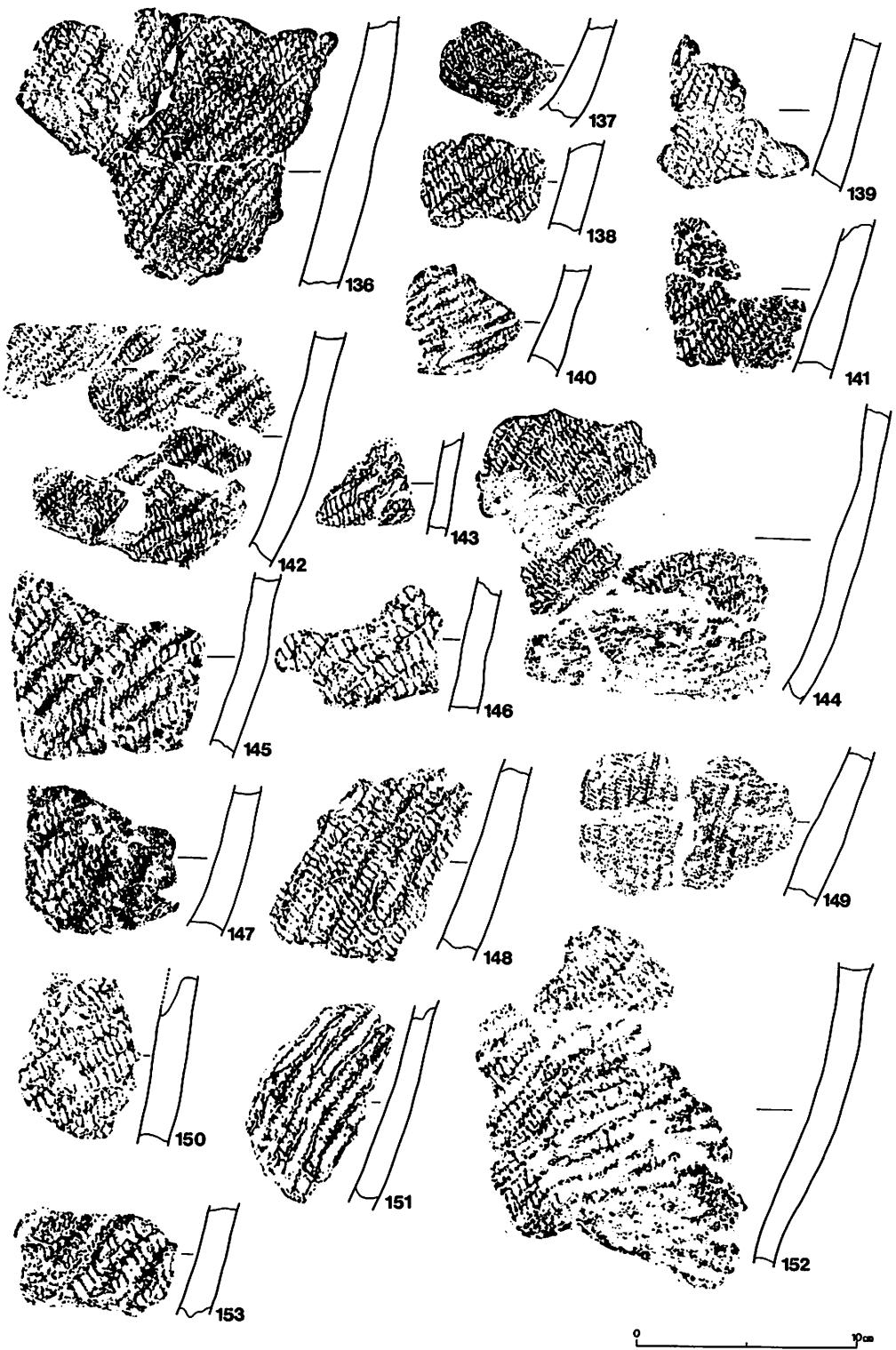


図 16 土器拓影図(7)

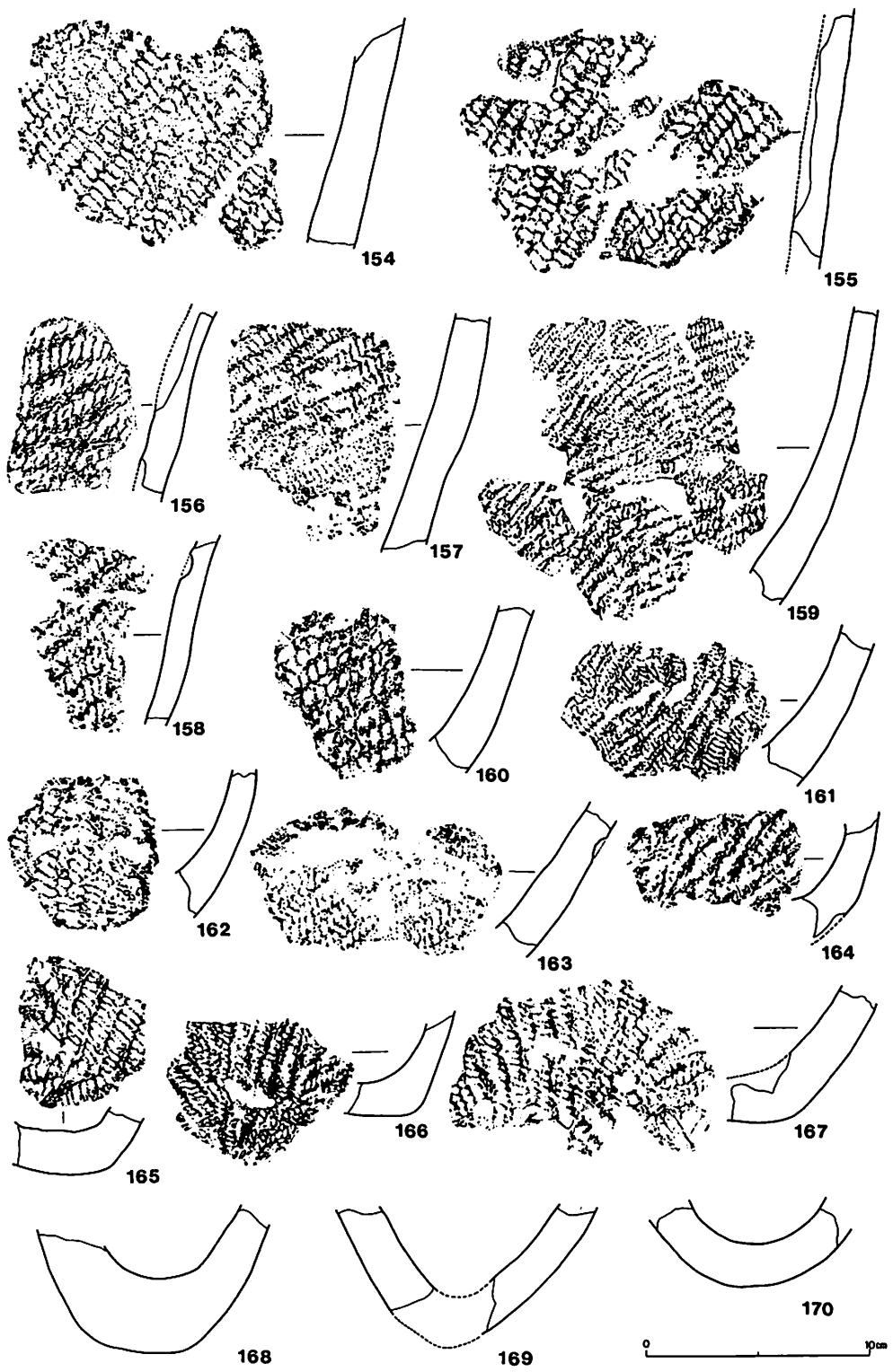


図 17 土器拓影図(8)

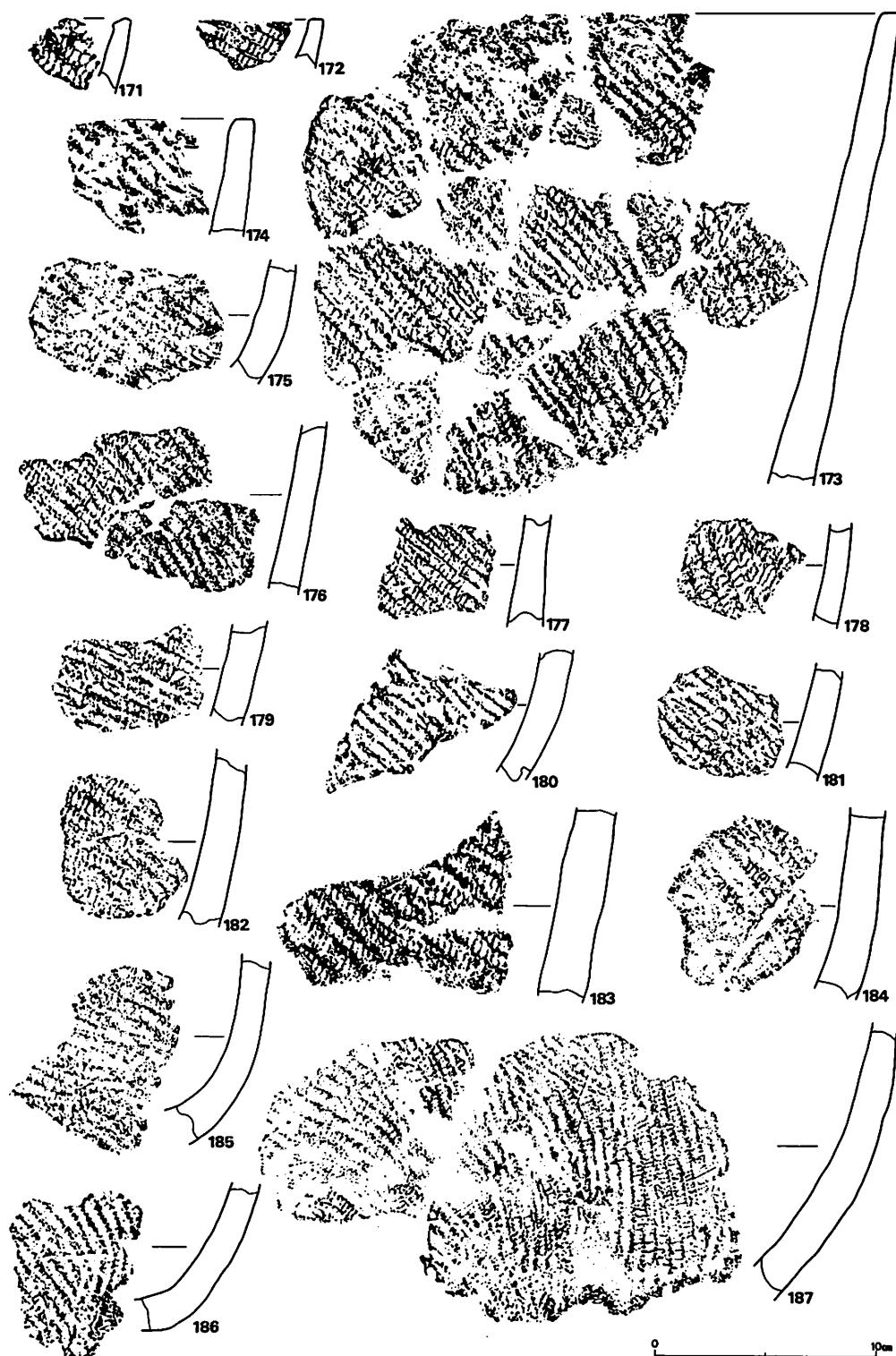


図 18 土器拓影図(9)

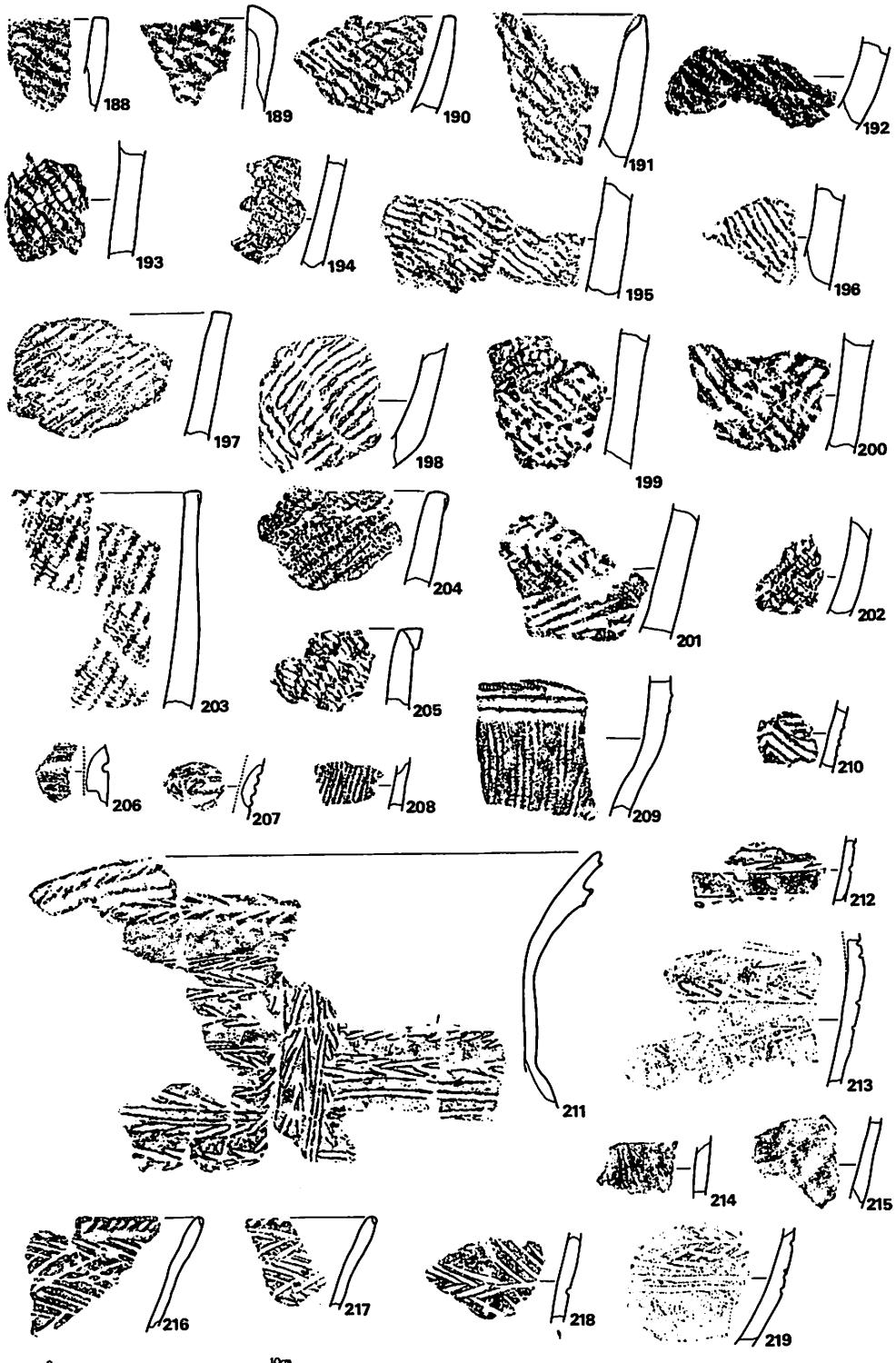


図 19 土器拓影図(10)

表1 掘載土器一覧表

掲図番号		発掘区	層位	分類	部位	掲図番号		発掘区	層位	分類	部位	
10	1	G-5-c	III	I b-3	胴	11	35	G-6-d	III	IIa-2	口	
"	2	"	"	"	"	"	36	E-7-d	-	"	"	
"	3	"	"	"	"	"	37	G-5-c	I	"	"	
"	4	"	"	"	"	"	38	F-2-c	I'	"	"	
9	1	D-4-d	II	IIa-2	口	"	39	D-3-c	II	"	"	
"	2	F-6-c	"	"	底	"	40	B-5-d	"	"	"	
"	3	"	"	"	"	"	41	D-3-c	"	"	"	
10	5	G-5-c	I	"	口	"	42	E-4-c	III	"	"	
"	6	E-7-d	-	"	胴	"	43	C-5-c	II	"	"	
"	7	C-5-c	II	"	胴	12	44	B-5-d	II	"	"	
"	8	D-4-d	"	"	"	"	45	C-5-a	"	"	"	
"	9	E-3-b	I	"	"	"	46	E-3-b	III	"	"	
"	10	D-3-c	II	"	口	"	47	D-4-c	II	"	"	
"	11	E-3-b	I	"	"	"	48	D-4-d	III	"	"	
"	12	E-7-d	-	"	"	"	49	F-6-c	III'	"	"	
"	13	D-3-a	III	"	"	"	50	F-3-d	II	"	"	
"	14	C-3-d	I	"	"	"	51	F-7-d	"	"	"	
"	15	E-3-a	"	"	"	"	52	C-5-d	"	"	"	
"	16	D-3-c	II	"	"	"	53	C-5-c	"	"	"	
"	17	E-7-d	III	"	"	"	54	E-3-b	III	"	"	
"	18	"	I	"	"	"	55	F-6-c	III'	"	"	
"	19	D-4-d	II	"	"	"	56	"	I	"	"	
11	20	F-6-c	III	"	"	"	57	E-3-b	III	"	"	
"	21	D-4-d	II	"	"	"	58	E-4-c	"	"	"	
"	22	"	I	"	"	"	59	D-3-c	II	"	"	
"	23	E-3-a	"	"	"	"	60	F-3-d	I	"	"	
"	24	D-3-c	II	"	"	"	61	E-1	-	"	"	
"	25	E-7-d	III	"	"	"	62	E-3-d	I	"	"	
"	26	G-3-a	I	"	"	"	63	F-2-a	I'	"	"	
"	27	E-7-d	I	"	"	"	64	F-4-c	III	"	"	
"	28	G-5	-	"	"	"	65	F-6-c	II'	"	"	
"	29	F-3-d	I	"	"	"	66	E-3	-	"	"	
"	30	E-3-a	I	"	"	"	67	G-4-b	I'	"	"	
"	31	D-3-c	B	"	"	"	13	68	E-4-a	III	"	"
"	32	E-4-a	II	"	"	"	69	G-5-b	II	"	"	
"	33	D-3-c	I	"	"	"	70	F-4-c	III	"	"	
"	34	E-4-c	III	"	"	"	71	F-7-d	I	"	"	

挿図番号	発掘区	層位	分類	部位	挿図番号	発掘区	層位	分類	部位
13	72	G-5-b	III	IIa-2	口	14	109	F-4-c	III
"	73	E-4-a	II	"	"	110	D-4-d	II	"
"	74	D-4-c	"	"	"	111	"	"	"
"	75	F-3-a	III	"	"	112	G-3-d	I'	"
"	76	E-3-b	I	"	"	113	D-3-c	II	"
"	77	E-4-a	III'	"	"	114	C-3-d	I	"
"	78	F-6-c	"	"	"	115	D-4-d	II	"
"	79	"	I	"	"	116	E-7-d	"	"
"	80	E-3-b	III	"	"	117	G-2-c	I	"
"	81	D-4-d	II	"	"	15	118	D-3-c	II
"	82	E-4-d	III	"	"	119	"	"	"
"	83	E-3-b	II	"	"	120	"	"	"
"	84	D-4-c	I'	"	"	121	D-4-d	"	"
"	85	F-3-d	II	"	"	122	E-3-b	III	"
"	86	C-5-c	-	"	"	123	C-3-a	I	"
"	87	E-7-d	II	"	"	124	E-7-d	-	"
"	88	D-5-b	"	"	"	125	"	-	"
"	89	B-5-d	III	"	"	126	C-5-c	II	"
"	90	E-3-b	I	"	"	127	G-5-c	II	"
"	91	G-4-b	II	"	"	128	F-3-d	I	"
"	92	C-5-c	I	"	"	129	D-4-d	III	"
"	93	E-3-a	"	"	"	130	D-4-c	II	"
"	94	E-7-d	I'	"	"	131	D-3-c	I	"
14	95	H-4-b	II	"	"	132	F-6-c	I	"
"	96	G-7-a	II	"	"	133	F-6-d	II	"
"	97	G-5-b	I	"	"	134	G-7-d	"	"
"	98	E-3-b	I	"	"	135	D-4-c	"	"
"	99	"	"	"	"	16	136	E-3-b	III
"	100	"	"	"	"	137	-	-	"
"	101	"	"	"	胴	"	138	C-5-c	I
"	102	F-3-b	III	"	"	139	E-3-b	-	"
"	103	E-3-b	"	"	口	"	140	"	I
"	104	"	"	"	胴	"	141	G-5-a	III
"	105	C-2-a	III	"	"	142	F-6-c	III'	"
"	106	E-3-b	I	"	"	143	D-3-c	II	"
"	107	G-7-a	II	"	"	144	F-6-c	I	"
"	108	E-7-d	-	"	"	145	E-4-c	III	"

挿図番号		発掘区	層位	分類	部位	挿図番号		発掘区	層位	分類	部位
16	146	B-5-d	II	IIa-2	胴	18	183	E-7-d	-	IIa-2	胴
"	147	E-3-b	I	"	"	"	184	E-3-b	II	"	"
"	148	E-4-c	III	"	"	"	185	E-7-d	I	"	"
"	149	G-6-d	"	"	"	"	186	D-4-d	II	"	"
"	150	E-3-d	II	"	"	"	187	E-3-b	"	"	"
"	151	F-7-c	"	"	"	19	188	E-3-b	I	"	口
"	152	F-6-c	III'	"	"	"	189	-	III	"	"
"	153	-	-	"	"	"	190	G-4-b	I	"	"
17	154	F-3-d	I	"	胴	"	191	D-4-d	II	"	"
"	155	F-3-d	I'	"	"	"	192	"	"	"	胴
"	156	G-4-b	"	"	"	"	193	F-5-b	III	"	"
"	157	D-3-c	I	"	"	"	194	C-5-a	II	"	"
"	158	C-5-a	III	"	"	"	195	F-6-c	III'	"	"
"	159	D-4-d	"	"	"	"	196	G-5-b	II	"	"
"	160	D-5-b	B	"	"	"	197	G-4-b	I'	"	口
"	161	G-4-b	I	"	"	"	198	"	I	"	胴
"	162	E-3-b	II	"	"	"	199	E-3-b	"	"	"
"	163	D-3-c	"	"	胴	"	200	"	"	"	"
"	164	D-4-d	"	"	"	"	201	"	"	"	"
"	165	E-3-b	"	"	"	"	202	"	"	"	"
"	166	G-3-c	I'	"	"	"	203	G-4-b	I'	"	口
"	167	C-2-b	III	"	"	"	204	E-3-b	II	"	"
"	168	F-4-d	I	"	"	"	205	E-7-d	III'	"	"
"	169	F-4-a	"	"	"	"	206	-	-	Vc	胴
"	170	G-5-c	III'	"	"	"	207	G-3-a	I'	"	"
18	171	E-3-c	II	"	口	"	208	G-5-b	II	"	胴
"	172	D-3-c	I	"	"	"	209	E-4-c	"	VI	"
"	173	F-6-c	III'	"	"	"	210	F-4	-	"	"
"	174	F-6-c	"	"	"	"	211	G-7-a	II	VI	口
"	175	G-3-a	I'	"	胴	"	212	G-7-a	"	"	胴
"	176	D-3-c	II	"	"	"	213	G-7-a	"	"	"
"	177	E-4-a	III	"	"	"	214	G-7-a	"	"	"
"	178	E-3-b	I	"	"	"	215	G-7-a	"	"	"
"	179	D-3-c	II	"	"	"	216	F-4-b	I	"	口
"	180	E-3-b	II	"	"	"	217	F-4-c	II	"	"
"	181	C-3-d	III	"	"	"	218	F-4-b	I	"	胴
"	182	E-4-c	"	"	"	"	219	F-4-b	"	"	"

2. 石 器

今回の調査によって出土した石器は、剥片石器 1,911 点、礫石器 323 点である。これらの石器は、すべて発掘区から得られたものであるが、本遺跡は、II群 a - 2 類の土器を主体としており、石器のほとんどは、これに伴うものである。石器の器種は、石鎌・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・たたき石・台石・すり石・石皿・砥石などがある。しかし、石錐や石核など 1 点も検出されていないものもあり、本遺跡の石器組成から遺跡の性格を考える上で、注意すべき課題であろう。

(1) 剥片石器

石鎌 (図 20~22-1~107, 図版 15)

本遺跡から出土した石鎌は、321 点である。そのうち、107 点を図示した。石質は、すべて黒曜石である。

I A 2 a : 1~8 に該当する。全体的に、狭長で薄い。5 は、入念な両面加工が施され、基底は幅が狭く、直線的になっている。8 は、長さ・幅ともやや大きめだが、厚さは 0.3 cm と薄く細かな調整剝離が両面に施されている。また、2~4 には、素材面が両面、ないし片面に残されている。

I A 2 b : 9·10 は、両面加工で、非常に薄く作られている。11 は、やや厚みがあり、基部の調整が粗雑である。

I A 3 a : 51 点が出土している。15 は、損耗した剥片の両面に、周辺加工を施している。21 は、側縁がふくらみ、先端部は傾いている。22 は、狭長な石鎌で、幅 1 に対して長さ 2 の割合になる。

I A 3 b : 基部が内湾する石鎌で、219 点をかぞえる。32 は、先端が欠損したもので、両面とも周辺のみを二次加工し、大きく素材面を残している。44 は、基部が内湾するほか、両側縁にも内反りが見られ、裏面は先端部を入念に加工している。50 は、二等辺三角形を呈したもので、正面は刃角の高い二次加工を側縁から先端にかけて施し、裏面は基部のみ加工されている。51 は、側縁が若干張り出した石鎌で、全面、焼けた痕が見られる。52 は、基部に深く抉りの入った石鎌である。また、正面の左側縁から茎部にかけて欠損しているが、全体的に狭長である。79 は、裏面に素材面を残した石鎌で、正面は左側縁に大きな剝離が多い。側面観は、カーブしている。80 は、周辺に二次加工を施したもので、先端部は入念に仕上げられ狭長になっている。99 は、二等辺三角形を呈し、基部が浅く内湾する石鎌である。側縁は若干張り出しており、両面に素材面を残す、扁平な石鎌である。

I A 4 : 101 はほぼ菱形を呈し、茎が不明瞭な石鎌である。二次加工は、細長い剝離が多いが、全体的に粗雑な製作に思える。

I A 5 : 8 点出土している。102 は、上・下端部とも破損しているが、茎部は、短かいものであつたと思われる。また、側縁は強く張り出している。103 は、裏面の扁平な有茎石鎌である。側縁は、やや丸味を持って張り出しており、逆刺の抉りは弱い。104 は、基部を大きく破損して

いる。張り出し部分は、やや丸味をもつが、全体的には二等辺三角形を呈している。裏面に素材面を残した、肉厚の石鎌である。106は、側縁の張り出しが弱く、ただちに茎部へ移行する形態である。下端部は、丸味がある。107は、扁平な石鎌で、逆刺の抉りは弱く、下端部はややふくらんで厚みをもつ。

石槍（図22-108～115、図版15-2）

石槍は、32点出土したうち、8点について図示した。しかし、これらは、そのほとんどが破損しており、石鋸やナイフ状石器の可能性も十分、考慮しておかなければならぬ。なお、石質については、全例、黒曜石である。

I B 1 : 108は、先端部が欠損しており、両側縁は若干内湾する。また、基部は、太く、厚みをもち、逆刺の抉りは弱い。109は、頭部に厚みをもつ石槍である。側縁は、やや丸味をもって張り出し、逆刺の抉りは強い。裏面中央には、素材面を残し、基部は下端に向かって次第に薄くなっている。

I B 2 : 111は、頭部が破損しているが、裏面に素材面を大きく残しているのが認められる。115は、右側縁が若干ふくらんでおり、下半部を欠損している。二次加工は、両面に施されており、形態的にみてナイフ状石器とも考えられる。

石錐（図22-27-116～259、図版16・17）

本遺跡から出土した石錐は、385点をかぞえ、剝片石器全体の約20%を占める。ここでは、それらを5つのタイプに大別し、144点を図示した。石質は、すべて黒曜石であった。

II A 1 : 116は、最小のもので、全長1.1cm、最大幅0.6cm、最大厚0.3cmの扁平な石錐である。二次加工は、両面に施され、周辺に若干の摩滅が認められる。121は、正面に稜をもち、厚みがある。二次加工は、先端部の両面に施され、扁平になっている。131は、側縁に原石面を残している。右側縁と先端部のみを二次加工しており、側面感は幾分カーブする。140は、周辺の摩滅が著しく、肉厚の石錐である。二次加工は、全面に施されるが、先端部はより細かい剥離がみられる。151は、断面が三角形を呈している。二次加工は、一面のみ入念に施され、ほかは粗雑に加工されている。先端部と側縁には、摩滅がみられる。152は、断面が四角形を呈している。上端部にも摩滅の痕がみられるが、使用痕かどうか不明である。裏面は、先端部のみ二次加工が施されている。157は、棒状石錐の中でも最大のもので、全長4.2cm、最大幅1.4cm、最大厚0.8cmをはかる。二次加工は、両面に施され、先端部と周辺には摩滅した痕がみられる。

II A 2 : 158・159は、横につまみ部をもつ石錐である。どちらも、つまみ頭部に原石面を残し、そこからつまみ部に向かって二次加工が施されている。ただし、刺突部については、先端部から両側縁に向かって二次加工がなされ、つまみ部からの剥離面を切っている。また、159については、上部につまみ付きナイフ同様の刃部がみられる。160は、両面に素材面を残しているが、これもまた、つまみ付きナイフ同様の刃角の高い刃部が、右側縁にみられる。その加工の順序は、つまみ頭部からつまみ部・側縁部と施されるが、やはり、刺突部については先端部から側縁部へと調整され、上部からの剥離面を切っている。169は、正面中央に稜をもった剝片の

周辺だけを二次加工したものである。側面観は、カーブしており、刺突部は扁平に近い。また、つまみ部は、浅い抉りが入っている。173は、肉厚の石錐で、つまみ部は左側縁の抉りが深く、もう一方は浅い。二次加工は、正面全体と裏面のつまみ部、及び先端部に施される。ただし、正面の二次加工においては、右側縁部の刃角が高く、つまみ付きナイフと類似する。また、つまみ頭部においても、若干の浅い抉りが認められる。したがって、これまで述べてきたII A 2の中には、つまみ付きナイフの形態に非常に類似したものがあり、これらは、つまみ付きナイフ同様の加工からさらに刺突部を作出した可能性が十分あると考えられる。

II A 3 a : 179は、ポジティブ剥離面に刃角の高い二次加工を施したものである。181は、左側縁部に原石面を残したもので、二次加工は右側縁から先端部にかけて、周辺のみ施されている。また、裏面の二次加工は、先端部のみに施されている。

II A 3 b : 193は、厚みをもった剥片の末端に扁平な刺突部を作出したもので、側面は逆三角形を呈し、上部には原石面を残している。これに類似した石錐は、ほかにも数点出土しており、どれも径3~4cm程の小円礫から製作されているようである。201は、ポジティブ剥離面に刃角の高い二次加工が施されたもので、右側縁にポジティブバルブをもつ。219は、上端部と刺突部に入念な加工を施した石錐である。側面観は、上端部が幾分カーブし、スクレイパーとしての機能を有している可能性もある。238は、上端と下端に刺突部をもつ。二次加工は、刺突部と周辺のみで、左側縁は刃角が高い。側面観は、カーブしている。分類上、II A 4の要素を含んでいるが、形態が異なるため、今回は一応II A 3 bに入れておく。

II A 4 : 240は、原石面を除く周辺に二次加工が施され、刺突部の間は浅い抉りが入る。246は、上部と下部に刺突部が作出されたもので、厚さは左側縁の原石面から右側縁にかけて、次第に薄くなる。刺突部は、扁平に加工され、刺突間は丸味をもって張り出す。

II A 5 : 250は、正面に稜をもち、左側縁の下半部から刺突部にかけて二次加工が施される。また、裏面は、両側縁に刃角の高い調整が加えられている。255も正面に稜をもつもので、その左側縁は入念な加工で仕上げられている。刺突部と両側縁には、若干の摩滅痕がみられる。259の正面は、上・下端部に二次加工が施され、下端部の剥離面は若干、損耗している。裏面縁に刃角の高い調整が施され、中央部に素材面を残す。

これらII A 5の石器群については、形態や調整剥離などで不明な点が多く、今後の資料の増加に伴って、再検討する必要があるかと思われる。

つまみ付きナイフ (図27~31-260~353, 図版18・19)

300点が出土し、94点について図示した。石質は、硬質頁岩が3点、瑪瑙が1点で、ほかは黒曜石であった。

III A 1 : 261は、つまみ頭部に原石面が残り、下部は尖る。刃部は、錯行剥離によって施されている。264は、硬質頁岩製のナイフである。全長は、9.2cmで、剥片石器の中で最も大きい。刃部は、錯行剥離により入念に仕上げられている。

III A 2 : 273は、硬質頁岩製のナイフで、先端は尖る。刃部は、両側縁に刃角を高くして、仕

上げられている。裏面は、つまみ部のほか、先端部も加工されており、石錐として使われていた可能性も考えられる。側面観は、カーブしている。

III A 3a : 282 は、右側縁に刃角を高くした刃部をもち、ほかは両面の周辺に調整剝離をもつ。286 は、素材面を大きく残し、頭部と片側縁にのみ二次加工が施される。

III A 3b : 最も多い形態で、75%を占める。298 は、右側縁に刃角の高い刃部を有し、ほかは、つまみ部を除いて、大きく素材面を残す。336 は、瑪瑙質のナイフで、下部は破損している。二次加工は、周辺に施され、両側縁には刃角の高い刃部を有する。つまみ部は、抉りが浅いため、幅が広く感じられる。339 は、焼けたナイフであるが、右側縁の刃部のみをさらに再加工している。

III A 5 : 340 の 1 点のみである。右側縁に刃角の高い刃部を有した、片面加工のナイフである。形態的に、はっきりとした横形ではなく、III A 2 に含まれる可能性もある。

III A 6a : 343・345 の 2 点である。343 は、若干、内湾気味の刃部が、刃角を高くして施されている。裏面は、つまみ頭部から両側縁にかけて調整されている。345 は、刃部の刃角が高く、素材面を大きく残したものである。

III A 6b : 342 は、つまみ部と刃部のみに、二次加工が施されたものである。直線的な刃部は、刃角が高い。350 は、硬質頁岩製のナイフで、正面の中央部に素材面を残している。

III A 7 : 346 は、つまみ部の幅が広く、刃角の高い刃部が斜行する。352 は、つまみ頭部に原石面を残し、つまみ部と刃部のみ二次加工が施されている。刃角は高い。

スクレイパー (図 32~36・354~467, 図版 20・21)

III B 1 以外のほとんどは、定形的なものが少なく、図示したものにつき、刃部の形状に合わせて分類した。石質は、全例、黒曜石である。

III B 1a : 358 は、正面の下半部と裏面の両側縁にのみ二次加工が施される。刃部は若干、摩滅している。363 は、両側縁の下半分を丸味をもって張り出し、二次加工は正面の周辺と裏面の両側縁に施される。側面観は、カーブしている。389 は、上部が平坦で、刃部は丸味をもって張り出す。刃部は、正面のみ加工され、刃角は高い。

III B 1b : 393 は、両面にポジティブバルブをもつもので、上部は肉厚である。二次加工は、刃部と右側縁に施される。

III B 1c : 395 は、上端部を破損しているものである。二次加工は、両面の周辺に施され、刃角は高い。

III B 1d : 396 は、刃部が丸味をもって張り出す。二次加工は、周辺に施されており、刃角は高い。側面観は、カーブしている。398 も刃部は、丸味をもって張り出す。二次加工は、右側縁と刃部に施され、刃角は高い。側面観は、下半部がカーブする。

III B 2 : 403 は、中央が肉厚となり、周辺の刃部は入念な加工で、刃角が高くなっている。

III B 3a : 411 は、左側縁に原石面を残し、右側縁に刃角の高い刃部が張り出している。横断面は、原石面から刃部にかけて緩く傾斜する。421 は、右側縁に入念な加工が施され、刃角は緩

く傾斜する。

III B 3 b : 424 は、左側縁に原石面を残し、右側縁に直線的な刃部が施されている。二次加工は全体的に粗雑な感じがし、刃角は緩い。

III B 3 c : 434 は、左側縁に内湾した刃部をもち、右側縁は原石面のままである。二次加工は、片面のみで、刃角は緩い。

III B 3 d : 436 は、右側縁と左側縁の下半部に二次加工が施されており、下端は尖頭状になる。

III B 3 e : 450 は、左側縁に不規則な刃部を作出したもので、刃部は緩い。

III B 4 a : 460 は、片面のみを加工したもので、下端の刃部はやや張り出しており、刃角が高い。461 は、周辺に二次加工を施したもので、原石面を大きく残している。刃部は、下端に施され、刃角が高い。

III B 4 b : 459 は、肉厚な剝片の下部に刃部が作出されたものである。刃角は高く、側面觀は幾分、カーブする。

III B 5 : 466 は、下部に原石面を残しているが、ほぼ全周にわたり、二次加工が施されている。刃部は、右側縁に施されており、刃角は緩い。

(2) 磔石器

石斧 (図 37~38-468~493, 図版 22)

IVA 1 : 472 は擦切手法によって製作されたもので、片刃の石斧。擦切によって製作されたものは、これ 1 点のみである。

IVA 2 : 474・475 は打ち欠きによる整形がみられるものである。474 は左側縁から左刃部にかけて打ち欠きにより刃を作出している。

IVA 3 : 468・469・471・473 などは片刃のものである。476 は黒色泥岩製で刃部の幅に対しても基部が小さい。485~493 は大型品に属する。486 は刃部破損後打ち欠きにより刃を再生したものとみられる。488 も同じような例とみられる。485~488 はすべて両刃である。487 はその中でもよく磨かれている。489~492 は大型石斧の基部と思われる部分である。これらの石斧の最大幅も 486~488 同様 6 cm 前後あったと思われる。いずれの石斧も整形のための擦痕はよく観察でき、特に 470・476・486・488 などは顕著な例である。

たたき石 (図 39-494~496, 図版 23-1)

V A 1 : 496 は上端と下端にたたき痕が認められる。また一側面にすられた可能性のある面がみられた。

V A 3 : 494・495 はくぼみ石といわれているもので、いずれも両面に 2~4 個の敲打痕が認められる。

台石 (図 39-497, 図版 23-1)

V B : 小型の台石である。上面に 2 カ所敲打痕の浅いくぼみが認められる。

すり石 (図 39~42-498~522, 図版 23-2・24・25-1)

すり石は大きく分けて断面三角形の礫の棱をすったもの (VIA 1) と、扁平な橢円礫の側縁を

すつたもの（VIA 2）の二種類に分類される。

VIA 1：499 のすり面は比較的広く、上部にも一部分ではあるが使用面が認められる。505 は礫の大きさに比べてすり面が 1 cm 以下と狭い。521 も同じような例である。VIA 1 の中にはすり面を二面以上もつものが 3 点ある（498・499・516）。

VIA 2：503 は扁平礫の両端に調整剝離が認められる。507 は長方形の扁平な礫の一側縁をすっている。515 は背の高い三角形の扁平礫を使用している。このすり石の表面には幅 2 cm、長さ 9 cm の浅い研磨面が認められ砥石としても利用されたものであろう。507 と 515 は今回出土したすり石の中では異質な形態を呈しているものである。

石皿（図 43～44・523～530、図版 25-2・26-1）

VIB：厚さが 6～8 cm の板状礫の一面を使用したものが多い。使用面は平坦なものが多いが、529・530 などは使用面が浅く皿状にくぼんでいる。529 は他の石皿と違って、使用している箇所が部分的である。

砥石（図 45-531～536、図版 26）

VII B 2：531 は砥面が三面ある。533 は中心に向かってゆるくくぼみ、裏面も使用されていたと思われるが、剥落のため一部現存しているにすぎない。この砥石の重量は 8700 g で礫石器の中ではもっとも重いものである。534・535 は板状の礫を素材とするもので、砥面はかなりくぼんでいる。536 は重量 7800 g でかなり重い角柱礫を利用し、砥面は三面ある。

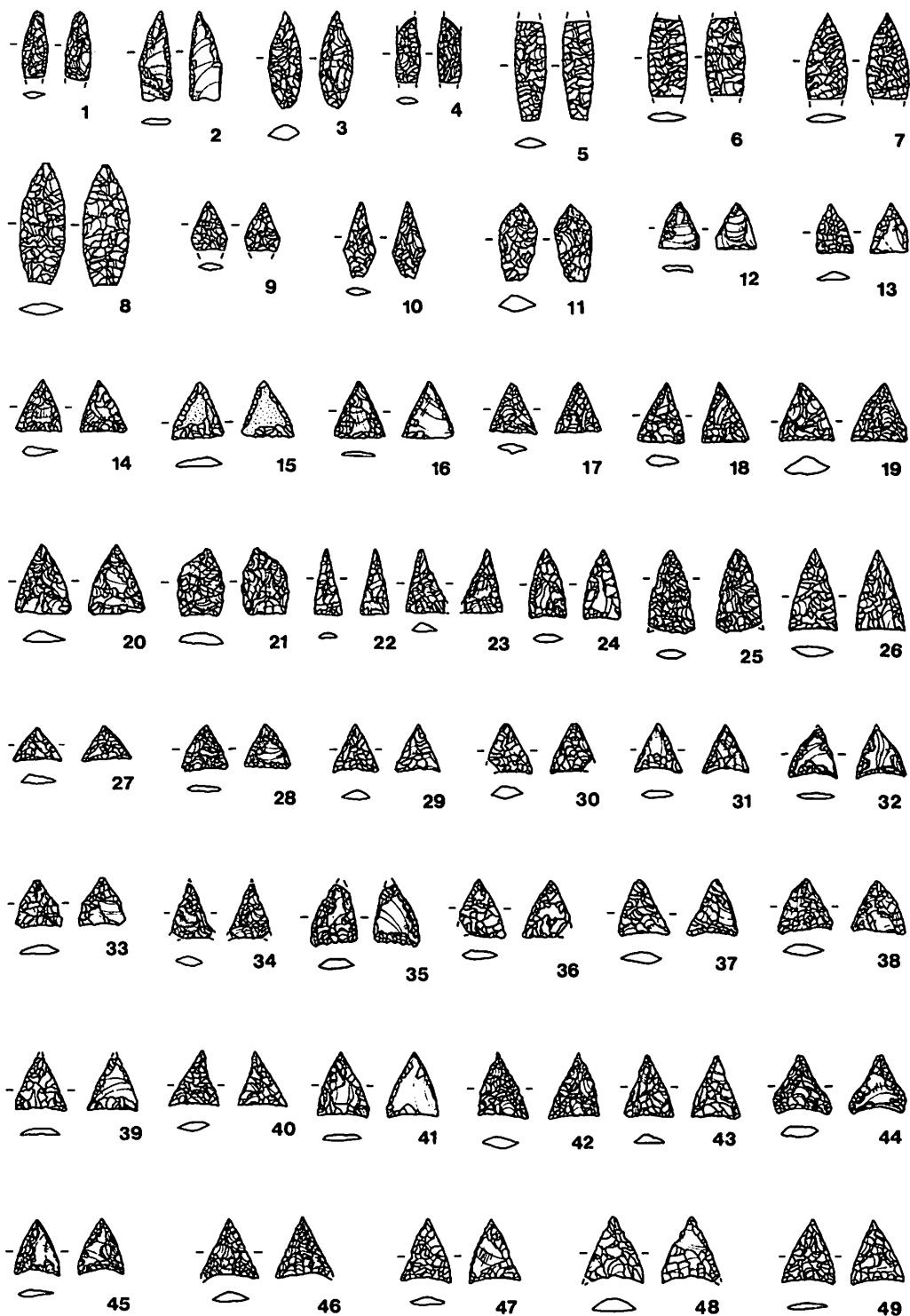


図 20 石器実測図(1)

0 5cm

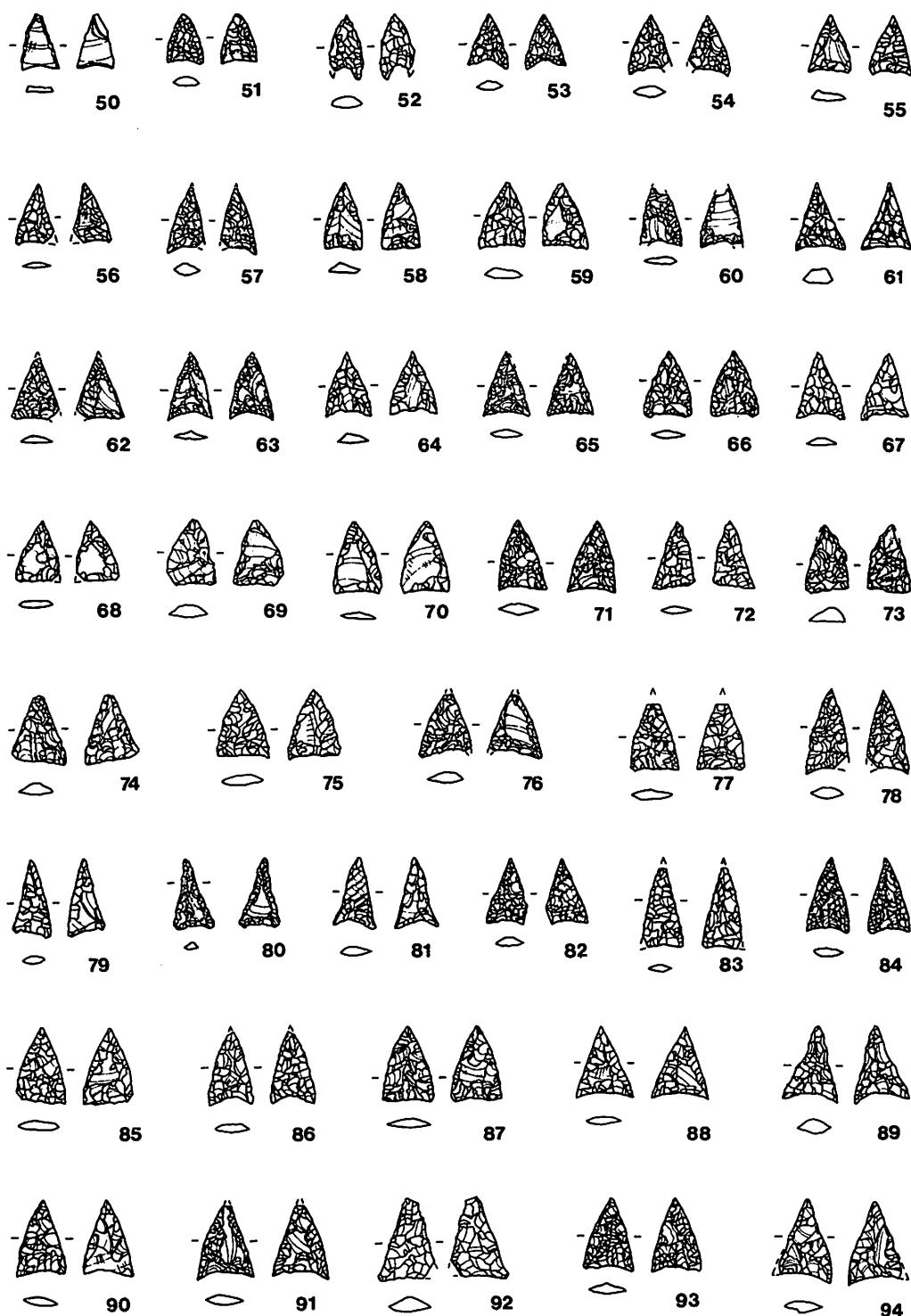


図 21 石器実測図(2)

0 5cm

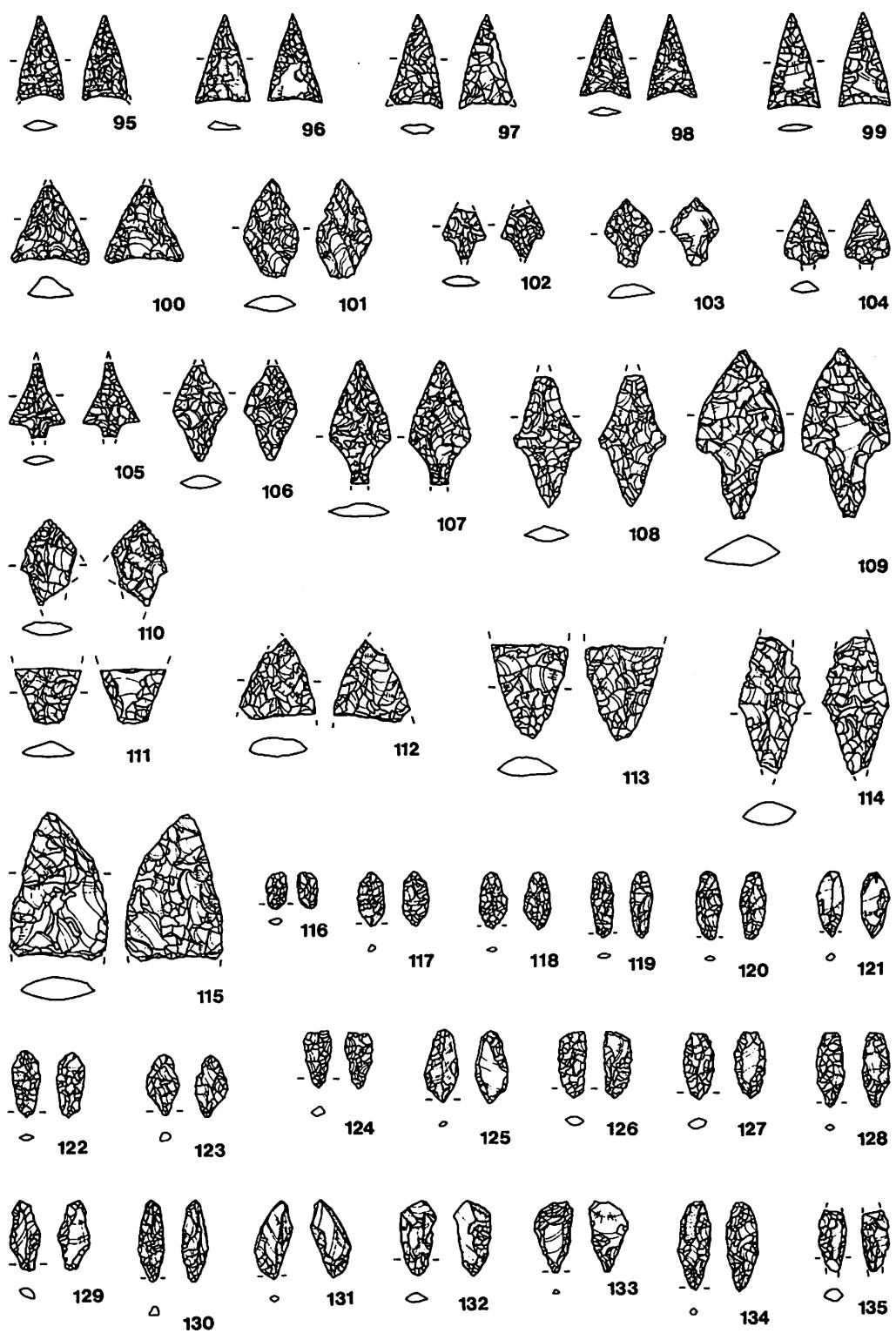


図 22 石器実測図(3)

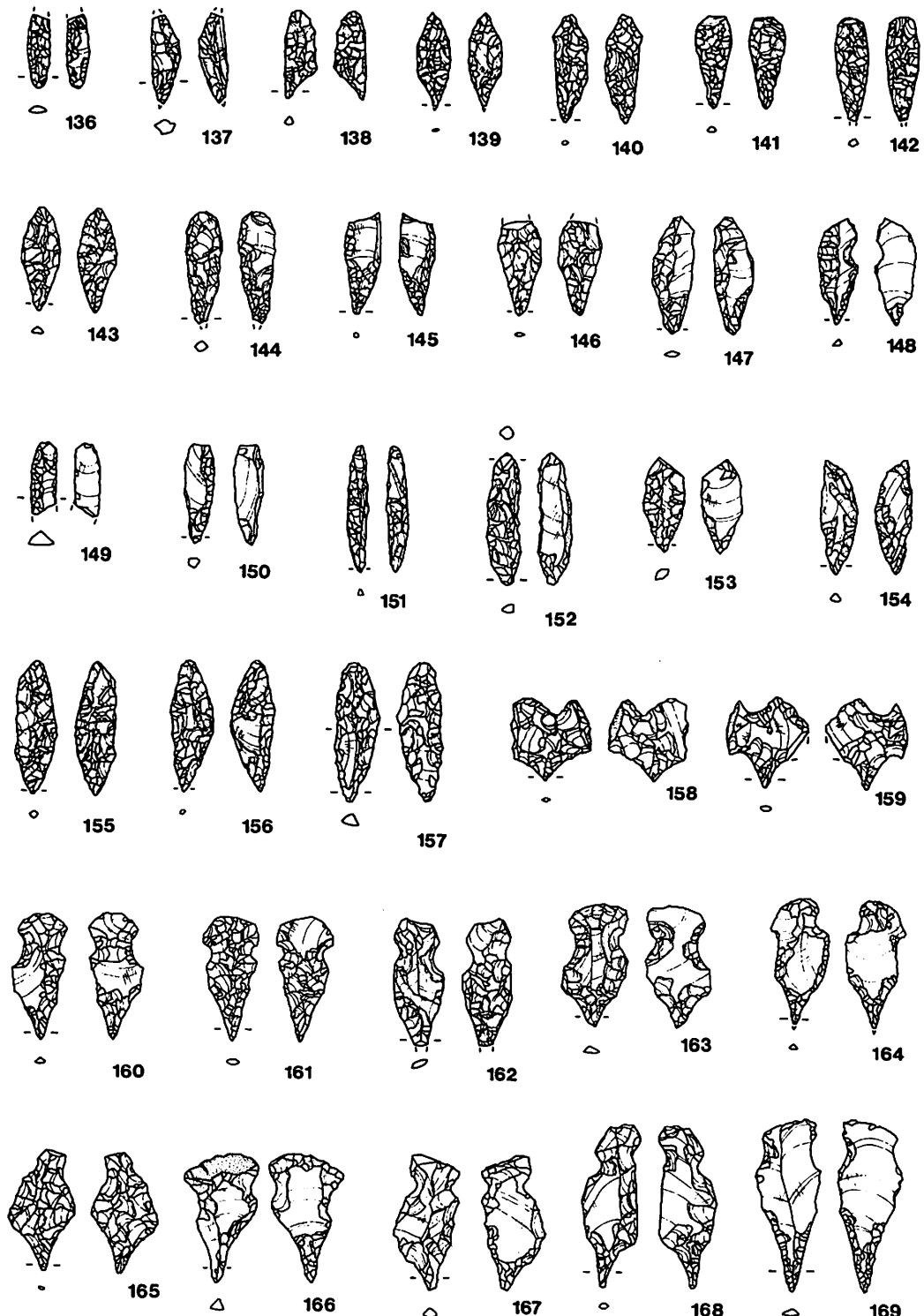


図 23 石器実測図(4)

0 5cm

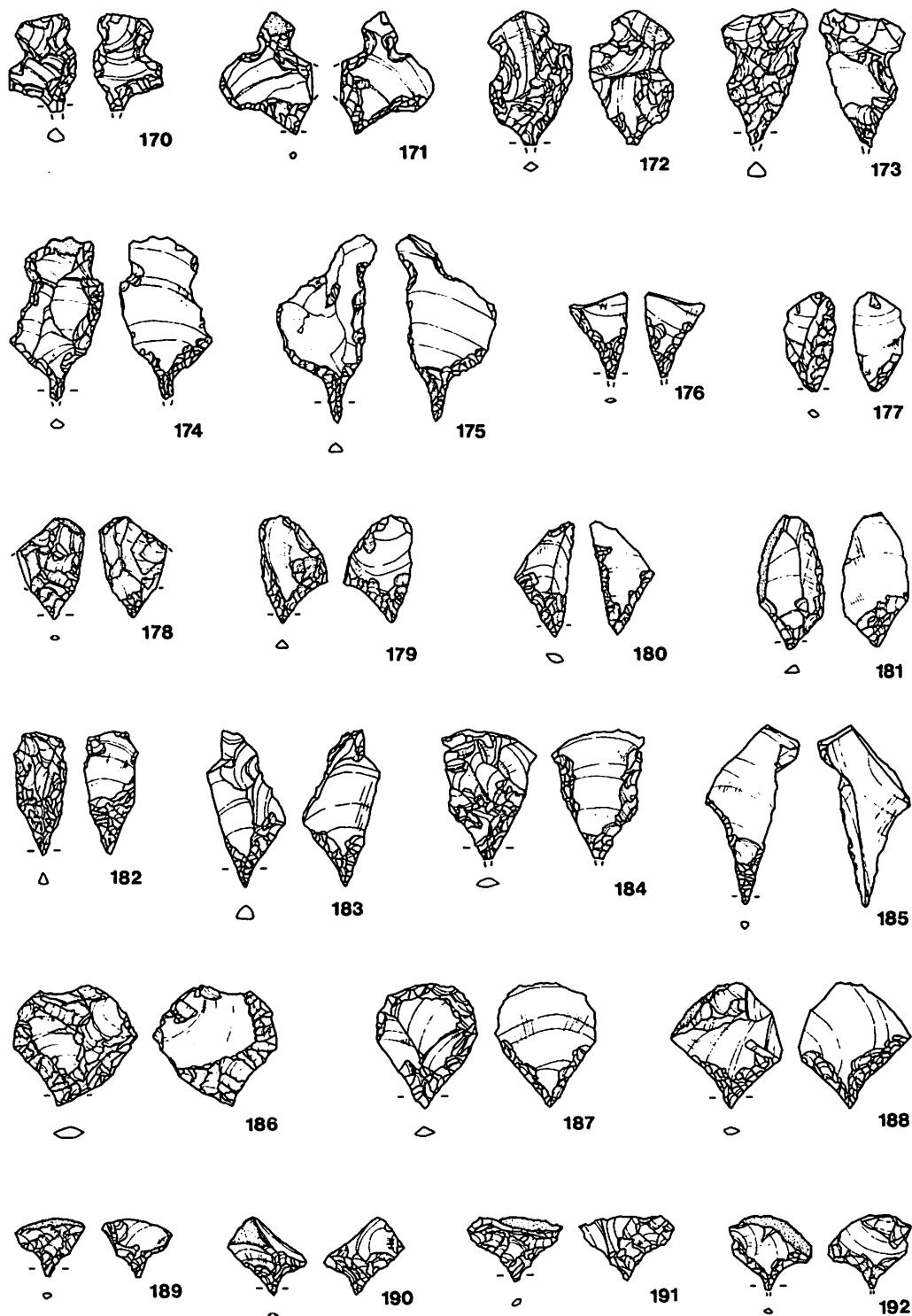


図 24 石器実測図(5)

0 5cm

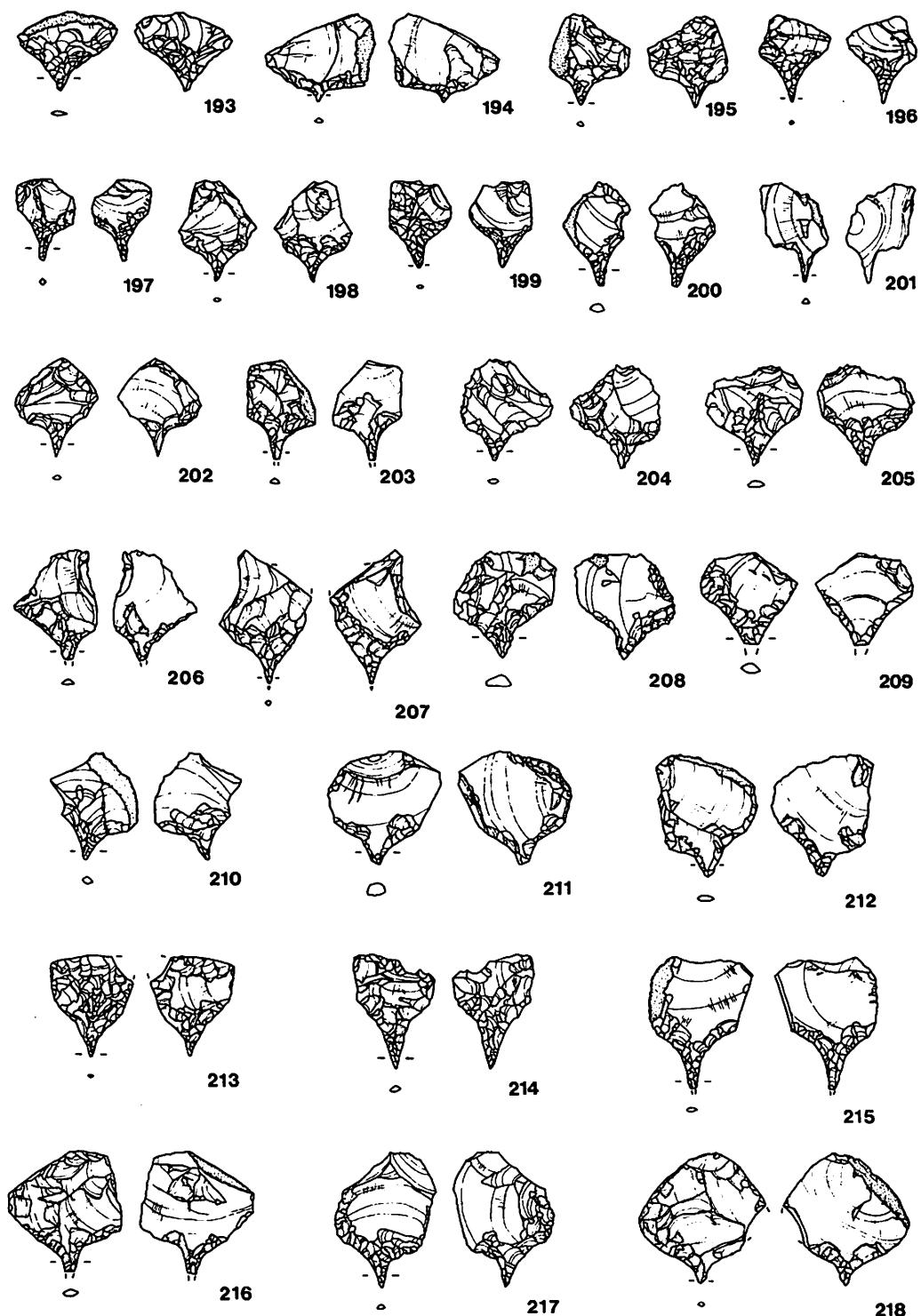


図 25 石器実測図(6)

0 5cm

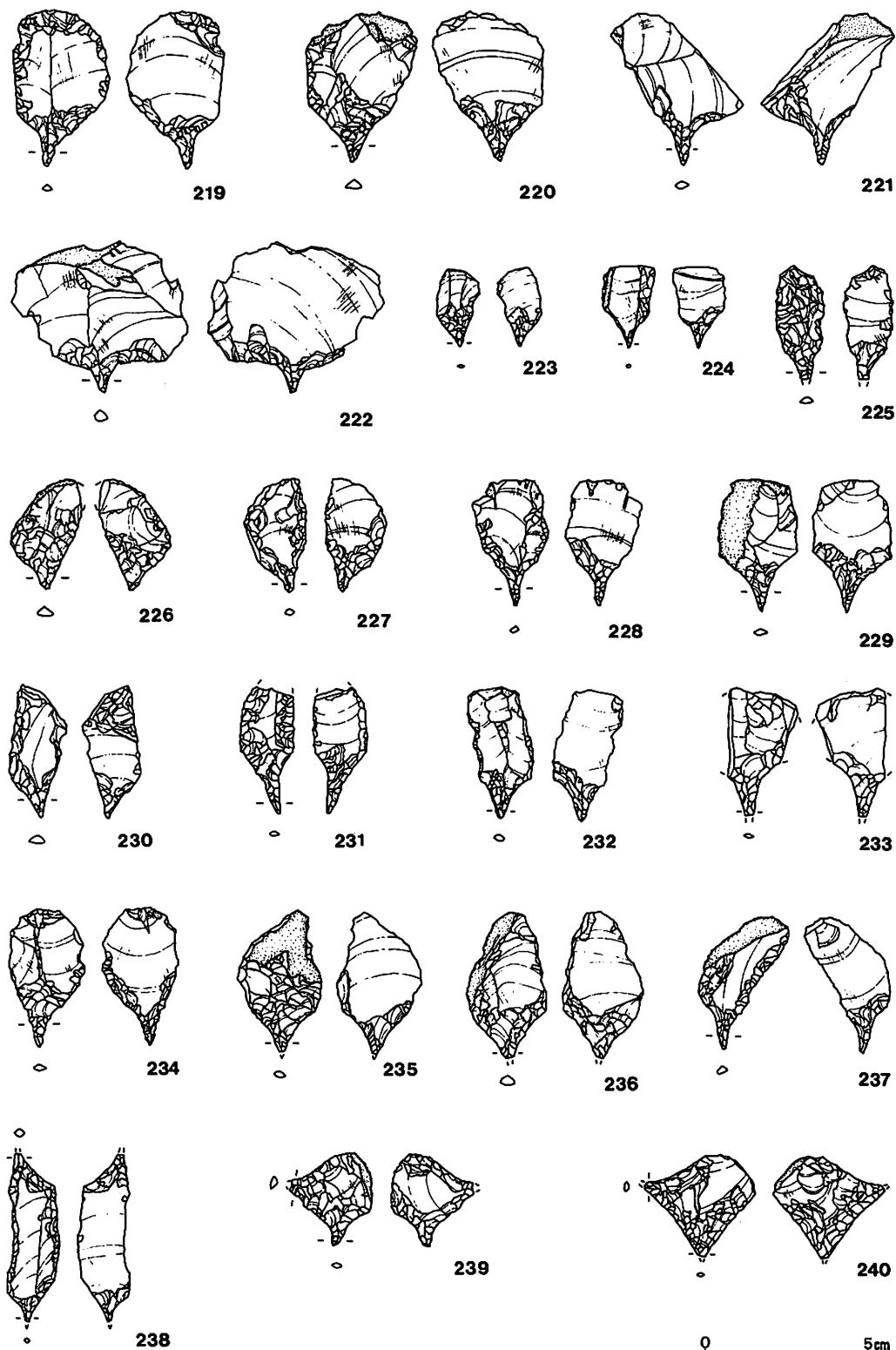


図 26 石器実測図(7)

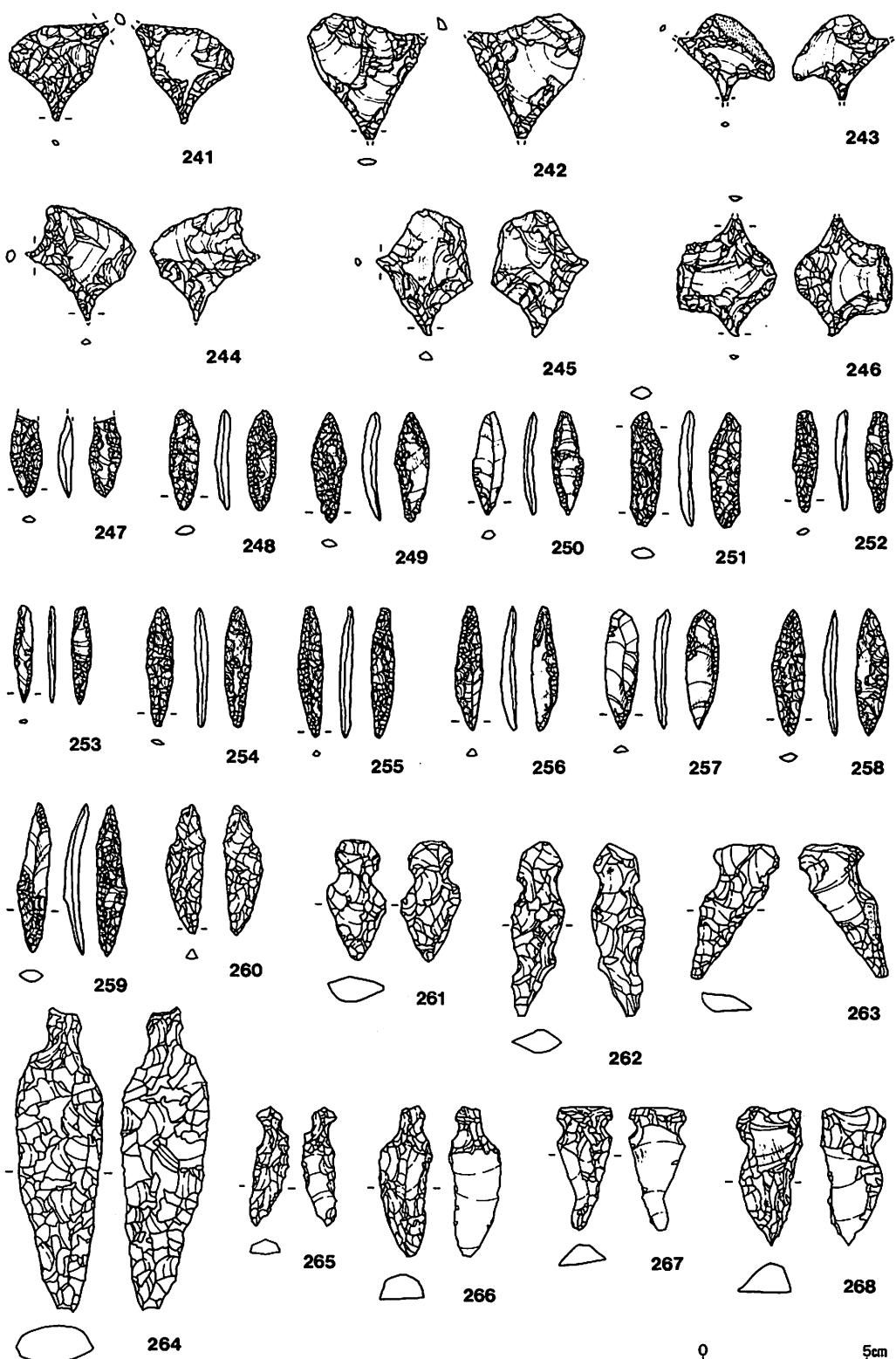


図 27 石器実測図(8)

0 5cm

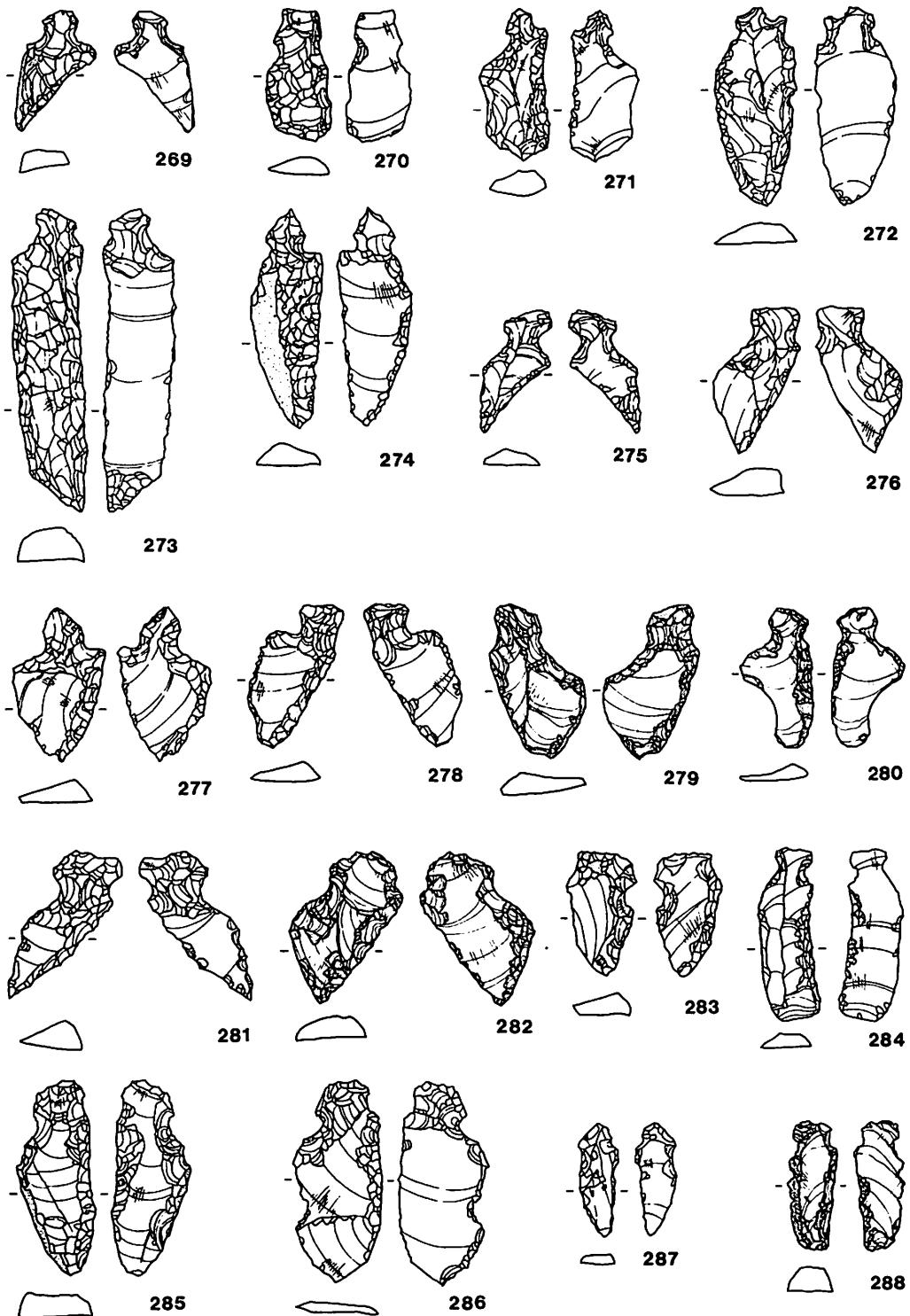


図 28 石器実測図(9)

0 5cm

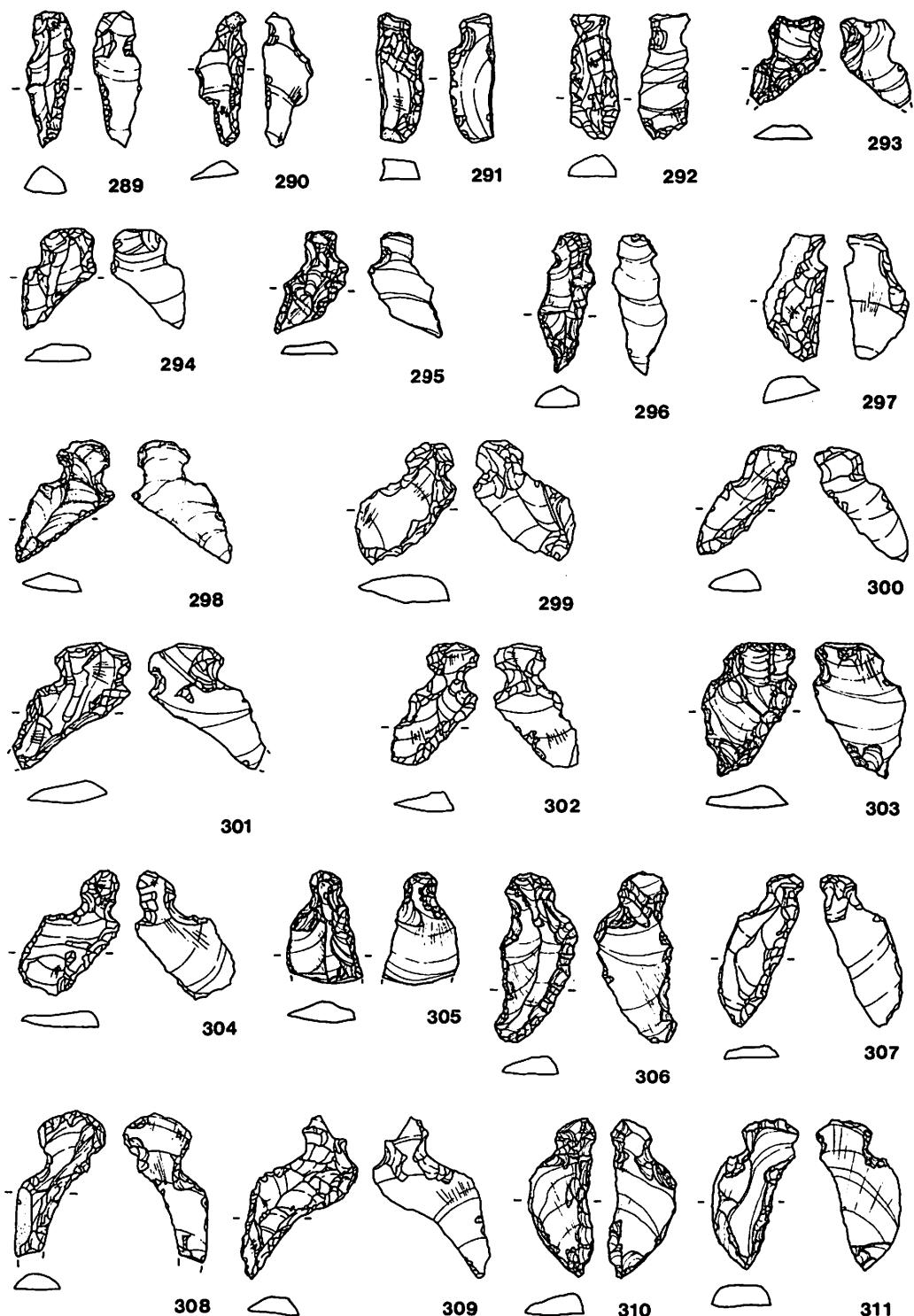


図 29 石器実測図(10)

0 5cm

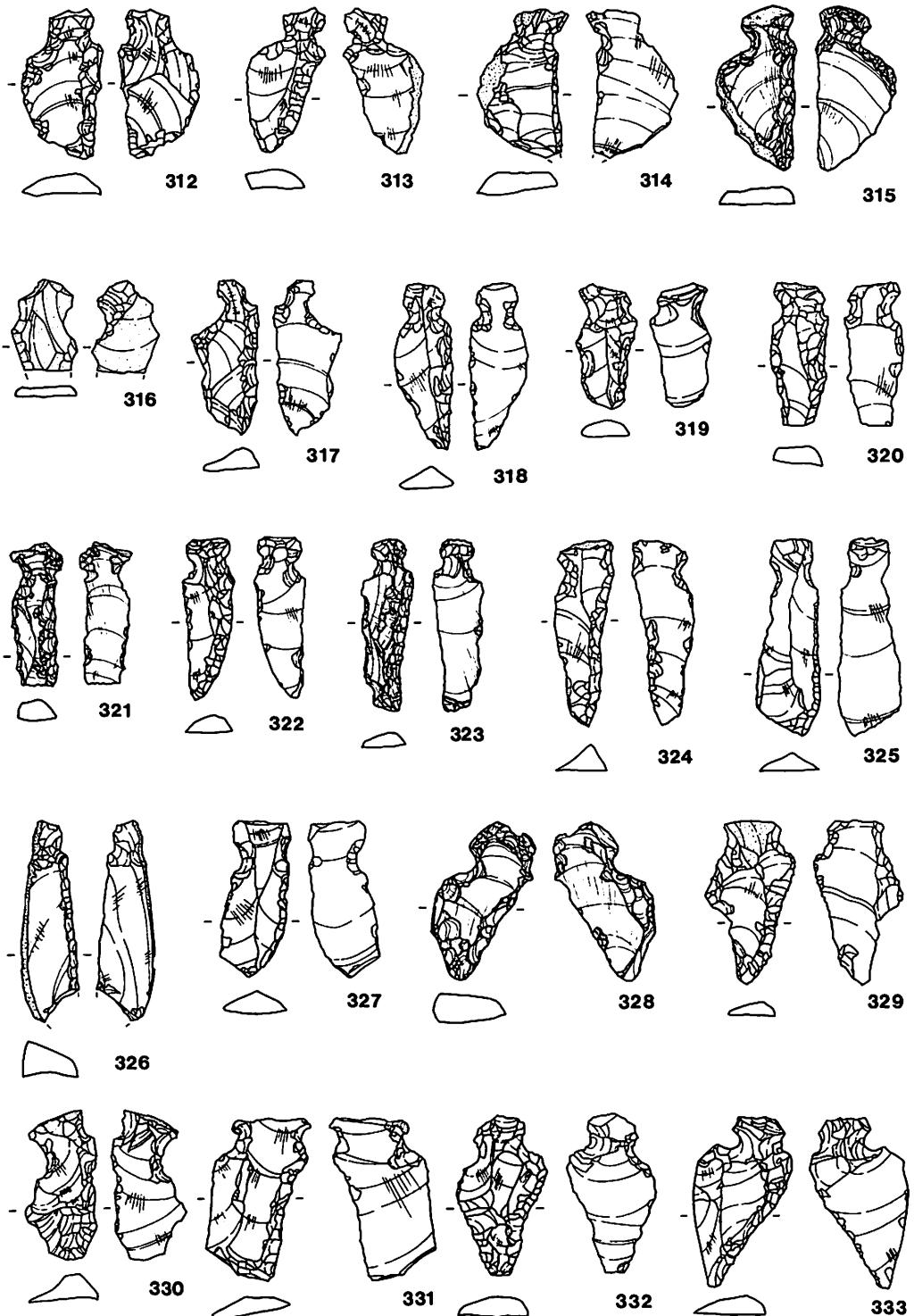


図 30 石器実測図(1)

0 5cm

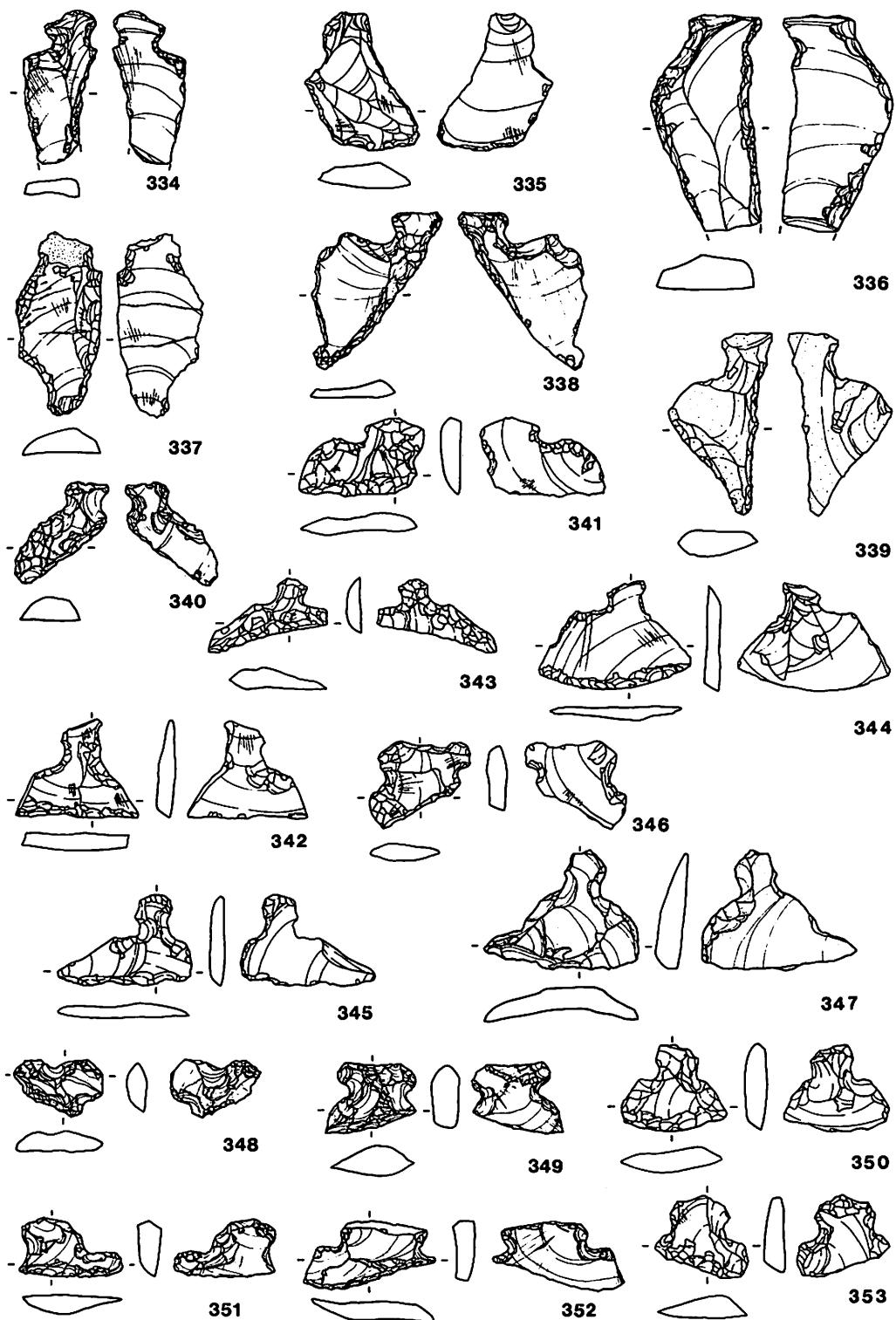


図 31 石器実測図(12)

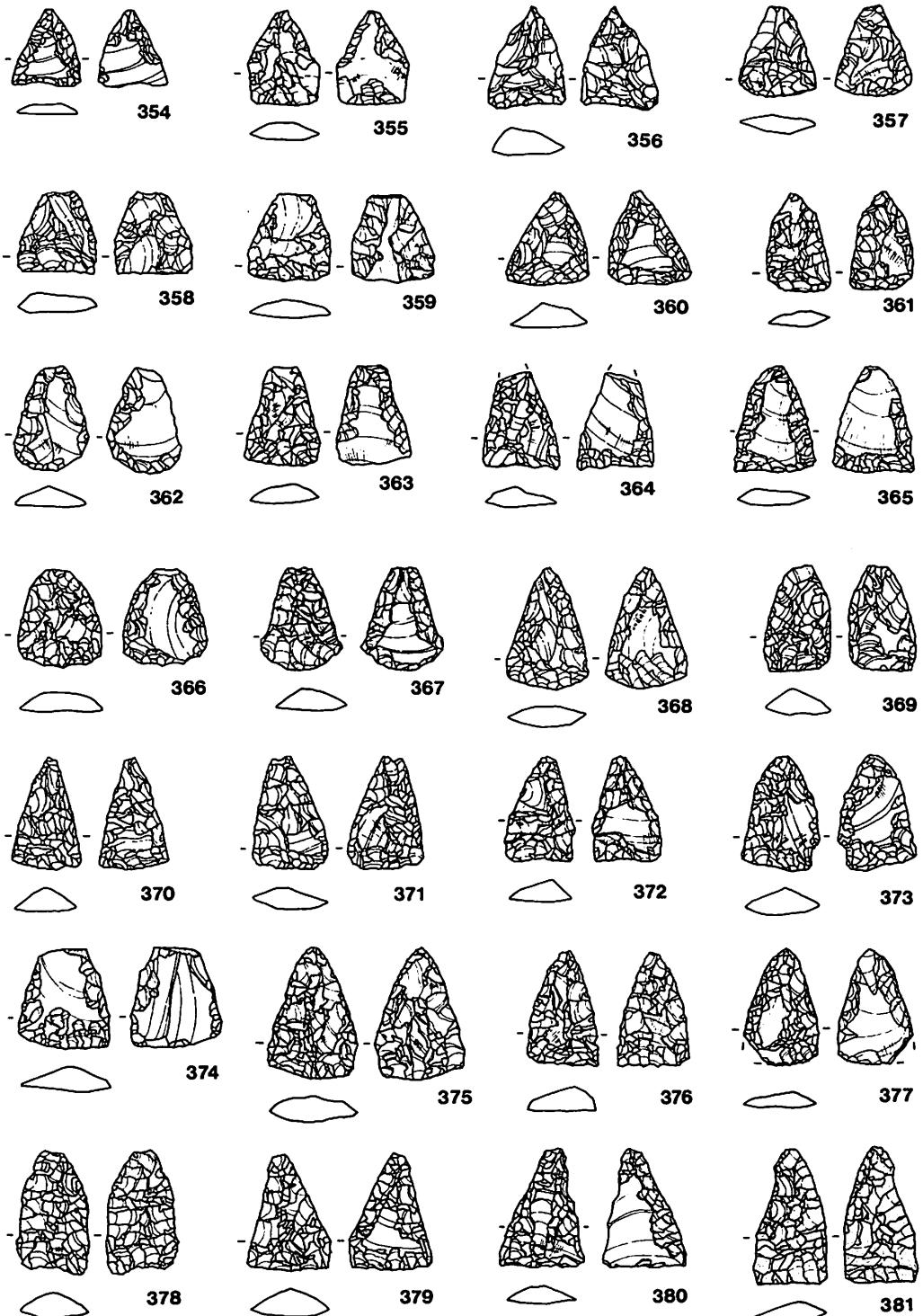


図 32 石器実測図(13)

0 5cm

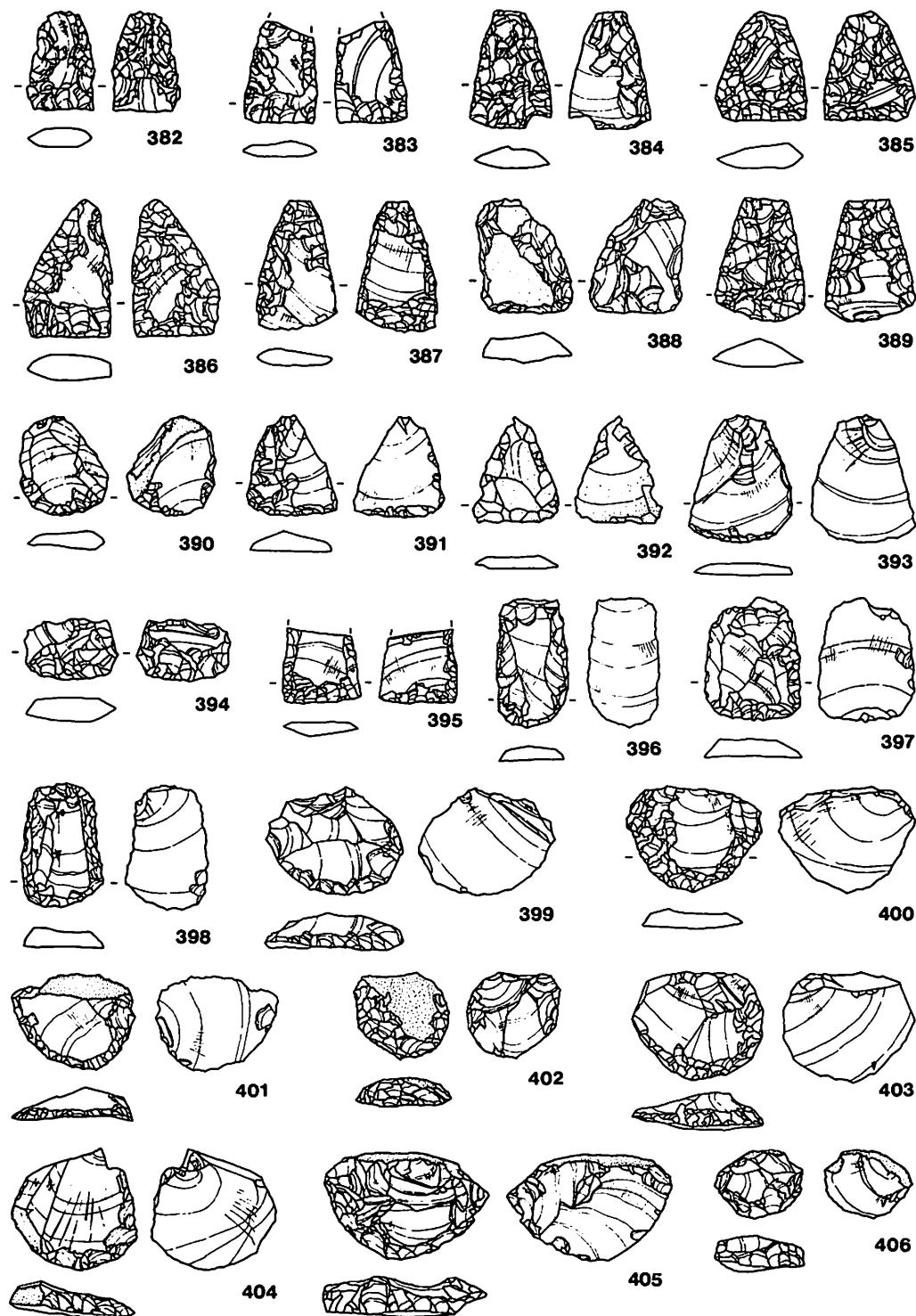


図 33 石器実測図(14)

0 5cm

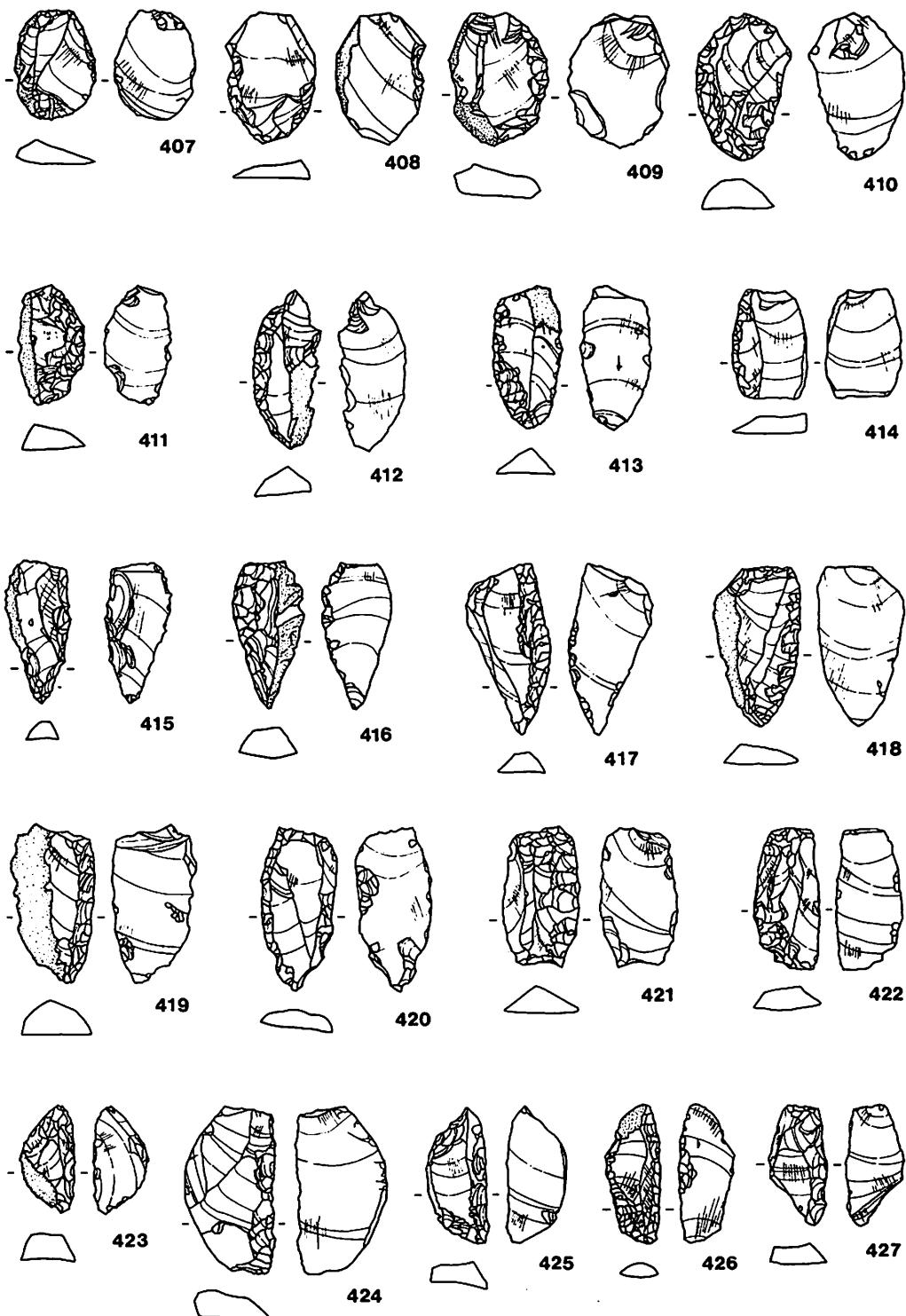


図 34 石器実測図(15)

0 5cm

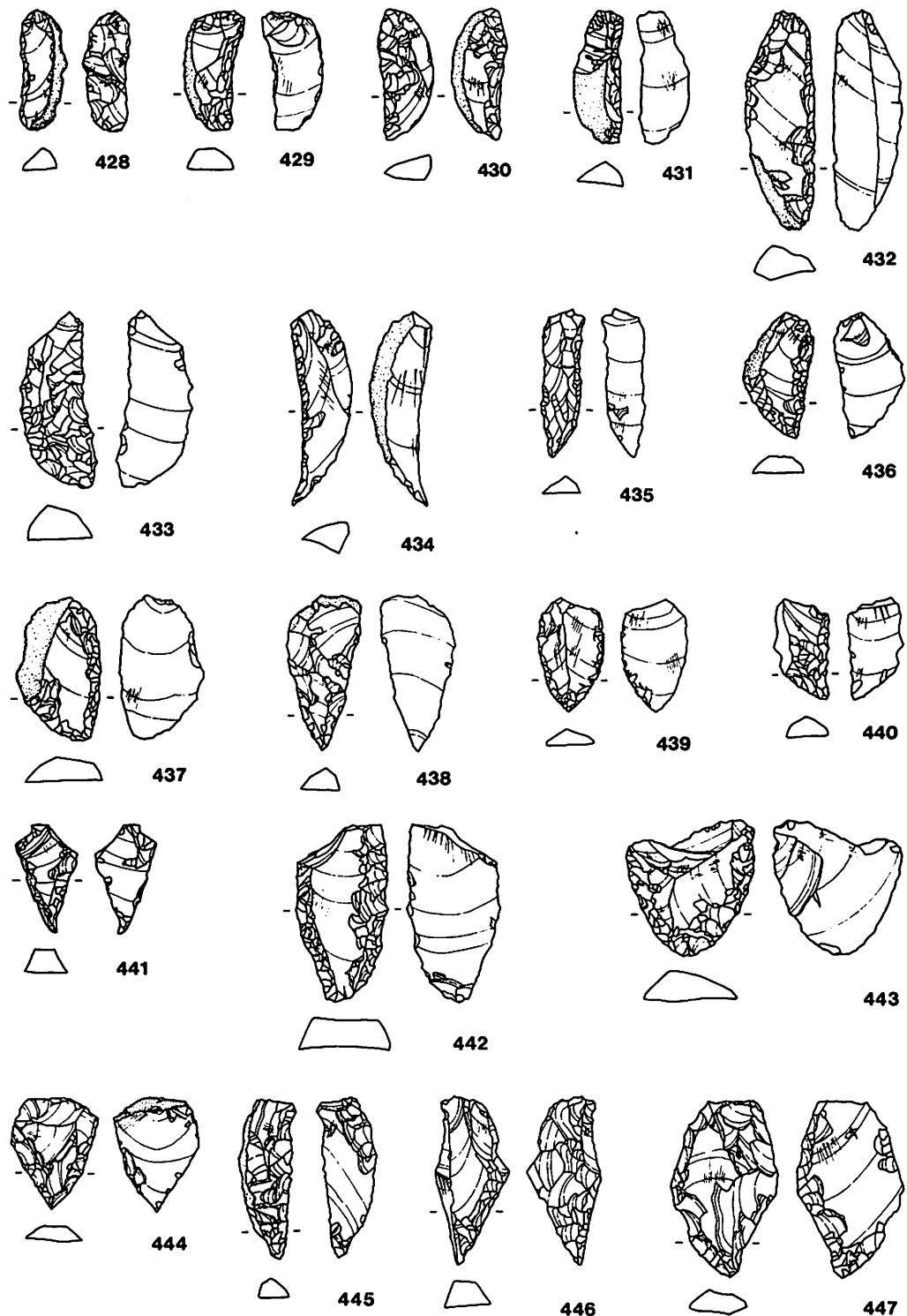


図 35 石器実測図(16)

0 5cm

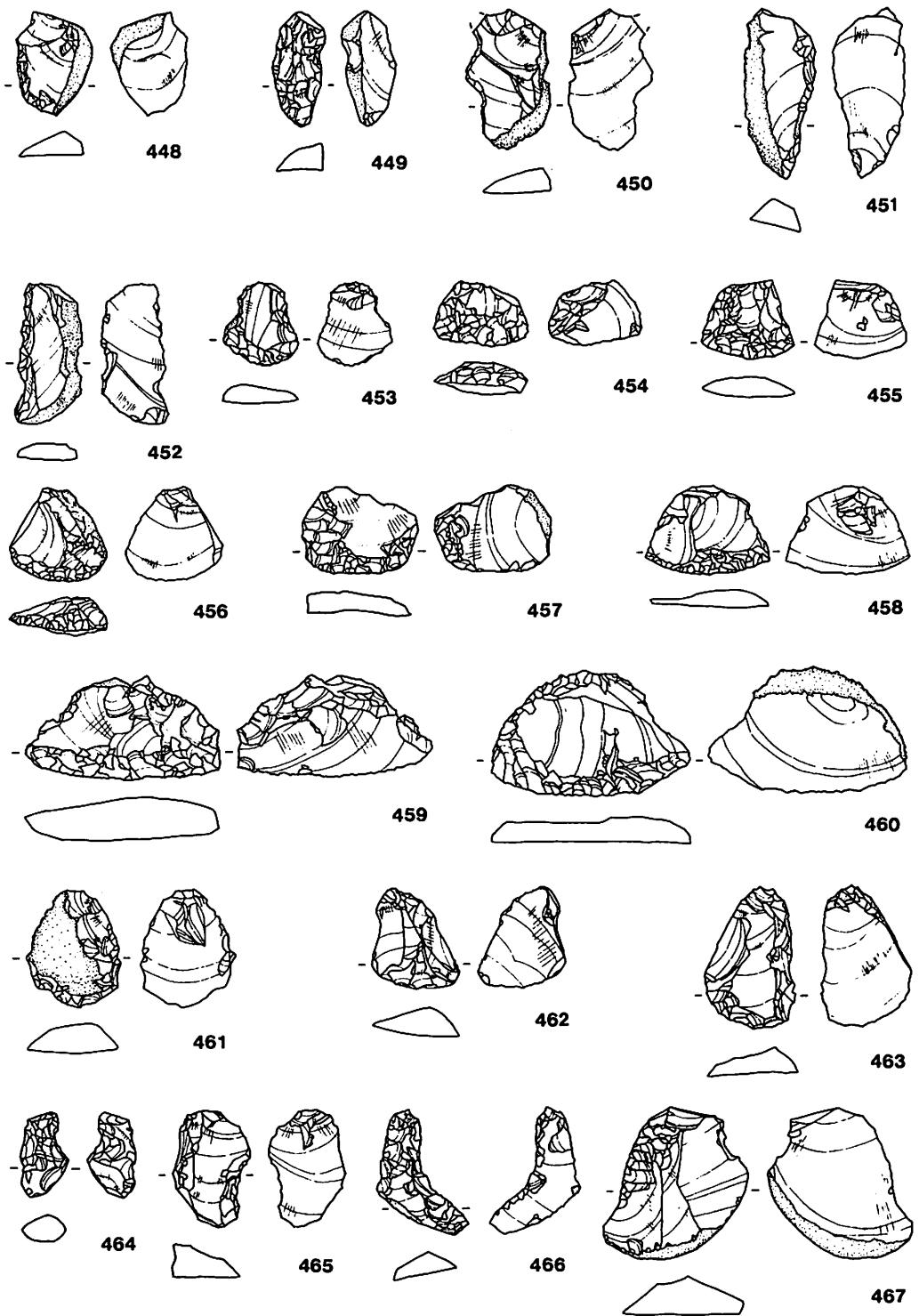


図 36 石器実測図(1)

0 5cm

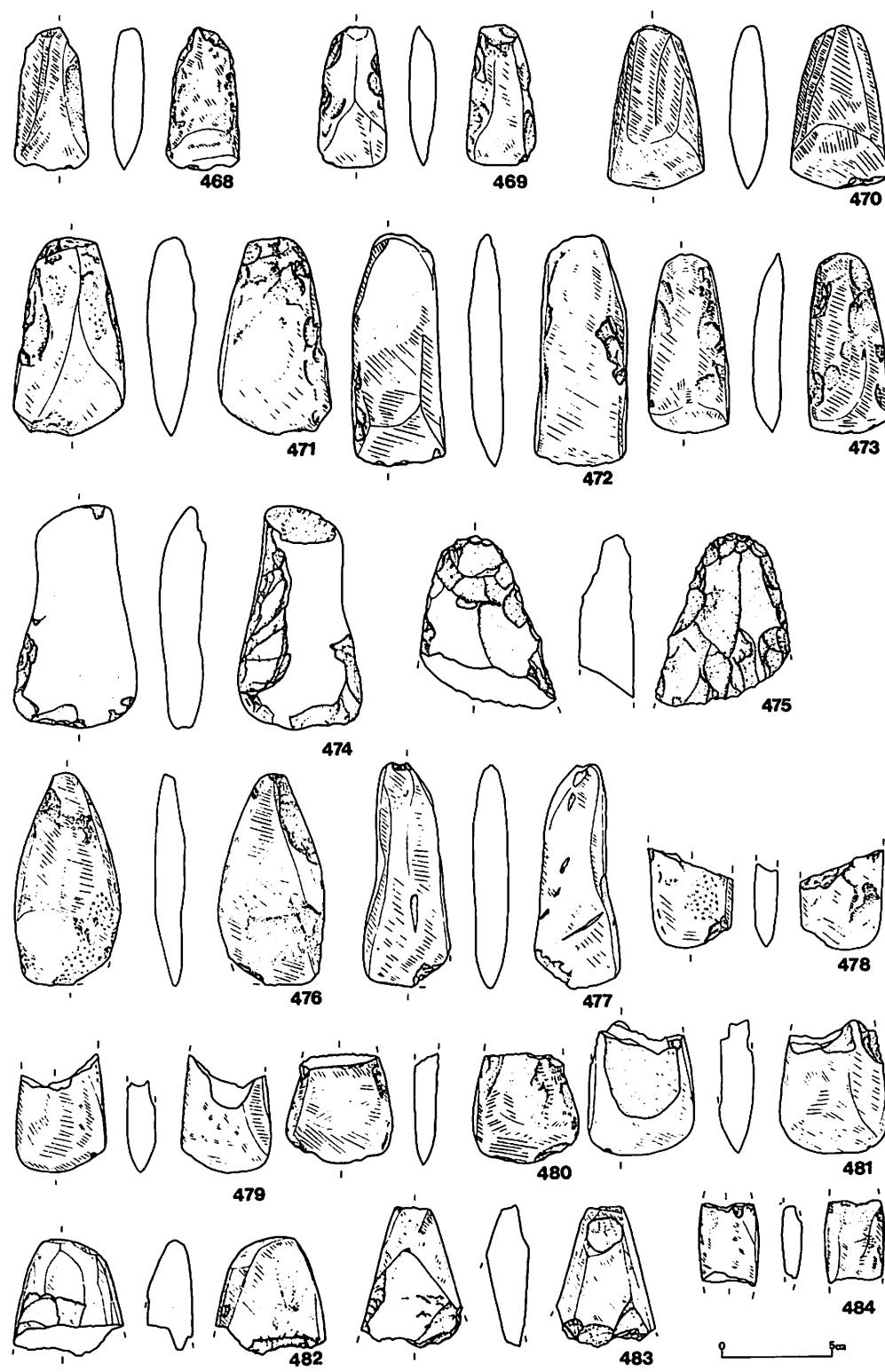
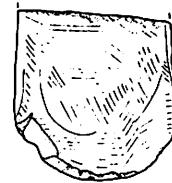
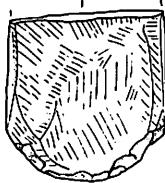


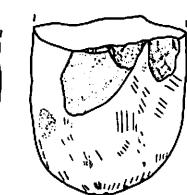
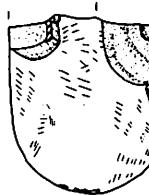
図 37 石器実測図(18)



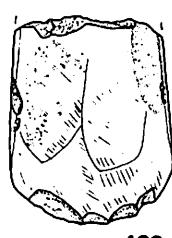
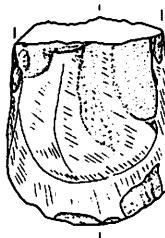
485



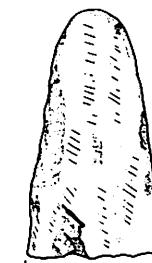
486



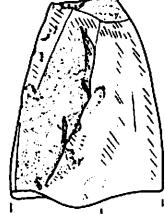
487



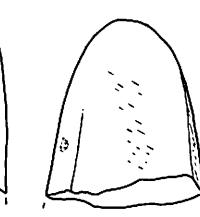
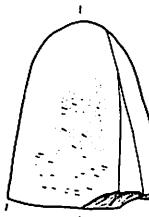
488



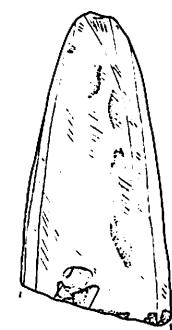
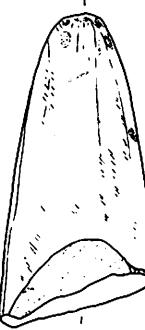
489



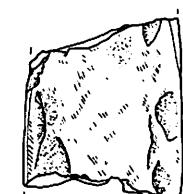
490



491



492



493

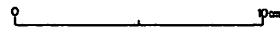
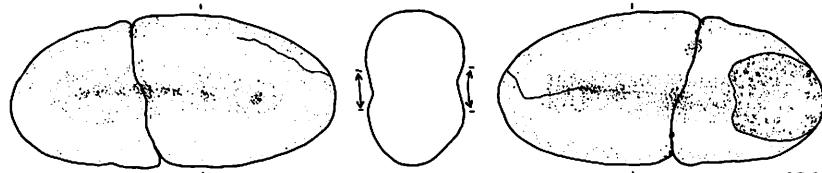
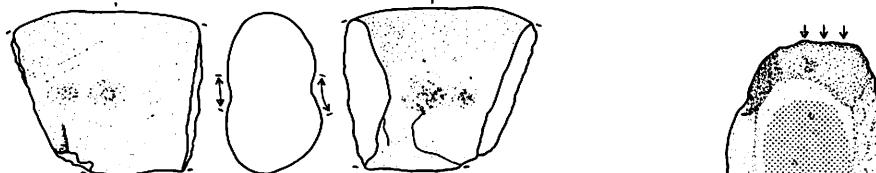


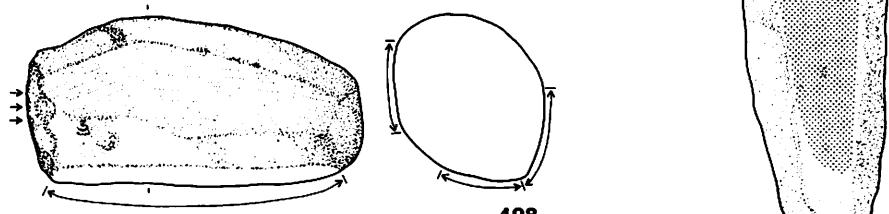
図 38 石器実測図(19)



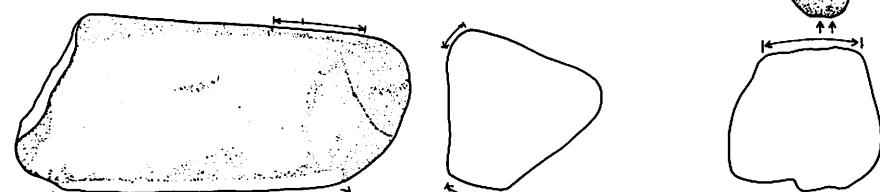
494



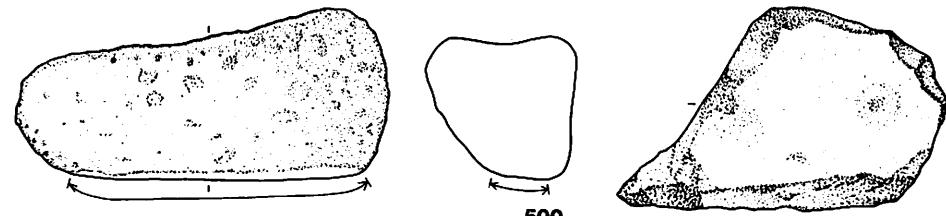
495



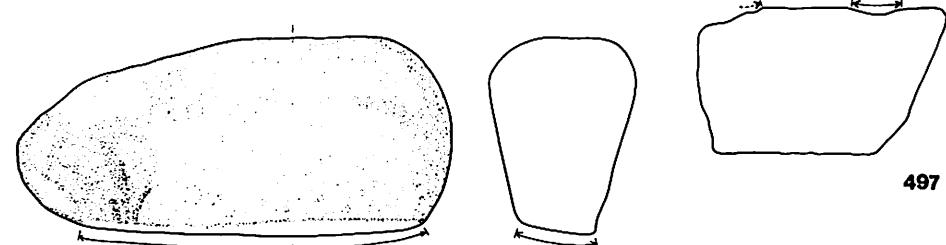
498



496



500



501

0 10cm

図 39 石器実測図(20)

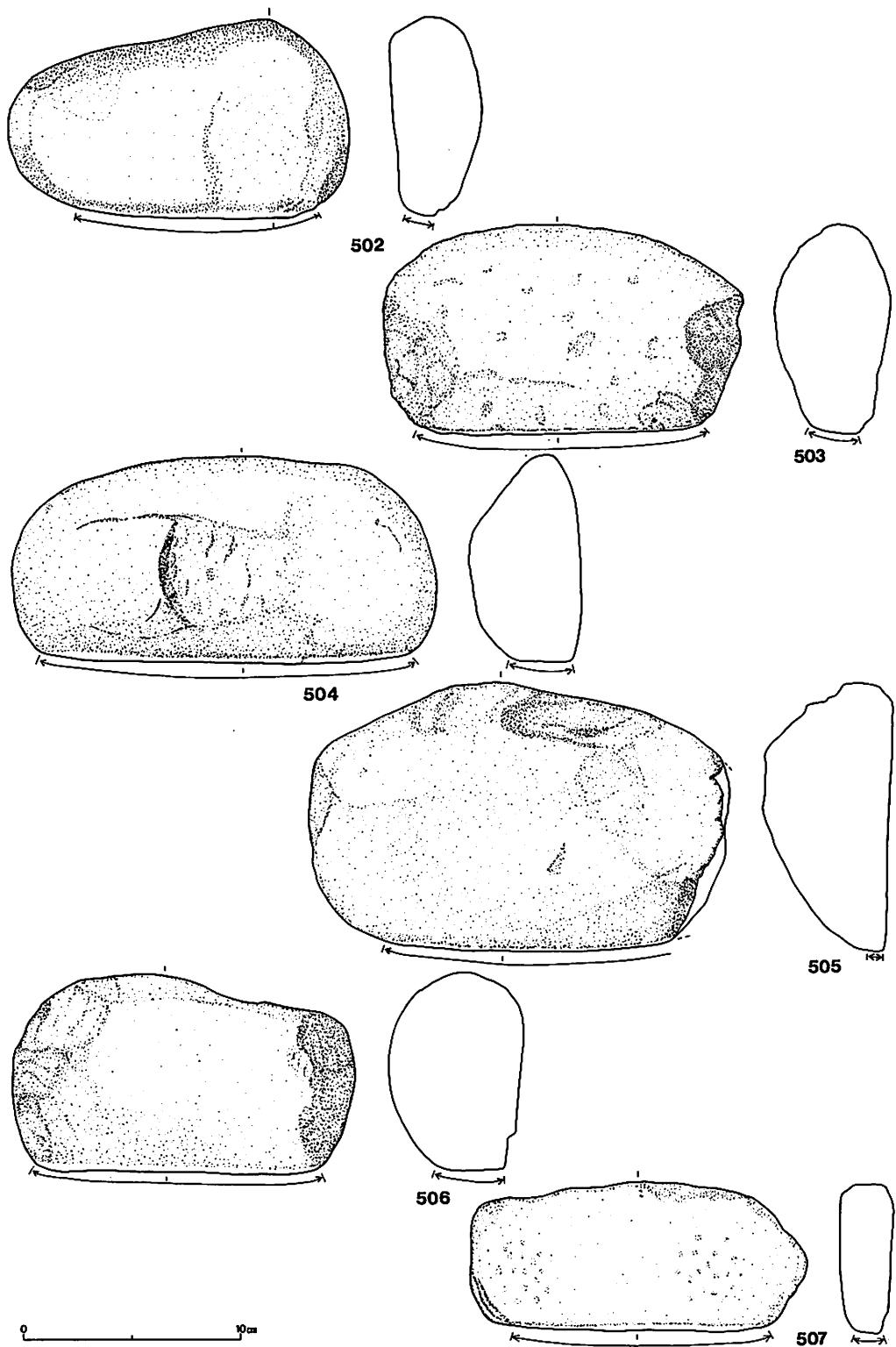


図 40 石器実測図(2)

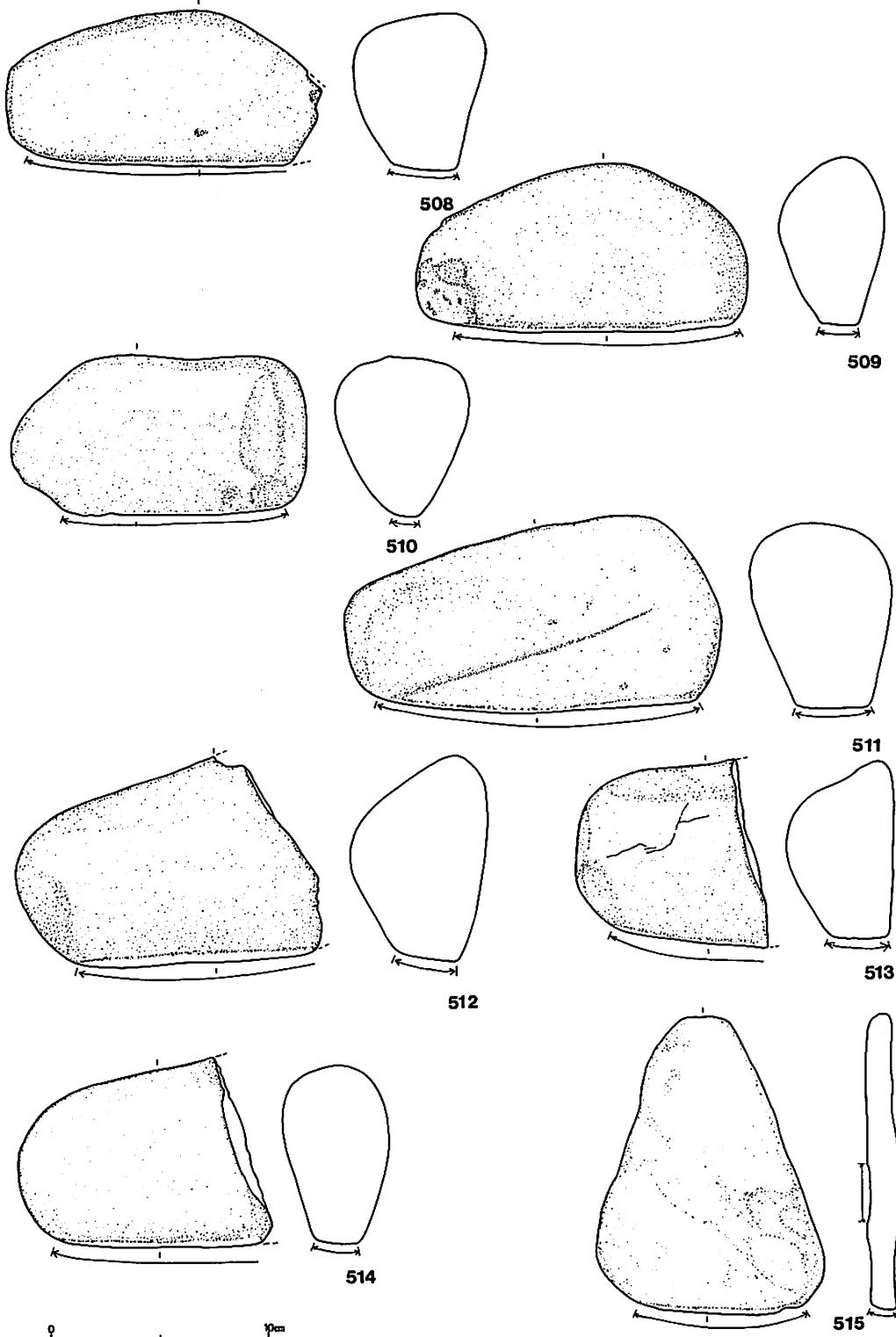


図 41 石器実測図(22)

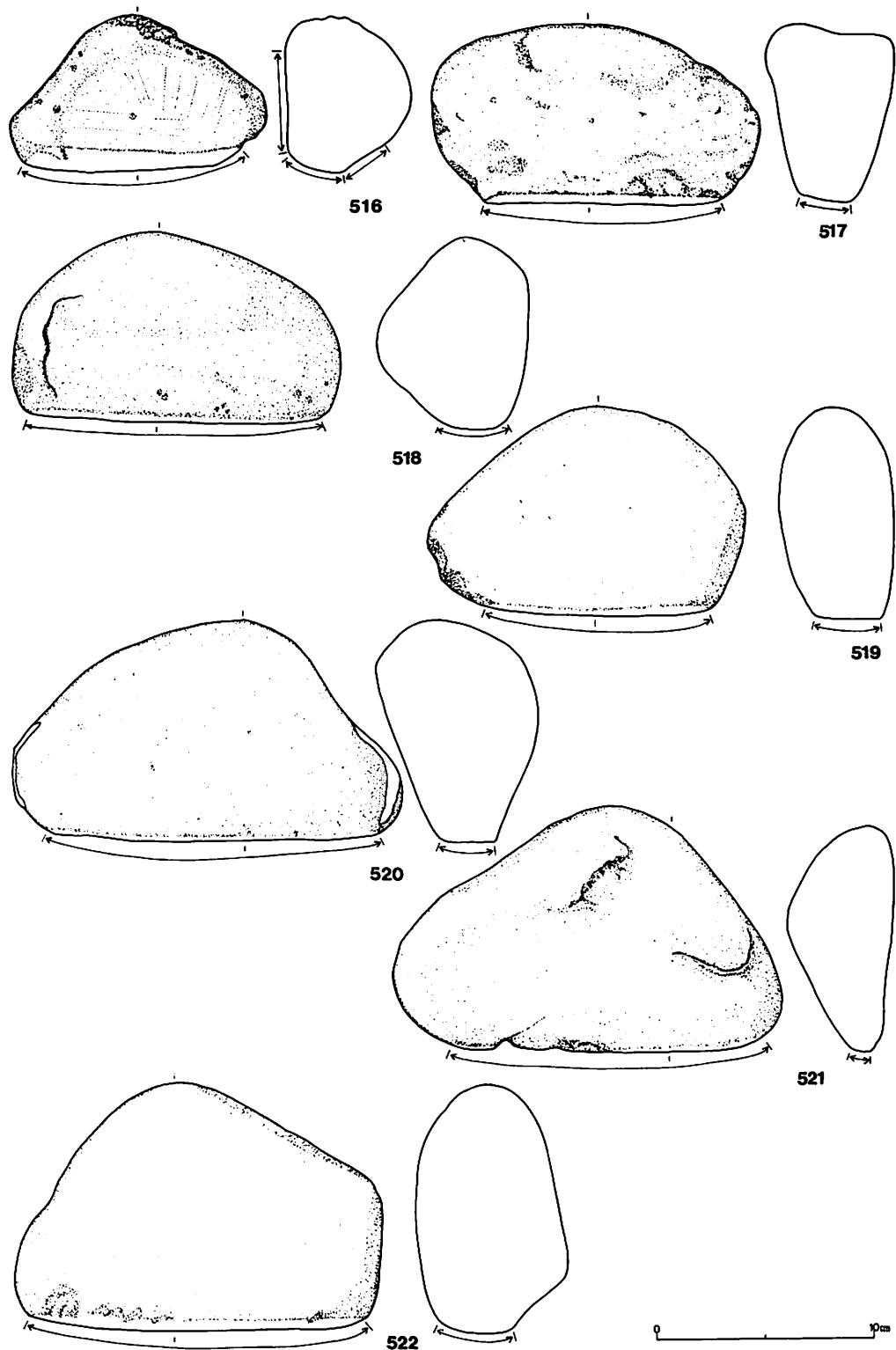
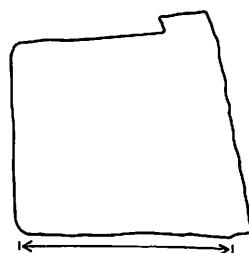
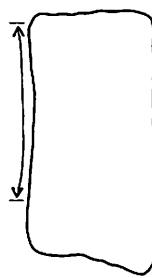
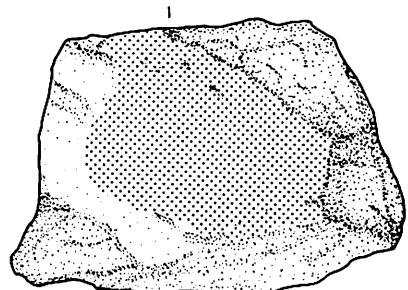
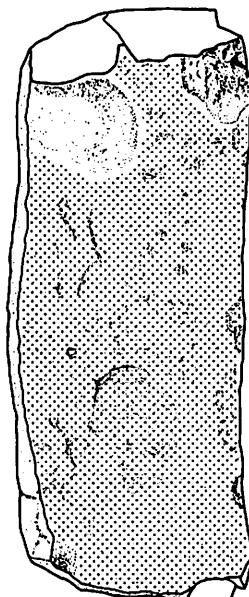
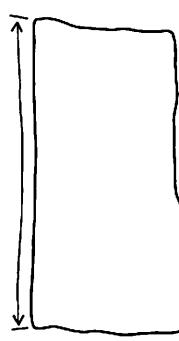
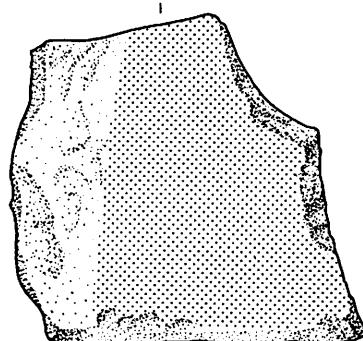


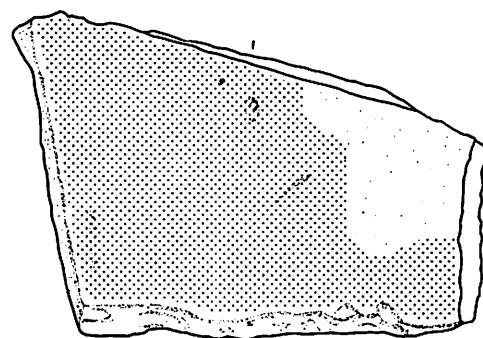
図 42 石器実測図(23)



523



524



526

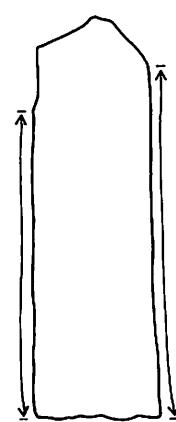
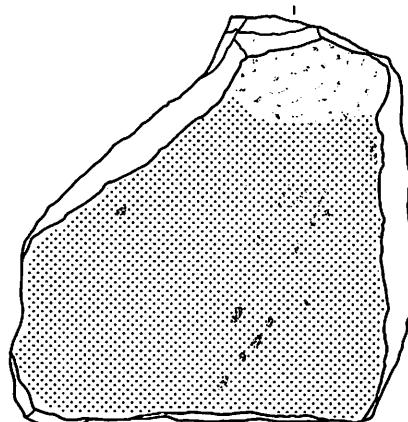
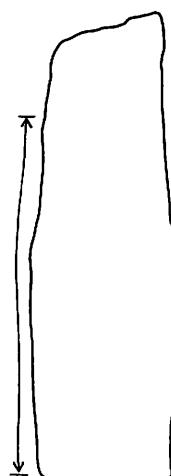
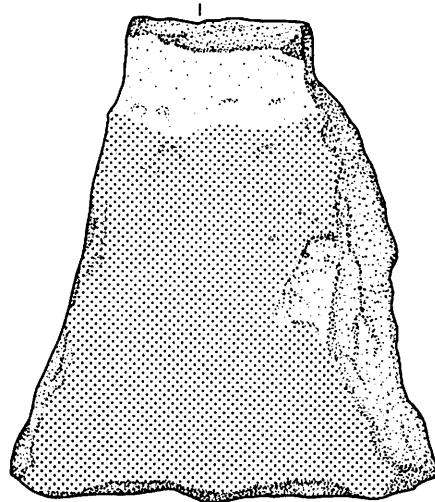
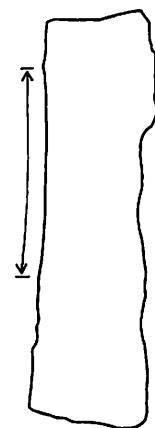
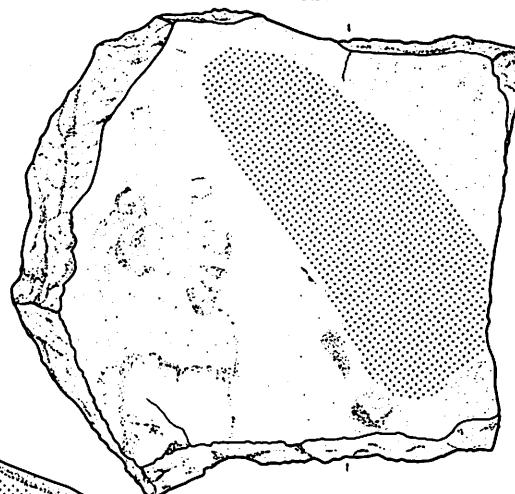


図 43 石器実測図(24)

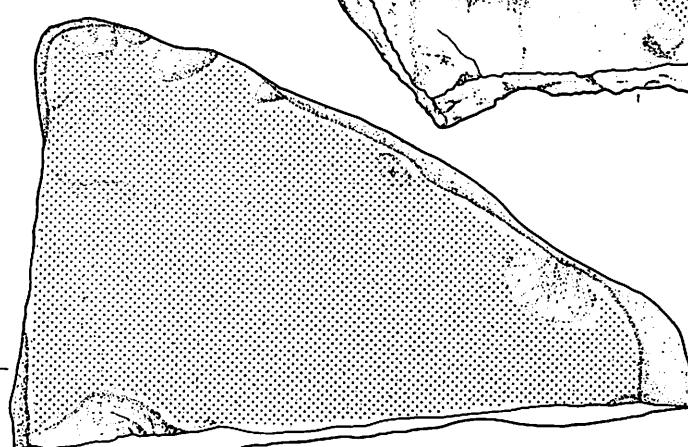




528



529



530

0 10 cm

図 44 石器実測図(2)

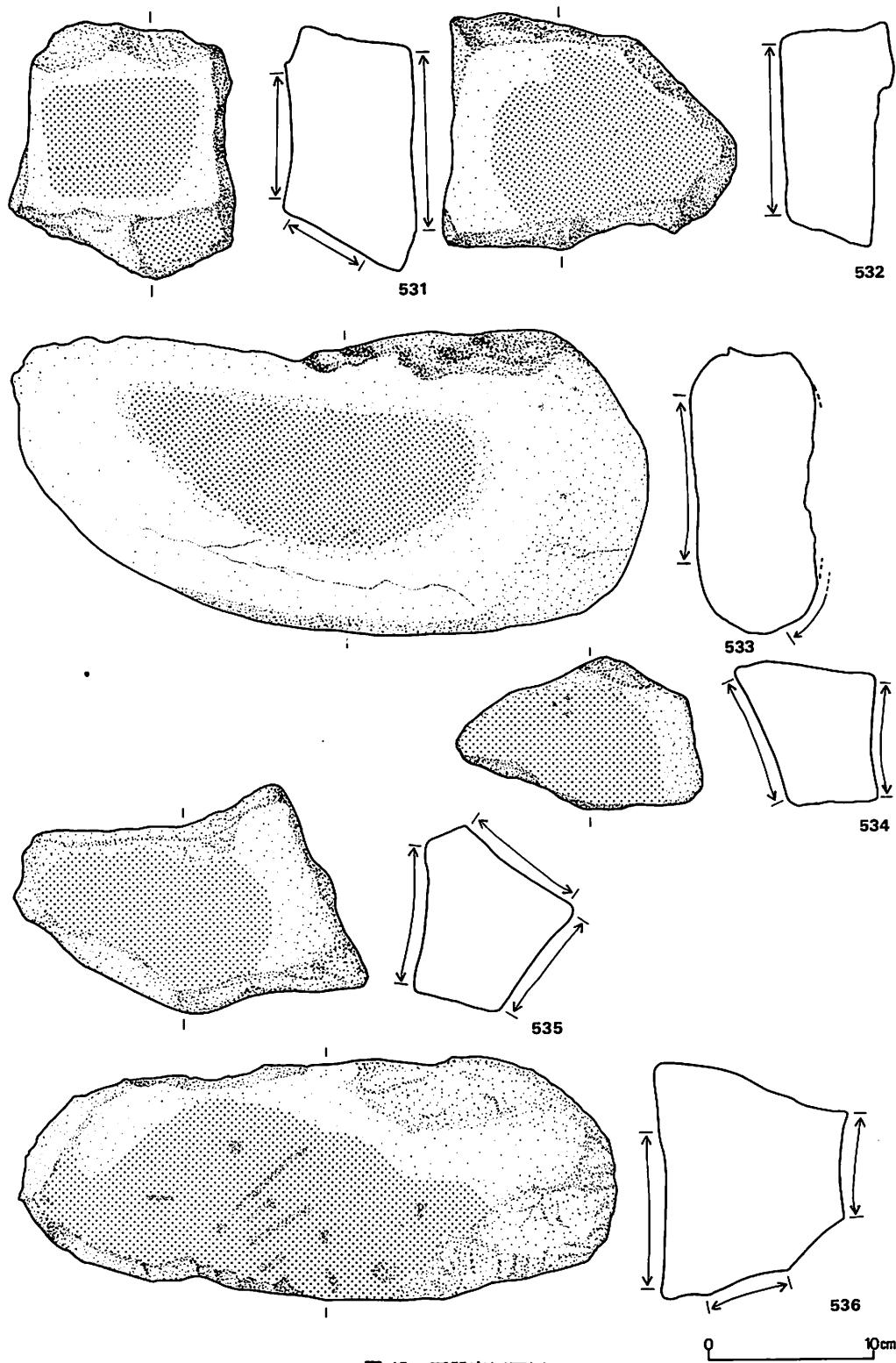


図 45 石器実測図(26)

表2 石器計測値一覧表

押出番号	発掘区	石器番号	名 称	分 類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
1	D-3-c	28	石 錐	I A2a	I	(1.9)	0.8	0.3	(0.5)	Obs.	茎部破損
2	F-3-a	19	"	"	"	2.7	1.0	0.1	0.4	"	
3	E-3-a	38	"	"	III	2.8	1.0	0.4	1.2	"	
4	D-3-d	18	"	"	II	(1.9)	0.7	0.2	(0.3)	"	先端・茎部破損
5	D-3-a	21	"	"	"	(2.9)	0.9	0.3	(0.8)	"	先端部破損
6	G-6-d	30	"	"	III	(2.3)	1.2	0.3	(1.0)	"	先端・茎部破損
7	G-4-b	"	"	"	I'	(2.5)	1.2	0.2	(0.8)	"	茎部破損
8	G-3-a	11	"	"	I	3.6	1.4	0.3	1.9	"	
9	C-3-c	2	"	I A2b	III	(1.4)	1.0	0.2	(0.3)	"	茎部破損
10	C-2-b	14	"	"	"	2.2	1.0	0.2	0.2	"	
11	G-4-b	17	"	"	I	2.3	1.1	0.5	1.0	"	
12	D-4-d	82	"	I A3a	B	1.4	1.2	0.3	0.4	"	
13	"	55	"	"	II	1.5	1.1	0.3	0.3	"	
14	D-5-c	10	"	"	I	1.5	1.4	0.3	0.3	"	
15	E-3-b	52	"	"	II	1.6	1.5	0.3	0.3	"	両面損耗
16	F-7-c	23	"	"	"	1.6	1.5	0.1	0.3	"	
17	"	60	"	"	I	1.4	1.4	0.3	0.4	"	
18	G-5-c	29	"	"	II	1.7	1.4	0.2	0.4	"	
19	G-6-d	"	"	"	III	1.7	1.6	0.5	1.0	"	
20	C-2-a	6	"	"	I	2.0	1.7	0.3	1.0	"	
21	B-2-d	4	"	"	II	2.0	1.4	0.4	1.1	"	
22	E-7-d	33	"	"	III'	2.0	0.8	0.2	0.2	"	
23	C-2-a	6	"	"	I	1.9	(1.2)	0.3	(0.3)	"	茎部破損
24	C-5-a	11	"	I A3b	II	2.0	1.1	0.3	0.5	"	
25	F-5-d	27	"	I A3a	III	2.5	(1.4)	0.4	(1.2)	"	茎部破損
26	E-3-a	1	"	"	I	2.4	1.4	0.3	0.8	"	
27	D-4-d	19	"	I A3b	II	1.0	1.4	0.3	0.3	"	
28	F-7-b	12	"	"	III'	1.3	1.3	0.2	0.4	"	
29	E-4-a	10	"	"	III	1.4	1.3	0.2	0.4	"	
30	G-7-b	"	"	"	II	1.5	(1.3)	0.3	(0.5)	"	茎部破損
31	E-3-b	19	"	"	III	1.5	1.5	0.2	0.4	"	
32	D-3-d	15	"	"	I	(1.4)	1.5	0.2	(0.4)	"	先端部破損
33	E-4-a	10	"	"	III	1.4	1.4	0.3	0.5	"	
34	D-4-d	82	"	"	B	(1.6)	(1.2)	0.2	(0.4)	"	先端・茎部破損
35	F-7-b	12	"	"	III'	(1.7)	1.4	0.2	(0.6)	"	先端部破損
36	F-6-c	93	"	"	"	1.7	(1.3)	0.2	(0.6)	"	茎部破損
37	E-3-d	14	"	"	II	1.6	1.5	0.2	0.5	"	
38	D-5-c	7	"	"	B	1.5	1.6	0.3	0.8	"	
39	E-4-b	19	"	"	III	(1.6)	1.5	0.2	(0.6)	"	先端部破損
40	E-3-b	52	"	"	II	1.6	1.5	0.3	0.4	"	
41	E-4-a	10	"	"	III	1.9	1.5	0.2	0.6	"	
42	C-3-d	17	"	"	I	(1.7)	1.5	0.3	(0.8)	"	先端部破損
43	E-4-a	10	"	"	III	1.8	1.4	0.3	0.6	"	
44	D-4-c	"	"	"	II	1.7	1.7	0.3	0.8	"	
45	G-4-b	29	"	"	I'	1.6	1.4	0.2	0.5	"	
46	F-7-d	55	"	"	II	1.8	(1.6)	0.3	(0.6)	"	茎部破損
47	C-2-a	23	"	"	III	1.9	1.5	0.2	0.6	"	
48	B-5-d	11	"	"	II	2.0	(1.7)	0.3	(0.9)	"	茎部破損
49	E-4-a	5	"	"	"	1.9	1.6	0.2	0.6	"	
50	G-6-a	22	"	"	I	1.5	1.1	0.2	0.4	"	

捕獲番号	発掘区	石器番号	名 称	分 類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
51	F-3-a	20	石 鎌	I A3b	I	1.4	1.0	0.3	0.5	Obs.	焼けている
52	F-8-a	1	"	"	"	(1.9)	(1.0)	0.3	(0.6)	"	側縁・茎部破損
53	F-5-d	47	"	"	III	1.5	1.2	0.3	0.4	"	
54	E-3-c	7	"	"	II	1.8	(1.3)	0.4	(0.6)	"	茎部破損
55	D-3-c	43	"	"	"	1.7	1.2	0.3	0.4	"	
56	D-4-d	55	"	"	"	1.9	(1.2)	0.2	(0.4)	"	茎部破損
57	E-7-d	27	"	"	I	1.9	(1.2)	0.4	(0.6)	"	"
58	F-6-d	12	"	"	"	1.9	1.1	0.2	0.6	"	
59	D-4-d	73	"	"	II	1.9	1.3	0.2	0.7	"	
60	C-3-d	17	"	"	I	(1.6)	1.2	0.2	(0.4)	"	先端・茎部破損
61	G-7-a	95	"	"	II	2.0	1.4	0.4	0.8	"	
62	C-3-d	17	"	"	I	(1.6)	(1.4)	0.2	(0.4)	"	先端・茎部破損
63	F-5-d	27	"	"	III	(1.7)	1.4	0.2	(0.4)	"	先端部破損
64	E-7-d	33	"	"	III'	1.9	1.4	0.3	0.5	"	
65	D-1-b	3	"	"	I	(1.9)	1.4	0.2	(0.4)	"	先端部破損
66	D-3-a	42	"	"	"	1.9	1.4	0.2	0.6	"	
67	G-6-a	22	"	"	"	1.9	1.4	0.3	0.5	"	焼けている
68	E-7-d	33	"	"	III'	1.8	(1.3)	0.2	(0.5)	"	茎部破損
69	G-7-b	37	"	"	II	1.9	1.5	0.3	1.0	"	
70	E-3-b	78	"	"	I	2.1	1.5	0.2	0.6	"	
71	G-4-b	29	"	"	I'	2.1	1.4	0.3	0.7	"	
72	D-4-d	73	"	"	II	1.9	1.2	0.3	0.4	"	
73	B-2-d	4	"	"	"	(2.0)	1.3	0.4	(0.8)	"	先端部破損
74	E-4-b	19	"	"	III	1.9	1.7	0.3	0.8	"	
75	E-3-b	52	"	"	II	2.0	1.5	0.3	0.7	"	
76	D-4-c	17	"	"	"	(1.7)	(1.6)	0.3	(0.7)	"	先端・茎部破損
77	D-4-c	10	"	"	"	(2.0)	1.4	0.3	(0.8)	"	先端部破損
78	E-4-a	17	"	"	III	2.5	(1.3)	0.4	(0.7)	"	茎部破損
79	E-3-b	78	"	"	I	2.2	1.2	0.3	0.5	"	
80	F-5-a	10	"	"	II	2.1	1.2	0.3	0.5	"	
81	D-3-c	43	"	"	"	2.1	1.3	0.3	0.4	"	
82	F-5-d	47	"	"	III	1.9	1.2	0.3	0.5	"	
83	E-2-d	11	"	"	I	(2.3)	(1.2)	0.3	(0.6)	"	先端・茎部破損
84	F-5-d	47	"	"	III	2.2	1.3	0.3	0.5	"	
85	E-4-a	10	"	"	"	2.2	1.5	0.3	0.8	"	
86	D-4-c	"	"	"	"	(2.1)	1.3	0.3	(0.6)	"	先端部破損
87	F-7-a	16	"	"	I	2.2	1.5	0.2	0.6	"	
88	E-3-b	38	"	"	III	2.1	1.7	0.2	0.7	"	
89	E-4-b	7	"	"	"	2.3	1.6	0.5	1.0	"	
90	E-3-b	38	"	"	"	2.3	1.5	0.3	0.8	"	
91	E-4-a	17	"	"	"	(2.1)	1.7	0.3	(0.8)	"	先端部破損
92	G-5-b	43	"	"	II	(2.6)	(1.7)	0.4	(1.3)	"	茎部破損
93	F-4-a	6	"	"	I	2.2	1.4	0.3	0.8	"	
94	G-5-c	28	"	"	II	2.3	(1.6)	0.4	(1.0)	"	茎部破損
95	F-3-a	6	"	"	"	2.5	(1.3)	0.3	(0.8)	"	"
96	E-4-a	10	"	"	III	2.6	1.6	0.3	0.9	"	
97	D-3-a	9	"	"	II	2.8	(1.6)	0.4	(1.1)	"	茎部破損
98	D-3-d	21	"	"	B	2.5	1.5	0.3	0.6	"	
99	E-3-b	78	"	"	I	2.9	1.6	0.3	0.9	"	
100	E-4-a	18	"	"	III	(2.3)	2.4	0.7	(2.5)	"	先端部破損

捕図 番号	発掘区	石器 番号	名 称	分 類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)			
101	A-2-c	2	石 鐵	I A 4	I	2.9	1.7	0.4	1.7	Obs.	
102	F-5-d	28	"	I A 5	III	(1.5)	1.3	0.3	(0.6)	"	先端・茎部破損
103	G-6-c	8	"	"	II	2.0	1.4	0.4	0.9	"	
104	B-2-d	11	"	"	"	(1.9)	1.4	0.4	(0.7)	"	茎部破損
105	F-4-d	3	"	"	III	(2.3)	1.7	0.3	(0.8)	"	先端・茎部破損
106	G-6-a	12	"	"	"	(2.8)	1.6	0.5	(1.5)	"	先端部破損
107	E-4-a	2	"	"	I	(3.7)	1.9	0.5	(2.0)	"	茎部破損
108	F-5-d	8	石 槍	I B 1	III	(3.9)	2.1	0.6	(2.8)	"	先端部破損
109	G-4-b	23	"	"	I	5.1	2.7	0.9	8.4	"	
110	G-6-d	31	"	"	III	(2.6)	(1.7)	0.4	(1.7)	"	側縁・茎部破損
111	E-7-d	36	"	I B 2	III'	(1.7)	2.0	0.6	(2.0)	"	尖頭部破損
112	F-5-c	11	"	"	I	(2.3)	(2.3)	0.6	(3.1)	"	先端・茎部破損
113	D-4-d	20	"	"	II	(2.8)	(2.3)	0.7	(3.7)	"	尖頭部破損
114	G-3-a	30	"	"	I'	(4.1)	2.0	0.7	(4.2)	"	先端・茎部破損
115	D-3-c	58	"	"	B	(4.5)	3.1	0.7	(8.9)	"	下半部破損
116	F-7-d	40	石 錐	II A 1	II	1.1	0.6	0.3	0.3	"	
117	E-3-b	30	"	"	"	1.6	0.8	0.5	0.5	"	
118	"	"	"	"	"	1.6	0.9	0.5	0.7	"	
119	F-4-c	28	"	"	III	2.0	0.7	0.3	0.5	"	
120	G-7-a	84	"	"	I	2.1	0.8	0.4	0.6	"	
121	E-3-b	59	"	"	"	2.0	0.8	0.4	0.6	"	
122	E-3-a	1	"	"	"	1.9	0.8	0.4	0.6	"	
123	E-7-d	32	"	"	III'	1.9	1.0	0.4	0.8	"	
124	E-3-b	36	"	"	III	1.7	0.9	0.5	0.7	"	
125	E-2-d	10	"	"	I	2.1	1.0	0.4	0.9	"	
126	F-6-c	85	"	"	"	2.0	0.8	0.4	0.6	"	
127	F-4-c	37	"	"	"	2.0	0.9	0.3	0.7	"	
128	E-3-b	30	"	"	II	2.2	0.8	0.3	0.6	"	
129	G-4-b	36	"	"	I	2.1	0.9	0.4	0.7	"	
130	"	33	"	"	I'	2.5	0.8	0.5	1.1	"	
131	F-4-d	10	"	"	III	2.4	1.0	0.5	1.2	"	
132	D-4-d	52	"	"	II	2.3	1.2	0.6	1.3	"	
133	G-5-b	38	"	"	II	2.1	1.1	0.4	1.1	"	
134	"	44	"	"	"	2.7	0.9	0.6	1.5	"	
135	F-4-d	10	"	"	III	(1.9)	0.9	0.4	(0.7)	"	上下端部破損
136	G-7-a	90	"	"	II	(2.1)	0.7	0.3	(0.7)	"	上部破損
137	E-4-a	20	"	"	III	(2.6)	0.9	0.5	(1.2)	"	上下端部破損
138	"	5	"	"	II	2.6	1.0	0.6	1.5	"	
139	G-5-b	38	"	"	"	(2.7)	1.0	0.3	(0.9)	"	先端部破損
140	D-4-d	77	"	"	III	3.2	1.0	0.7	2.3	"	
141	G-6-b	29	"	"	I	2.7	1.1	0.4	1.1	"	
142	E-2-d	10	"	"	"	(3.0)	1.0	0.6	(1.8)	"	先端部破損
143	G-5-a	58	"	"	II	3.0	1.2	0.7	2.1	"	
144	F-7-d	38	"	"	"	(3.3)	1.1	0.5	(1.8)	"	先端部破損
145	"	"	"	"	"	3.1	1.1	0.4	1.5	"	
146	F-5-c	18	"	"	III	(2.8)	1.3	0.8	(2.4)	"	上部破損
147	D-3-c	55	"	"	II	3.5	1.3	0.6	2.1	"	
148	G-6-a	25	"	"	I	3.1	1.2	0.4	1.4	"	
149	E-3-b	36	"	"	III	(2.2)	0.7	0.4	(0.6)	"	下半部破損
150	F-5-d	46	"	"	"	3.0	0.9	0.5	1.6	"	

捕獲番号	発掘区	石器番号	名 称	分 類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
151	E-3-b	69	石 錐	II A 1	III	3.8	0.6	0.6	1.2	Obs.	
152	D-4-d	72	"	"	II	3.9	1.0	0.5	2.8	"	
153	F-7-a	19	"	"	I	2.8	1.2	0.4	1.3	"	
154	F-5-d	46	"	"	III	3.4	1.1	0.5	2.0	"	
155	G-7-d	8	"	"	I	3.9	1.3	0.9	4.0	"	
156	G-6-c	11	"	"	"	3.9	1.3	0.7	2.6	"	
157	F-7-c	57	"	"	II	4.2	1.4	0.8	4.2	"	
158	F-7-d	40	"	II A 2	"	2.4	2.5	0.8	4.2	"	
159	G-6-d	28	"	"	III	2.7	(2.5)	0.8	(3.7)	"	側縁部破損
160	E-7-d	32	"	"	III'	3.7	1.6	0.6	2.8	"	
161	F-7-d	2	"	"	I	3.7	1.6	0.5	2.0	"	
162	E-4-a	22	"	"	III	(3.7)	1.5	0.7	(3.6)	"	先端部破損
163	F-3-a	"	"	"	I	3.6	1.9	0.7	4.1	"	
164	G-6-a	19	"	"	"	(3.8)	1.8	0.5	(2.5)	"	先端部破損
165	D-4-d	72	"	"	II	3.6	2.0	0.9	4.4	"	
166	G-6-a	19	"	"	I	3.9	2.3	0.8	4.9	"	
167	E-3-a	23	"	"	"	4.0	1.9	0.6	4.5	"	
168	D-3-a	36	"	"	"	5.0	1.8	0.7	4.8	"	
169	D-3-c	41	"	"	II	5.2	1.9	0.5	3.5	"	
170	G-3-a	37	"	"	I'	(2.9)	2.2	0.6	(3.4)	"	先端部破損
171	E-4-c	26	"	"	I	3.7	(3.8)	0.7	(4.3)	"	側縁部破損
172	G-4-b	20	"	"	"	(4.0)	2.5	0.9	(7.8)	"	先端部破損
173	D-4-d	51	"	"	II	(4.2)	2.6	0.9	(7.4)	"	"
174	F-7-c	23	"	"	"	(4.8)	2.5	0.7	(7.8)	"	"
175	D-3-c	41	"	"	"	5.6	2.9	0.6	6.7	"	
176	F-7-a	18	"	II A3a	I	(2.4)	1.8	0.3	(1.3)	"	先端部破損
177	D-3-c	57	"	"	B	3.0	1.6	0.4	1.5	"	
178	F-3-d	35	"	"	I	3.1	(2.0)	1.0	(4.6)	"	側縁部破損
179	G-5-a	52	"	"	II	3.1	1.9	0.7	4.0	"	
180	B-5-d	20	"	"	"	3.4	1.6	0.4	1.6	"	
181	G-6-d	27	"	"	III	4.0	2.0	0.6	5.4	"	
182	F-6-c	92	"	"	I	3.6	1.5	0.9	4.2	"	
183	C-5-c	6	"	"	II	4.6	2.5	0.9	6.3	"	
184	D-3-c	33	"	"	"	(3.9)	2.9	1.0	(7.7)	"	先端部破損
185	F-3-a	15	"	"	"	5.4	2.4	0.9	6.2	"	
186	G-6-a	2	"	"	I	3.6	3.7	0.9	11.0	"	
187	E-7-d	31	"	"	III'	4.1	3.0	0.6	7.0	"	
188	F-3-d	24	"	"	I'	3.8	3.3	0.8	8.6	"	
189	E-3-b	68	"	II A3b	III	1.7	2.1	0.4	1.1	"	
190	F-4-c	36	"	"	I	2.4	2.4	1.0	2.9	"	
191	E-3-b	68	"	"	III	2.0	2.8	1.0	3.3	"	
192	E-7-d	31	"	"	III'	(2.2)	2.6	0.5	(2.4)	"	先端部破損
193	G-5-b	45	"	"	II	2.3	3.0	1.1	4.5	"	
194	E-4-d	24	"	"	I	2.6	3.3	0.7	4.6	"	
195	G-6-a	20	"	"	"	2.7	2.4	0.9	3.3	"	
196	E-6-a	5	"	"	"	2.6	2.2	0.6	1.8	"	
197	F-6-c	91	"	"	"	2.5	1.8	0.6	1.4	"	
198	F-5-d	42	"	"	III	3.0	2.3	0.5	2.2	"	
199	F-2-b	22	"	"	I	2.6	1.9	0.4	1.6	"	
200	D-3-c	24	"	"	"	3.0	2.0	0.5	2.4	"	

拂図番号	発掘区	石器番号	名 称	分 類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)			
201	E-7-d	31	石 锥	II A3b	III'	2.8	2.2	0.4	1.3	Obs.	
202	G-5-b	37	"	"	II	2.9	2.4	0.7	3.4	"	
203	F-3-a	15	"	"	"	(2.9)	2.1	0.8	(4.1)	"	先端部破損
204	E-5-a	5	"	"	I	3.0	2.7	0.7	4.5	"	
205	E-2-c	"	"	"	"	3.0	2.9	0.6	3.9	"	
206	G-5-a	52	"	"	II	(3.3)	2.5	0.9	(4.5)	"	先端部破損
207	D-4-d	71	"	"	"	(3.9)	(2.8)	0.8	(6.1)	"	先端・側縁部破損
208	C-5-c	6	"	"	"	3.1	3.3	0.8	5.9	"	
209	F-7-d	39	"	"	"	(2.7)	2.8	0.3	(2.4)	"	先端部破損
210	G-5-b	37	"	"	"	3.3	2.9	0.6	4.3	"	
211	D-3-b	2	"	"	I	3.4	3.3	0.7	7.5	"	
212	C-5-b	8	"	"	II	3.6	3.2	0.6	7.5	"	
213	F-5-d	41	"	"	III	3.0	(2.5)	0.6	(3.7)	"	側縁部破損
214	E-3-a	1	"	"	I	3.4	2.4	0.6	3.3	"	
215	F-7-a	18	"	"	"	(3.9)	3.3	0.7	(6.0)	"	先端部破損
216	F-3-d	26	"	"	I'	(3.7)	3.3	1.0	(8.7)	"	"
217	"	"	"	"	"	4.1	2.8	0.8	5.7	"	
218	"	35	"	"	I	3.9	(3.7)	1.2	(10.9)	"	側縁部破損
219	D-3-c	56	"	"	B	4.6	3.0	0.6	7.2	"	
220	"	24	"	"	I	4.5	3.2	0.7	8.5	"	
221	"	53	"	"	II	4.6	4.1	1.4	12.0	"	
222	G-5-d	6	"	"	I	4.5	5.2	0.7	17.0	"	
223	E-4-c	21	"	"	III	2.4	1.3	0.4	1.1	"	
224	F-3-a	23	"	"	"	2.5	1.5	0.4	1.6	"	
225	E-3-d	12	"	"	II	(3.4)	1.5	0.6	(2.5)	"	先端部破損
226	C-3-d	20	"	"	I	3.4	(2.3)	0.7	(4.8)	"	側縁部破損
227	F-7-a	2	"	"	"	3.5	1.9	0.7	3.9	"	
228	E-3-c	16	"	"	III	3.8	2.4	0.4	3.1	"	
229	F-6-c	91	"	"	I	4.0	2.7	1.1	8.7	"	
230	D-2-a	1	"	"	"	4.0	2.1	0.7	3.8	"	
231	E-2-b	9	"	"	III	(3.9)	1.6	0.5	(2.5)	"	上端部破損
232	D-4-c	22	"	"	II	4.0	1.8	0.7	4.2	"	
233	E-7-d	37	"	"	III'	(3.9)	(2.5)	0.8	(6.0)	"	先端・側縁部破損
234	D-3-c	56	"	"	B	4.2	2.4	0.7	5.0	"	
235	D-4-d	51	"	"	II	(4.3)	2.7	0.7	(6.1)	"	先端部破損
236	G-5-a	52	"	"	"	(4.5)	2.5	0.8	(7.3)	"	"
237	E-3-b	76	"	"	I	4.2	2.7	0.5	4.0	"	
238	F-5-c	2	"	"	III	(5.1)	1.6	0.5	(4.2)	"	上下端部破損
239	F-5-d	42	"	II A 4	II	2.8	(2.5)	0.6	(3.4)	"	刺突部破損
240	G-6-b	23	"	"	"	(3.3)	(3.1)	0.7	(4.8)	"	"
241	F-3-a	14	"	"	"	3.0	(2.9)	0.5	(3.5)	"	"
242	G-5-a	52	"	"	I	(3.8)	(3.9)	0.8	(7.3)	"	"
243	F-3-d	35	"	"	"	(2.6)	(3.1)	1.0	(4.3)	"	"
244	E-3-b	76	"	"	"	(3.5)	(3.2)	0.8	(6.7)	"	"
245	G-4-b	18	"	"	"	3.8	3.0	1.1	8.7	"	
246	"	20	"	"	"	(3.6)	3.5	1.0	(8.0)	"	刺突部破損
247	F-3-c	19	"	II A 5	"	(2.4)	1.0	0.4	(0.9)	"	上部破損
248	F-5-d	40	"	"	III	3.0	1.0	0.4	1.1	"	
249	F-6-d	11	"	"	I	3.3	1.0	0.4	1.3	"	
250	G-7-a	75	"	"	II	3.1	1.0	0.3	0.9	"	

捕団番号	発掘区	石器番号	名 称	分類	層位	規 格			重量(g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
251	F-7-c	37	石 锥	II A 5	III'	3.4	0.9	0.4	1.3	Obs.	
252	F-7-d	2	"	"	I	3.0	0.8	0.4	0.7	"	
253	F-6-c	92	"	"	"	3.0	0.6	0.2	0.4	"	
254	F-7-d	38	"	"	II	3.6	0.8	0.4	1.1	"	
255	D-3-a	22	"	"	"	3.9	0.7	0.4	0.8	"	
256	D-3-c	55	"	"	"	3.7	0.8	0.4	1.1	"	
257	F-7-d	43	"	"	"	3.6	1.0	0.3	1.2	"	
258	F-5-b	24	"	"	I	3.8	1.0	0.4	1.3	"	
259	D-3-c	30	"	"	II	4.5	0.9	0.4	1.4	"	
260	F-3-b	12	つまみ付きナイフ	II A 1	III	3.8	1.2	0.7	2.6	"	
261	E-3-b	64	"	"	"	3.7	1.8	0.8	4.7	"	
262	E-4-a	22	"	"	"	5.1	1.5	0.9	6.1	"	
263	F-3-a	17	"	"	II	4.0	2.1	0.6	4.7	"	
264	F-7-d	24	"	"	III'	9.2	2.7	1.2	31.2	Ha-Sh.	
265	E-4-a	5	"	II A 2	II	3.7	1.0	0.6	2.2	Obs.	
266	F-3-d	34	"	"	I	4.6	1.6	0.9	5.7	"	
267	E-4-a	22	"	"	III	3.8	1.7	0.8	3.6	"	
268	E-3-b	74	"	"	I	4.2	2.0	1.0	6.9	"	
269	D-3-c	39	"	"	II	3.6	2.2	0.5	3.5	"	
270	E-3-b	64	"	"	III	3.8	2.0	0.6	4.8	"	
271	C-3-d	11	"	"	"	4.5	2.4	0.7	6.2	"	
272	C-1-c	2	"	"	II	5.9	2.5	0.7	10.4	"	
273	G-7-a	52	"	"	I	9.0	2.2	1.1	26.3	Ha-Sh.	
274	E-3-a	1	"	"	"	6.5	2.1	0.8	9.2	Obs.	
275	B-1-b	"	"	III A3a	II	4.1	1.8	0.6	3.5	"	
276	F-5-d	36	"	"	III	4.7	2.0	0.8	6.9	"	
277	F-7-d	35	"	"	II	4.3	2.9	0.7	6.8	"	
278	D-3-d	14	"	"	I	4.3	2.4	0.7	5.6	"	
279	D-4-d	69	"	"	II	4.8	2.7	0.9	8.8	"	
280	F-7-d	56	"	"	"	4.2	2.2	0.5	4.0	"	
281	C-5-d	9	"	"	"	4.3	2.9	0.9	7.3	"	
282	F-3-b	6	"	"	III	4.2	3.4	0.8	8.0	"	
283	G-5-a	36	"	"	"	4.2	2.1	0.8	5.5	"	
284	G-7-a	30	"	"	I	5.1	1.7	0.6	4.6	"	
285	E-3-c	28	"	"	III	5.8	2.3	0.8	11.8	"	
286	E-7-c	7	"	"	III'	6.1	2.7	0.8	9.4	"	
287	G-7-b	31	"	III A3b	I	3.3	1.2	0.5	1.5	"	
288	E-3-b	54	"	"	II	4.0	1.5	0.9	4.8	"	
289	G-7-a	52	"	"	I	4.1	1.4	0.9	4.1	"	
290	E-7-d	25	"	"	"	4.0	1.5	0.5	2.3	"	
291	F-7-d	35	"	"	II	3.8	1.4	0.6	4.3	"	
292	F-5-d	45	"	"	III	3.7	1.5	0.6	3.3	"	
293	G-7-b	7	"	"	I	(2.5)	2.1	0.4	(1.7)	"	下端部破損
294	F-4-c	34	"	"	"	2.8	2.2	0.7	3.8	"	
295	D-3-d	19	"	"	B	3.1	2.0	0.8	2.6	"	
296	D-4-d	54	"	"	II	4.1	1.8	0.5	3.3	"	
297	F-4-c	22	"	"	III	3.7	1.8	0.7	5.0	"	
298	D-4-d	54	"	"	II	3.2	2.9	0.5	4.0	"	
299	F-7-a	9	"	"	III'	3.8	3.0	1.0	8.2	"	
300	D-2-d	2	"	"	III	2.9	3.4	0.7	4.6	"	

挿図 番号	発掘区	石器 番号	名 称	分 類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
301	E-3-a	18	つまみ付きナイフ	III A3b	I	(3.7)	3.5	0.8	(6.4)	Obs.	下端部破損
302	D-3-a	23	"	"	II	3.6	2.4	0.6	4.2	"	
303	G-7-b	7	"	"	I	3.8	2.9	0.7	7.4	"	
304	D-3-a	35	"	"	II	3.8	2.8	0.4	4.1	"	
305	D-3-c	59	"	"	B	(3.3)	2.3	0.7	(5.1)	"	下半部破損
306	D-4-a	1	"	"	I	4.9	2.3	0.7	6.8	"	
307	G-7-a	93	"	"	II	4.6	2.2	0.5	4.5	"	
308	G-5-a	36	"	"	III	(4.1)	2.1	0.5	(3.8)	"	下端部破損
309	F-7-d	35	"	"	II	5.1	2.3	1.0	8.4	"	
310	C-2-a	17	"	"	I	4.7	2.0	0.8	6.7	"	
311	D-5-b	2	"	"	II	4.6	2.2	0.7	6.3	"	
312	G-7-a	96	"	"	II	4.4	2.3	0.8	6.3	"	
313	F-2-a	2	"	"	I'	4.3	2.3	0.6	5.4	"	
314	G-7-a	52	"	"	I	(4.4)	2.6	0.7	(7.7)	"	下端部破損
315	E-3-b	54	"	"	II	4.8	2.4	0.5	6.6	"	
316	F-5-d	26	"	"	III	(2.7)	1.9	0.5	(3.0)	"	下半部破損
317	C-2-b	11	"	"	I	4.5	2.0	0.7	4.9	"	
318	D-3-a	35	"	"	II	4.9	1.7	0.6	5.0	"	
319	D-2-b	2	"	"	III	3.7	1.8	0.6	4.0	"	
320	E-4-a	5	"	"	II	4.2	1.8	0.7	5.7	"	
321	E-7-d	19	"	"	III'	4.2	1.5	0.5	3.3	"	
322	G-6-d	26	"	"	III	4.8	1.6	0.6	3.8	"	
323	D-5-b	2	"	"	II	5.1	1.6	0.4	3.9	"	
324	F-3-d	34	"	"	I	5.4	1.9	0.7	6.3	"	
325	G-7-a	52	"	"	II	5.8	1.9	0.5	4.8	"	
326	F-5-d	25	"	"	III	(6.0)	1.8	1.0	(10.6)	"	下端部破損
327	F-7-a	15	"	"	I	4.6	1.9	0.7	6.3	"	
328	D-5-b	2	"	"	II	4.7	2.2	0.7	9.4	"	
329	D-3-c	52	"	"	II	4.8	2.8	0.7	7.4	"	
330	F-5-d	45	"	"	III	4.5	2.2	0.8	5.5	"	
331	E-4-a	5	"	"	II	5.0	2.7	0.6	9.4	"	
332	G-3-a	36	"	"	I'	4.7	2.6	0.7	7.3	"	
333	C-3-d	8	"	"	III	5.2	2.8	0.8	9.8	"	
334	F-7-b	10	"	"	III'	(4.7)	2.4	0.5	(5.6)	"	下端部破損
335	E-4-a	5	"	"	II	4.5	2.9	0.7	8.5	"	
336	F-5-d	36	"	"	III	(6.5)	3.5	1.0	(25.7)	Aga.	下端部破損
337	F-5-a	21	"	"	II	5.5	2.6	0.7	10.0	Obs.	
338	G-4-b	27	"	"	I'	4.8	3.8	0.7	8.1	"	
339	F-5-c	19	"	"	III	5.6	2.9	0.8	8.9	"	
340	C-3-c	5	"	III A 5	"	2.7	2.8	0.7	4.8	"	
341	F-7-d	35	"	III A 6b	II	2.3	3.8	0.7	5.1	"	
342	D-3-d	14	"	"	I	3.0	3.7	0.5	4.6	"	
343	F-4-c	22	"	III A 6a	III	2.3	3.6	0.6	2.6	"	
344	D-3-a	35	"	III A 6b	I	3.2	4.7	0.4	5.8	"	
345	C-3-d	22	"	III A 6a	"	2.8	4.1	0.4	3.8	"	
346	D-3-c	39	"	III A 7	II	2.7	3.1	0.6	4.0	"	
347	G-6-b	19	"	III A 6b	"	3.6	4.7	0.9	9.9	"	
348	F-5-d	36	"	III A 7	III	1.8	2.7	0.7	3.1	"	
349	D-4-d	69	"	"	II	2.1	2.8	0.9	5.0	"	
350	F-3-d	34	"	III A 6b	I	2.7	3.2	0.7	5.5	Ha-Sh.	

挿図番号	発掘区	石器番号	名 称	分類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)			
351	D-3-d	19	つまみ付きナイフ	III A 7	B	1.8	3.2	0.4	2.4	Obs.	
352	G-6-b	"	"	"	II	1.9	4.0	0.7	4.9	"	
353	D-3-a	35	"	"	I	2.2	2.9	0.6	4.1	"	
354	G-4-b	24	スクレイバー	III Bla	"	2.2	2.0	0.4	1.5	"	
355	F-5-c	20	"	"	III	2.7	2.0	0.5	2.7	"	
356	G-5-c	17	"	"	I	2.9	2.3	0.7	4.6	"	
357	G-5-a	35	"	"	III	2.7	2.3	0.9	3.8	"	
358	"	49	"	"	II	2.4	2.3	0.7	3.7	"	
359	D-3-a	34	"	"	I	2.6	2.5	0.6	3.7	"	
360	F-5-d	23	"	"	III	2.7	2.4	0.7	4.2	"	
361	F-8-a	8	"	"	III'	2.8	1.8	0.5	2.9	"	
362	D-3-d	2	"	"	I	3.1	2.2	0.5	3.5	"	
363	F-4-d	3	"	"	III	2.9	2.2	0.6	3.6	"	
364	F-7-d	34	"	"	II	(2.8)	2.3	0.6	(3.9)	"	上端部破損
365	G-7-a	61	"	"	I	3.2	2.5	0.4	3.8	"	
366	D-3-d	20	"	"	B	2.9	2.5	0.6	5.2	"	
367	D-3-a	30	"	"	III	3.0	2.4	0.8	4.6	"	
368	F-5-c	20	"	"	"	3.5	2.4	0.6	4.6	"	
369	D-3-d	"	"	"	B	3.1	1.9	0.8	4.6	"	
370	F-4-c	11	"	"	III	3.2	2.0	0.8	3.7	"	
371	D-3-b	13	"	"	I	3.3	2.2	0.6	4.2	"	
372	F-5-b	20	"	"	III	3.0	2.1	0.7	3.7	"	
373	G-4-b	24	"	"	I	3.3	2.2	0.7	4.8	"	
374	E-3-c	2	"	"	"	3.0	2.7	0.7	6.1	"	
375	E-4-a	5	"	"	II	3.8	2.6	0.8	6.4	"	
376	F-7-a	8	"	"	III'	3.4	2.2	0.7	4.6	"	
377	G-6-a	17	"	"	I	3.4	(2.2)	0.6	(3.8)	"	刃部破損
378	H-6-b	2	"	"	"	3.4	2.1	0.8	5.5	"	
379	G-5-a	56	"	"	II	3.4	2.5	0.8	5.5	"	
380	F-3-d	29	"	"	I'	3.5	2.5	0.6	4.5	"	
381	E-7-d	10	"	"	II	4.0	2.1	0.8	5.5	"	
382	G-3-a	29	"	"	I'	3.0	2.1	0.7	4.6	"	
383	E-3-c	30	"	"	III	(3.0)	2.2	0.5	(3.4)	"	上端部破損
384	E-4-a	5	"	"	II	3.5	2.4	0.7	5.5	"	
385	G-4-d	24	"	"	I	3.3	2.7	0.8	7.1	"	
386	F-7-d	"	"	"	III'	4.0	2.6	0.8	8.0	"	
387	F-7-c	23	"	"	II	3.8	2.3	0.5	4.9	"	
388	D-3-a	24	"	"	"	3.5	2.8	0.9	9.4	"	
389	F-3-d	29	"	"	I'	3.6	2.7	0.8	7.6	"	
390	F-6-a	7	"	III Blb	I	2.9	2.4	0.9	5.5	"	
391	F-5-b	4	"	"	III	3.0	2.8	0.7	5.6	"	
392	F-7-d	34	"	"	II	3.0	2.5	0.4	3.0	"	
393	"	50	"	"	"	3.7	3.0	0.7	6.4	"	
394	C-2-a	21	"	III Blc	III	1.8	2.8	0.7	3.5	"	
395	B-5-d	9	"	"	II	(2.2)	2.3	0.4	(2.5)	"	上部破損
396	D-4-d	70	"	III Bld	"	3.8	2.3	0.6	6.9	"	
397	D-4-c	16	"	"	III	3.6	2.9	0.5	6.5	"	
398	G-7-b	35	"	"	II	3.7	2.5	0.5	6.8	"	
399	F-7-d	15	"	III B 2	"	3.2	4.1	0.8	10.6	"	
400	"	24	"	"	III'	3.0	3.9	0.8	8.1	"	

埠図 番号	発掘区	石器 番号	名 称	分 類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
401	C-2-a	18	スクレイバー	III B 2	I	2.9	3.6	0.8	7.5	Obs.	
402	F-7-c	39	"	"	II	2.5	2.7	0.8	6.9	"	
403	G-6-a	11	"	"	III	3.2	3.8	1.1	12.3	"	
404	F-7-d	15	"	"	II	3.3	3.6	0.9	11.4	"	
405	G-3-a	20	"	"	I'	.3 3	4.8	1.1	17.2	"	
406	G-5-c	18	"	"	I	2.2	2.7	1.0	5.7	"	
407	D-3-c	16	"	III B3a	"	.3 3	2.4	0.7	5.1	"	
408	C-2-b	8	"	"	III	3.8	2.8	0.7	7.2	"	
409	D-3-a	1	"	"	I	4.0	2.9	1.0	12.7	"	
410	F-4-d	3	"	"	III	4.2	2.8	0.8	9.2	"	
411	F-7-d	15	"	"	II	3.6	2.0	0.8	5.8	"	
412	C-5-d	5	"	"	"	4.6	2.0	0.7	6.8	"	
413	F-7-b	2	"	"	III'	4.3	2.2	0.8	7.2	"	
414	E-7-d	6	"	"	"	3.3	2.2	0.5	5.3	"	
415	G-6-c	4	"	"	II	4.1	1.9	0.6	5.5	"	
416	F-6-c	65	"	"	III'	4.4	2.2	1.0	9.0	"	
417	G-5-b	12	"	"	II	4.8	2.3	0.7	8.2	"	
418	E-4-a	33	"	"	"	4.7	2.5	0.6	7.4	"	
419	E-7-d	6	"	"	III'	4.7	2.6	1.2	13.6	"	
420	D-3-a	1	"	"	I	4.8	2.2	0.6	7.7	"	
421	E-7-d	6	"	"	III'	4.2	2.4	0.9	8.6	"	
422	D-3-c	13	"	"	II	4.2	2.0	0.6	6.1	"	
423	"	"	"	III B3b	"	3.2	1.6	0.8	4.2	"	
424	G-6-d	7	"	"	III	4.8	2.8	0.8	12.0	"	
425	D-3-c	13	"	"	II	4.1	1.8	0.8	6.1	"	
426	"	26	"	"	I	4.1	1.7	0.6	4.0	"	
427	E-4-a	24	"	"	III	3.6	1.9	0.7	4.6	"	
428	F-7-b	2	"	III B3c	III'	3.6	1.4	0.8	4.2	"	
429	D-3-d	6	"	"	II	3.5	1.8	0.7	4.9	"	
430	D-3-d	2	"	"	I	3.9	1.6	0.9	5.3	"	
431	B-5-d	6	"	"	II	3.9	1.5	0.8	4.0	"	
432	C-5-b	10	"	III B3b	"	6.4	2.1	1.1	12.1	"	
433	D-4-c	16	"	III B3c	III	5.3	2.0	1.0	9.6	"	
434	C-5-c	12	"	"	II	5.8	1.7	0.8	8.1	"	
435	E-3-c	21	"	III B3d	I	4.4	1.3	0.4	2.9	"	
436	G-6-c	4	"	"	II	3.7	2.1	0.7	4.9	"	
437	B-5-d	19	"	"	"	4.2	2.6	0.8	9.2	"	
438	D-5-c	5	"	"	I	4.6	2.2	0.9	8.3	"	
439	G-5-b	12	"	"	II	3.3	2.1	0.5	3.2	"	
440	F-7-d	24	"	"	III'	3.1	1.7	0.8	3.9	"	
441	E-4-a	"	"	"	III	3.2	1.7	0.7	3.8	"	
442	F-6-c	68	"	"	III'	5.3	2.8	0.8	15.7	"	
443	G-3-a	20	"	"	I'	3.9	3.9	1.1	14.4	"	
444	E-5-c	3	"	"	I	3.4	2.5	0.8	5.7	"	
445	F-3-d	31	"	"	I'	4.7	1.7	0.9	6.9	"	
446	D-5-b	8	"	"	II	5.0	2.2	1.1	9.3	"	
447	F-3-d	31	"	"	I'	5.2	3.1	0.9	15.6	"	
448	B-5-d	6	"	III B3e	II	3.1	2.3	1.1	6.7	"	
449	E-4-a	33	"	"	"	3.3	1.5	0.8	4.0	"	
450	F-7-a	13	"	"	I	4.1	(2.6)	0.5	(6.2)	"	刃部破損

捲番号	発掘区	石器番号	名 称	分類	層位	規 格			重量(g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
451	D-4-d	68	スクレイパー	III B3e	II	5.0	2.2	0.8	9.3	Obs.	
452	E-4-a	26	"	"	I	4.2	2.0	0.7	6.8	"	
453	F-6-d	2	"	III B4a	"	2.5	2.3	0.7	3.1	"	
454	F-7-d	15	"	"	II	1.8	2.8	0.9	4.3	"	
455	E-7-d	6	"	"	III	2.4	2.7	0.8	4.7	"	
456	C-5-d	5	"	"	II	3.0	2.8	1.1	7.0	"	
457	F-5-d	18	"	III B4b	III	2.6	3.4	0.7	7.0	"	
458	E-7-d	6	"	III B4a	III	2.6	3.7	0.7	5.9	"	
459	G-3-d	5	"	III B4b	I	3.1	5.7	1.5	27.2	"	
460	D-3-c	13	"	III B4a	II	3.8	5.8	1.5	20.0	"	
461	F-7-c	58	"	"	I	3.4	2.7	1.0	8.6	"	
462	G-5-a	1	"	"	II	3.0	2.7	0.8	5.8	"	
463	F-7-d	15	"	"	II	4.2	2.7	0.9	8.8	"	
464	F-7-c	58	"	III B 5	I	2.6	1.4	0.8	2.7	"	
465	E-4-a	24	"	"	III	3.6	2.3	1.0	7.3	"	
466	G-5-c	18	"	"	I	4.0	2.0	0.7	4.9	"	
467	E-3-d	5	"	"	II	4.5	4.0	1.5	23.0	"	
468	D-3-a	39	石 斧	IV A 3	I	(6.4)	3.2	1.2	(40.9)	Gr-Mud.	
469	H-5-b	3	"	"	"	6.3	3.1	1.1	32.9	"	
470	F-5-c	7	"	"	III	7.3	4.3	1.7	80.0	"	
471	G-7-a	"	"	"	II	8.9	5.0	2.1	131.7	"	
472	D-5-d	5	"	IV A 1	III	10.3	4.0	1.2	101.6	"	
473	G-7-a	21	"	IV A 3	II	8.0	3.8	1.2	64.0	"	
474	G-7-b	28	"	IV A 2	"	10.0	5.7	1.9	167.4	"	
475	F-7-c	43	"	"	"	(8.2)	(6.2)	2.3	(122.3)	"	
476	D-3-c	34	"	IV A 3	"	9.6	4.7	1.4	85.6	Bl-Mud.	
477	F-2-d	1	"	"	I	10.1	3.9	1.4	80.7	Gr-Mud.	
478	C-5-b	6	"	"	II	(4.2)	3.8	1.0	(22.2)	"	
479	E-3-a	1	"	"	I	(4.9)	3.9	1.3	(40.0)	"	
480	F-2-c	4	"	"	I	(5.0)	4.7	1.0	(41.5)	"	
481	D-4-d	9	"	"	II	(6.0)	4.8	1.6	(67.3)	"	
482	F-2-c	7	"	"	III	(5.0)	(4.9)	2.2	(66.8)	"	
483	F-7-c	43	"	"	II	(6.3)	(4.4)	1.9	(67.0)	"	
484	E-3-a	1	"	"	I	(3.8)	2.7	0.9	(20.0)	"	
485	H-5-d	2	"	"	"	(11.0)	5.8	2.6	(250.0)	"	
486	G-7-a	67	"	"	II	(6.7)	6.8	2.0	(156.2)	"	
487	G-3-b	21	"	"	I	(6.9)	6.2	2.4	(176.6)	"	
488	F-4-c	9	"	"	III	(8.0)	6.5	2.1	(215.0)	"	
489	F-5-d	20	"	"	"	(9.7)	(5.4)	2.3	(187.3)	"	
490	D-3-a	13	"	"	"	(8.6)	(6.2)	2.4	(220.0)	"	
491	D-4-d	9	"	"	II	(7.6)	(6.4)	2.2	(138.4)	"	
492	E-5-b	"	"	"	"	(12.7)	(6.1)	2.9	(295.0)	"	
493	E-7-d	23	"	"	I	(7.2)	6.4	2.7	(213.0)	"	
494	G-7-d	7	たたき石	V A 3	I	13.1	6.0	4.0	410.0	Sa.	C-3-d・14と接合
495	B-5-d	16	"	"	II	(7.7)	6.6	3.9	(230.0)	"	
496	E-5-b	4	"	V A 1	II	19.0	6.4	6.2	106.0	Gne.	
497	D-4-c	28	台 石	VB	"	11.3	8.0	6.4	680.0	Sa.	
498	F-4-b	6	すり石	VI A 1	I	6.8	13.5	6.3	1070.0	Gne.	
499	D-3-c	4	"	"	"	6.5	(15.4)	6.9	(1170.0)	"	
500	D-3-a	11	"	"	II	6.9	14.9	6.1	850.0	Grano.	

地図 番号	発掘区	石器 番号	名 称	分 類	層位	規 格			重 量 (g)	石 質	備 考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
501	D-5-d	1	すり台	VIA 1	III	8.0	17.7	6.1	1245.0	Grano.	
502	D-3-b	11	"	VIA 2	I	9.2	15.8	4.6	1040.0	Gne.	
503	E-4-a	37	"	"	III	9.6	16.4	5.5	1480.0	Grano.	
504	D-4-d	65	"	VIA 1	B	9.4	19.5	5.4	1440.0	Sa.	
505	E-5-d	4	"	"	I	12.3	19.6	5.9	1680.0	"	
506	D-3-c	"	"	"	"	8.8	15.7	6.3	1355.0	"	
507	E-3-b	32	"	VIA 2	"	7.0	15.4	2.4	425.0	"	
508	E-3-c	5	"	VIA 1	"	6.9	(14.7)	5.8	(709.0)	"	
509	F-2-a	6	"	"	I'	7.6	15.1	5.1	725.0	"	
510	E-4-a	29	"	"	II	7.3	13.3	6.0	922.0	Gne.	
511	G-2-c	11	"	"	I	9.0	17.3	6.4	1310.0	Sa.	
512	E-4-d	12	"	"	II	9.6	(14.3)	6.5	(978.0)	"	
513	E-4-a	11	"	"	III	8.5	(8.6)	5.2	(510.0)	"	
514	"	"	"	VIA 2	"	11.0	(8.6)	5.3	(580.0)	"	
515	F-2-d	9	"	"	II	13.7	10.4	1.4	250.0	"	
516	F-5-d	7	"	VIA 1	III	7.0	11.7	5.6	610.0	Grano.	
517	"	9	"	"	"	8.2	15.0	6.4	1300.0	Gne.	
518	E-4-a	29	"	"	II	8.5	15.0	6.6	1365.0	"	
519	F-4-a	5	"	VIA 2	I	9.5	14.7	5.2	940.0	Sa.	
520	"	"	"	VIA 1	"	10.1	18.0	7.4	1340.0	"	
521	F-2-d	6	"	"	II	11.1	18.0	5.7	1220.0	"	
522	F-3-d	18	"	"	I'	11.2	16.8	7.1	1730.0	"	
523	F-7-c	20	石皿	VIB 1	II	20.5	13.0	7.4	2700.0	"	
524	B-5-d	8	"	"	"	31.0	11.0	13.8	7500.0	"	
525	D-5-c	4	"	"	I	18.0	17.0	7.7	3900.0	"	
526	F-2-b	3	"	"	"	17.0	26.0	6.0	4000.0	"	
527	C-1-c	1	"	"	II	21.5	22.5	6.6	5500.0	"	
528	C-3-d	15	"	"	I	25.5	22.5	7.9	6000.0	"	
529	F-3-d	7	"	VIB	I	26.5	25.5	7.9	6300.0	"	
530	D-3-c	48	"	"	B	35.5	23.0	8.0	6500.0	"	
531	D-4-c	12	砥石	VIB 2	II	11.9	13.5	8.0	2100.0	"	
532	C-5-c	4	"	"	I	17.5	14.0	7.0	2000.0	"	
533	E-4-c	5	"	"	"	39.0	18.5	8.8	8700.0	"	
534	F-5-c	1	"	"	"	15.0	8.8	8.1	1060.0	"	
535	F-5-d	16	"	"	III	21.7	12.1	9.5	2500.0	"	
536	G-7-b	19	"	"	II	36.5	14.4	10.5	7800.0	"	

IV. まとめ

1. 遺構

本調査によって検出された遺構は、II章に説明したように、土壙が5基のみであり、最近のものとしては、旧軍隊による塹壕が挙げられる程度であった。塹壕については、既に概述したことのであり、ここでは先史時代の所産たる土壙について、若干まとめておきたい。なお、P 1～5 の構築年代については、以下のような層位的な観察に基づいて判断した。すなわち、P-1～3 は、II群a-2類土器片などを多量に包含する第III層を調査する過程で、その存在が確認されており、第III層中のどこかに掘り込み面があったものと推定されたこと。また、P-4、5 の確認面は第IV層の上面だが、掘り込み面は、その直上のさほど隔たりのないレベルにあったと思われたこと。これらのことから、土壙の掘り込み面は、第III層中に求められる可能性が大きく、第III層中に見出された遺物の年代から、土壙の構築年代もまた、縄文時代前期前半の頃と判断した。

さて、検出された土壙は、形態的にみて、細長い平面形を有するもの(P-1～3、5)と、不整円形プランのもの(P-4)とに大別される。

前者は、長軸の長さが短軸のほぼ3～4倍にもなる、細長い形態のもので、壁は垂直に近く、底は平坦な、比較的浅めの土壙である。長軸方向はほぼ東～西で、地形的にみれば、海～山の方向ともいえる。P-1 に見出された礫以外には伴出遺物はなく、ベンガラなどの散布も認められなかった。縄文時代前期前半におけるこのような土壙の類例は少なく、強いて形態や規模の近い例を求めるば、江別市吉井の沢1遺跡P-12(北埋文 1982)などが該当するといえようか。さらに、規模はずっと大きいが、苫小牧市美沢5遺跡P-11(北埋文 1980)なども形態的には似たものとして挙げられよう。

次に、円形ないしは楕円形プランのものについてみると、P-4ほど壙底部の規模が縮少する土壙は、縄文時代前期前半では、今のところ他に類例はないようである。これより規模が大きくなれば、円形ないしは楕円形プランの土壙、土壙墓の報告例も増加する。例えば、吉井の沢1遺跡P-11、13、260(北埋文 1982)などや千歳市ウサクマイ遺跡L地点T.P.53、55、64に見出されたピット(大島ほか 1978)などがあり、旭川市緑町遺跡(斎藤 1965)や同近文遺跡での例(斎藤 1968)も加えられよう。これらの大部分は、土器や石器類などが副葬されたり、壙底面にベンガラが検出されるなどして、墓壙として認定されている。さらに、苫小牧市美沢1遺跡P-68(北埋文 1981)、千歳市美々5遺跡MP-49(北埋文 1981)、苫小牧市美沢4遺跡P-12、17(北埋文 1980)なども、同様に副葬品やベンガラの存在によって墓と考えられている。一方、墓とは断定できない土壙には、美々5遺跡LP-4(北埋文 1981)、美沢5遺跡P-15(北埋文 1980)、美沢4遺跡P-18、21、22、24(北埋文 1980)などがある。

また、静内町トビノ遺跡の最下層に炭化クルミの層が見出されたピット（静内高校文化人類学部 1968）などは、やや特異な例といえよう。

いずれにせよ、これらの土壙、土壙墓と比較しても、P-4 の構築意図は不明といわざるを得ず、P-1～3、5 もまた同列である。構築意図の不明な、比較的単純な掘り込みの土壙が 5 基検出されたのみで、遺物量に比して遺構が少なく、殊に住居跡が見出されなかつた点は、本遺跡の性格を考える上で看過できない要素である。こうした様相は、例えば、美沢 5 遺跡（北埋文 1980）にも指摘できそうだが、このような遺跡の在り方が、具体的にどのような実態に基づくものなのか、その解明は今後の課題としたい。

2. 土 器

今回の発掘調査では、縄文時代早期、前期、晩期と続縄文時代、擦文時代の土器が得られた。ここでは、そのうち、最も多くの資料の得られた、II群 a-2 類土器を概括し、その編年的位置について、述べることにする。

1) 栄丘出土のII群 a-2 類土器の概要

器形：水平口縁で、丸底を呈する鉢型土器である。円錐形をなす底部もあるが、その多くは丸底である。また、完形土器が得られておらず、口径と器高との比率は、明らかではない。

口唇の断面では、平坦面をもち角状を呈するものと、丸味を帯びた山形を呈するものがある。平坦面をもつ土器は、縄文が整然と施され、内面も滑らかに調整される傾向がある。この傾向は、特に、平坦面が広く、滑らかにされている土器に強くあらわれる。口唇の断面が山形を呈する土器では、口唇から胴部にかけて、器体の厚味を増す度合いが大きく、口縁が内反する傾向がある。また、その破片の曲率からは、平坦面をもつ土器よりも、小形の土器になると思われる。

文様：肥厚帯をもつ土器が、数点あるほかは、縄文のみが施される。縄文は、表側のほぼ全面に施されたと思われるが、剥落や摩耗によって、失われている部位もある。縄文の原体には、LR、RL、R、L 原体があり、縄文では、斜行するもの、横走するもの、羽状を呈するものがある。その大半は、LR 原体による斜行縄文である。内面にも縄文の施された土器が数例ある。また、文様とは違うものだが、縄文圧痕を残した剥落片もある（図 10-8・9、図版 14-4）。

内面調整：滑らかに調整されている土器が多い。この中には、つぶし（後藤 1980）を行ったと思われる土器もある。また、浅い、沈線様の搔き跡の認められる土器があるが、部分的な調整、あるいは、偶然に製作途中でつけられた跡かもしれない。

胎土：纖維の混入とともに、小礫の混入も多い。纖維は、横位に混入される事が多く（図版 14-1・2）、撚糸の混入例は、確認されなかった。

製作：土器片のわれ口からは、輪積みにより製作されたと考えられる。纖維の混入は、その混入状態に規則性が窺われ、積みあげの時点で混入されたと思われる。図 13-79 のような、いびつな破片は、積みあげが口縁を下にして行われ、それを起こす際にゆがんだとも思われる。

また、口唇の粘土のはみだしも、口を伏せての製作に起因するものかもしれない。この場合、口唇の平坦面は、滑らかに調整されているものを除いて、土器製作の過程で、自然に生じることも考えられる。

2) いわゆる中野式土器について

本遺跡のII群a-2類土器は、いわゆる中野式土器に相当する。中野式土器は、静内町中野遺跡の出土資料から「静内中野式尖底土器」(河野・藤原・藤本 1959)として、型式設定された。その後、資料の増加に伴い、中野式土器の中にも、いくつかのバリエーションのあることが判明し、それらが時間差をもって、捉えられる可能性のあることも指摘されている(高橋 1972)。しかし、その前後関係を明らかにする材料に乏しいまま、中野式土器群、中野式系土器などとして、理解されてきた。本遺跡のII群a-2類土器は、この広義に解釈されている土器群を指している。これらの中野式土器の分布、報告事例などは、竹田輝雄氏によって、まとめられている(竹田 1976)。

3) 栄丘出土のII群a-2類土器

II群a-2類土器のふくまれる、縄文尖底土器群の編年については、大沼忠春氏、加藤邦雄氏による論考がある(大沼 1981、加藤 1982)。これらによれば、縄文尖底土器群の中では、縄文のほかに、綱文、組紐回転文、刺突文などをもつグループが古く、文様の、ほぼ縄文に限られるグループが、新らしく位置づけられている。II群a-2類土器、いわゆる中野式土器は、後者のグループである。

さらに、中野式土器の中では、乳房状尖底を呈する加茂川遺跡(岩崎・宇田川・本田・河野 1966)の資料が、その石器の組み合せから新しいと考えられている(高橋 1972)。この乳房状尖底は、北黄金遺跡(名取・峰山 1954)の調査結果からも、新しいと考えられる。こうした乳房状尖底を呈する資料は、若生貝塚(名取・峰山 1957)、発寒小学校裏遺跡(岩崎・三室 1966)などで出土しており、いずれもその文様には、羽状縄文が認められない。この事から、その遺跡での出土数にもよるが、羽状縄文の認められない土器のグループも新らしいと考えられる。

羽状縄文の施される段階の中野式土器は、本遺跡のほかに、ショップ遺跡(藤本 1962)、トビノ遺跡(静内高校 1978)、美沢4・5遺跡(北埋文 1980)、冷水遺跡(富永 1981)などで出土している。これらの土器が、先の乳房状尖底を呈する土器、羽状縄文の認められない土器グループより、古く位置づけられるものと思われる。これらの事から、本遺跡のII群a-2類土器も、中野式土器の中では、羽状縄文の施される段階に位置づけたい。

ただ、編年的に、注目される資料がある。図10-10のように、条の傾きから、綱文に近い段階と考えられる土器が存在する。この土器は、口唇の平坦面が滑らかに調整され、綱文系土器の特徴とされる口唇上端の平坦な作出(大島 1978)を行っている。図14-107~109も、綱文に特徴的な横走縄文の土器であるが、胴部破片であり、確実さに欠ける。こうした古い要素を窺える資料のある反面、斜行縄文が圧倒的に多いことから、全体的には、羽状縄文の認められないグループに近い可能性もある。また、羽状縄文の施される段階で例示した遺跡の中では、

本遺跡のみに、撫糸の混入が認められない。撫糸の混入例は、本田栄作氏によれば、石狩低湿地帯を中心に、北海道を縦走するような形で、出土例が報告されている(松下ほか 1967)。中野式土器の中でも、その盛行する地域が限定される可能性もあるが、時間差を有するものであれば、本遺跡のII群a-2類土器の位置づけも再考を要する。

3. 石 器

(1) 剣片石器

これまでの記載で繰り返し述べてきたとおり、本遺跡はII群a-2類の土器を主体とするもので、石器群もこれと共に伴する。ここでは、その剣片石器について、特徴・問題などを考察してみたいと思う。

石鎌：321点出土しており、石質は全例、黒曜石である。その形態と出現率は、図46で示すとおり、IA3bが多く、約68%を占める。また、IA3aを含めると約84%と圧倒的な数値である。これらの三角形鎌は、さらに正三角形と二等辺三角形、側縁が張り出すものとそうでないものなど、細分が可能であるが、全体的にはどれも粗雑な二次加工が施され、素材面を残した例が少なくない。規格は、長さ1.0~2.9cm、幅1.0~1.6cm、重量0.2~1.7gであるが、標準的なタイプは、長さ2.0cm前後、幅1.2cm前後、重量0.6g前後の扁平なものといえる。

石槍：32点出土したうち、完形のものは1点のみである。したがって、形態的に不明瞭なものもあり、石銛・ナイフ状石器などが含まれている可能性もある。石質は、すべて黒曜石であった。

石錐：剣片石器全体の20%という出現率であった。形態は、先述したとおり5つのタイプに大別される一般的なタイプは、図47で

示されるとおり、IIA3bが半数近くを占めている。

IIA1は、17%近い出現率で、長さ1.1~4.2cmのものまである。また、横断面が扁平に近いものは、素材面を残す例が多い。

IIA2は、横形2点と縦形21点が出土した。これらの中には、つまみ付きナイフ同様の刃部を有した例もみられる。また、剥離順序もつまみ付きナイフ同様に、つまみ頭部から側縁にかけて、加工される例が多い。しかし、刺突部は逆に、先端部から側縁部にかけて加工され、さらに、つまみ部から

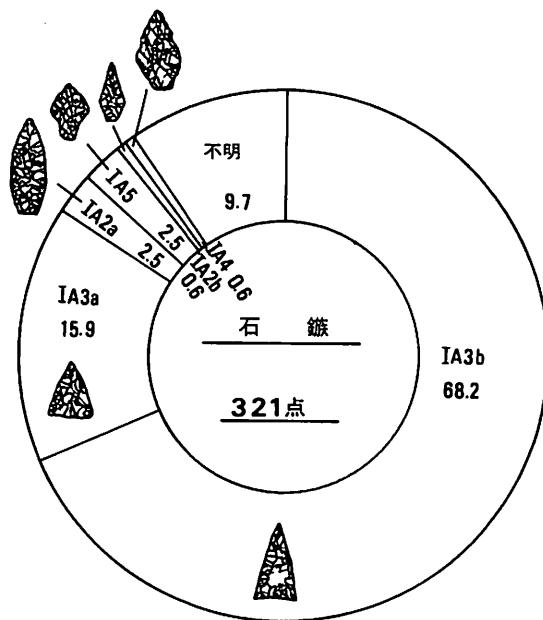


図46 形態別出現率(%)

の剥離面を切っている。したがって、これら II A 2 の中には、一次的な目的で製作されたものほかに、二次的な理由で製作されたものも含まれている可能性が、多分にあると思われる。ただし、同様の形態を有した出土例は、本遺跡のほか、美々 5・7 遺跡（道教委 1979）、美沢 4・5 遺跡（北埋文 1980）、美々 4・6 遺跡（北埋文 1980）の報告例を見るだけで、比較検討するには資料が少なく、現在のところ確定的ではない。

II A 4 は、II A 2 と同様に出現率が低く、3.4%である。このタイプの出土例は、美々 4 遺跡（北埋文 1980）、美沢 5 遺跡（北埋文 1980）でも見られ、恐らく II 群 a - 2 類の土器に伴うものであろう。

以上のほか、II A 5 は、ほかの遺跡からの出土例がなく、これについて、今後の資料の増加を待って、細かな特徴をとらえてみたい。

つまみ付きナイフ：
黒曜石製のもの 296
点、硬質貞岩製のもの

3 点、瑪瑙質製のもの 1 点が出土した。形態別出現率は、図 48 に示されるとおり、III A 3 b が約 75% を占める。III A 3 a を含めると 85% 近くなり、全体的に粗雑な製作をしたものが多いと

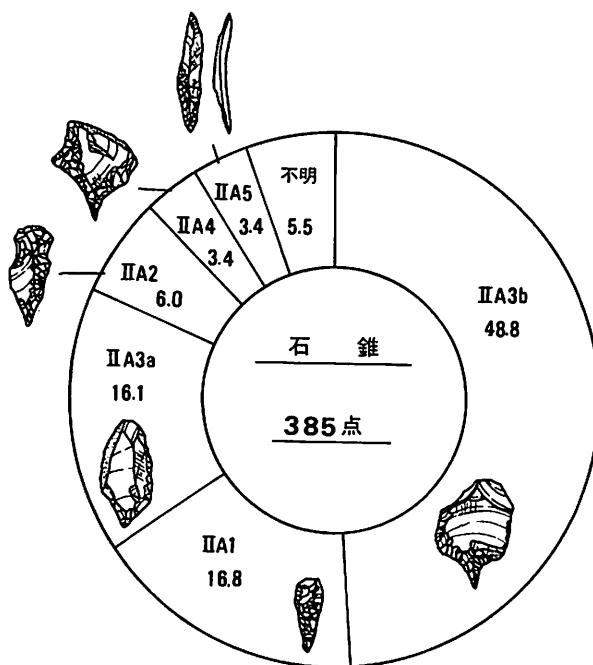


図 47 形態別出現率 (%)

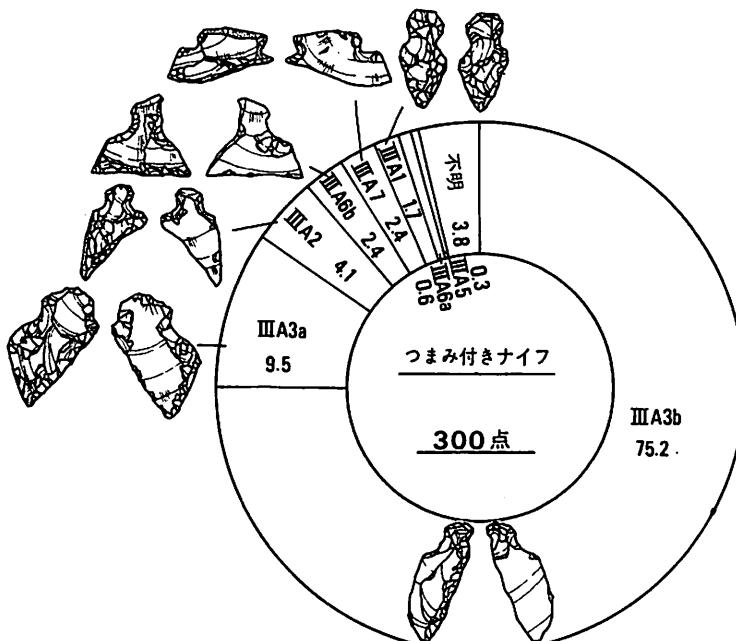


図 48 形態別出現率 (%)

いえよう。硬質頁岩製のナイフは、3点のうち2点が縦長の大型なもので、全長9.0cm程である。しかし、黒曜石製のものは、全長6.0cmを越えるものが少なく、ほとんどのものは、3~5cmに集中する。また、つまみ付きナイフ・スクレイパーには、原石面を有した例が多く、小円盤の外側の剥片を利用したものが多いといえる。

以上、これまで述べてきたとおり、本遺跡の剥片石器は、99.8%が黒曜石製のものであった。また、それらは全体的に、小型のものばかりで、粗雑な製作が多い。恐らく、原石そのものが小円盤であったため、剥片石器に原石面を残したり、石核が検出されなかつたのだろうと推察される。このことから、つまみ付きナイフ・スクレイパーの類は、小円盤の外側の剥片が素材とされ、小さくなつた残核からは石鎚・石錐などが製作されたと推定される。

(2) 磔石器

本遺跡からは、剥片石器、礫石器合わせて2234点出土している。そのうち礫石器は323点であり、石器全体の14.5%の出現率である。礫石器の中での各器種別の割合は、図49のとおりである。すり石と石皿で全体の約70%を占めている。また、中野式土器に一般に伴うとされる石錐が1点も出土していないことが注意される。これら本遺跡における特徴的なことがらについて以下順次触れる。

すり石は、破片も含めて126点出土した。このうち完形品は27点である。すり石は、分類基準に示したとおり、断面三角形の礫の稜をすつたもの(VIA 1)と扁平礫の一側縁をすつたもの(VIA 2)に分けられる。完形品の中でのそれぞれの比率は、VIA 1が17点(63%) VIA 2が10点(37%)である。出土したすり石3点のうち2点は断面三角形のすり石ということになる。重量では、250~1730gの範囲にあり、平均は1076gである。また、すり面の長さと幅をみると、長さは7.2~17.4cm、幅は0.7~3.7cmであり、平均は長さ12.1cm、幅2.2cmである。この平均数値に近いものとしては重量は少し軽いが図39~500が相当する。

石錐は、初めにも述べたように1点も出土していない。栄丘遺跡に時期的に近いと思われる遺跡に美沢4、5遺跡がある。この両遺跡は一つの谷を挟んだそれぞれの舌状台地にあり、両遺跡の間隔は約200mである。報告書(北埋文 1980)では、両遺跡の石器組成の相違に注意している。そのことは、両遺跡の石錐の数を比べても明らかである。すなわち、美沢4遺跡は914点、美沢5遺跡は僅か8点である。このことは、いわゆる中野式土器グループにも石錐はあるが、石錐の出土が稀な遺跡も少ないわけではないことを示している。その理由は、時間的な差によるものなのか、それとも生業形態の差によるものなのか、ここでは結論は出せない。しかし、美沢5遺跡の例は、本遺跡の特徴を考える上で重要なヒントになるのではないだろうか。この問題は大変興味のあることであり、今後解明するように努力したい。

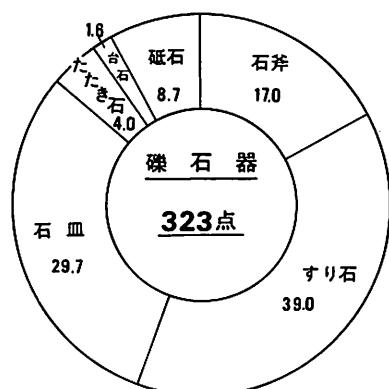


図49 磕石器の器種別構成比率(%)

引用・参考文献

- 岩崎隆人・宇田川 洋ほか 1966 加茂川遺跡
- 岩崎隆人・三室俊昭 1966 札幌市発寒小学校裏遺跡 北海道の文化 10
- 浦河町史編纂委員会編 1971 浦河町史
- 大島直行・大谷敏三ほか 1978 苗別川流域における考古学的調査
- 大沼忠春 1981 道央部の縄文前期土器群の編年について 北海道考古学 17
- 大湯卓二・市川金丸ほか 1980 長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書
- 加藤邦雄 1982 縄文尖底土器 縄文文化の研究 3
- 栗村知弘・坂川 進ほか 1982 長七谷地遺跡発掘調査報告書
- 黒崎康雄・中田幹雄・橋本 晋 1969 浦河町の遺跡
- 黒崎康雄・橋本 晋・中田幹雄・高橋正勝 1972 西舎遺跡
- 河野広道・藤原敏郎・藤本英夫 1954 静内町先史時代遺跡調査報告
- 河野広道・藤本英夫 1963 先史時代 静内町史
- 河野広道・佐藤忠雄・山崎博信 1963 日進
- 児玉作左衛門・大場利夫 1954 函館市春日町出土の遺物について 北方文化研究報告 9
- 児玉作左衛門・大場利夫 1955 網走市大曲洞窟出土の遺物について 北方文化研究報告 10
- 児玉作左衛門・大場利夫 1956 根室国温根沼遺跡の発掘について 北方文化研究報告 11
- 後藤和民 1980 縄文土器をつくる
- 駒井和愛編 1963 オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上巻
- 熊谷常正 1983 岩手県における縄文時代前期土器群の成立 岩手県立博物館研究報告 1
- 小柳正夫・因幡勝雄 1971 福原遺跡
- 斉藤武一 1965 北海道旭川市緑町遺跡 日本考古学年報 13
- 斉藤武一 1968 北海道旭川市近文遺跡 日本考古学年報 16
- 佐藤一夫・大谷敏三ほか 1976 美々貝塚
- 佐藤一夫編 1976 植苗貝塚
- 佐藤達夫 1971 擦文土器の変遷について 常呂
- 沢 四郎 1962 北海道浜中村霧多布出土の押型文土器 上代文化 31・32
- 重松和男 1972 北海道の古墳墓について (2) 北方文化研究 6
- 静内高校文化人類学研究部 1968 トビノ遺跡緊急発掘報告 せいゆう 11
- 鈴木賢二・畠山 昇ほか 1981 表館遺跡
- 高橋正勝 1971 北海道における擦石・石冠について 北海道の文化 22
- 高橋正勝・畠 宏明 1976 浦河町栄丘遺跡出土の遺物 北海道考古学 12
- 竹田輝雄・大島和雄 1970 石狩高岡遺跡の遺物について 工業技術院地質調査所北海道支所
調査研究報告会講演要旨録 21

- 竹田輝雄 1976 中野式土器 北海道考古学 12
- 富水慶一 1981 冷水遺跡発掘調査報告書
- 藤本英夫 1958 静内町田原遺跡について せいゆう 4
- 藤本英夫 1962 三石町ショップ遺跡（予報）
- 北海道教育委員会編 1978 美沢川流域の遺跡群II
- 北海道教育委員会編 1979 美沢川流域の遺跡群III
- （財）北海道埋蔵文化財センター編 1980 フレペツ遺跡群
- （財）北海道埋蔵文化財センター編 1981 美沢川流域の遺跡群IV
- （財）北海道埋蔵文化財センター編 1982 吉井の沢の遺跡
- 北海道立地下資源調査所編 1980 北海道の地質 60万分の1 北海道地質図
- 中村 斎・君 尹彦 1970 江別市大麻第V遺跡発掘調査報告
- 名取武光・峰山 巍 1954 伊達町北黄金遺跡発掘報告
- 名取武光・峰山 巍 1957 若生貝塚発掘報告 北方文化研究報告 12
- 松下 宜・近堂祐弘・本田栄作ほか 1967 美々貝塚 千歳遺跡
- 山崎博信・氏江敏文・佐藤幸夫・鈴木 力 1975 上士別遺跡
- 山内清男 1979 日本先史土器の縄紋
- 山道紀郎・成田滋彦ほか 1981 鷹架遺跡発掘調査報告書
- 八幡一郎編 1966 トーサムポロ遺跡 北海道根室の先史遺跡



調査前全景 (SW → NE)

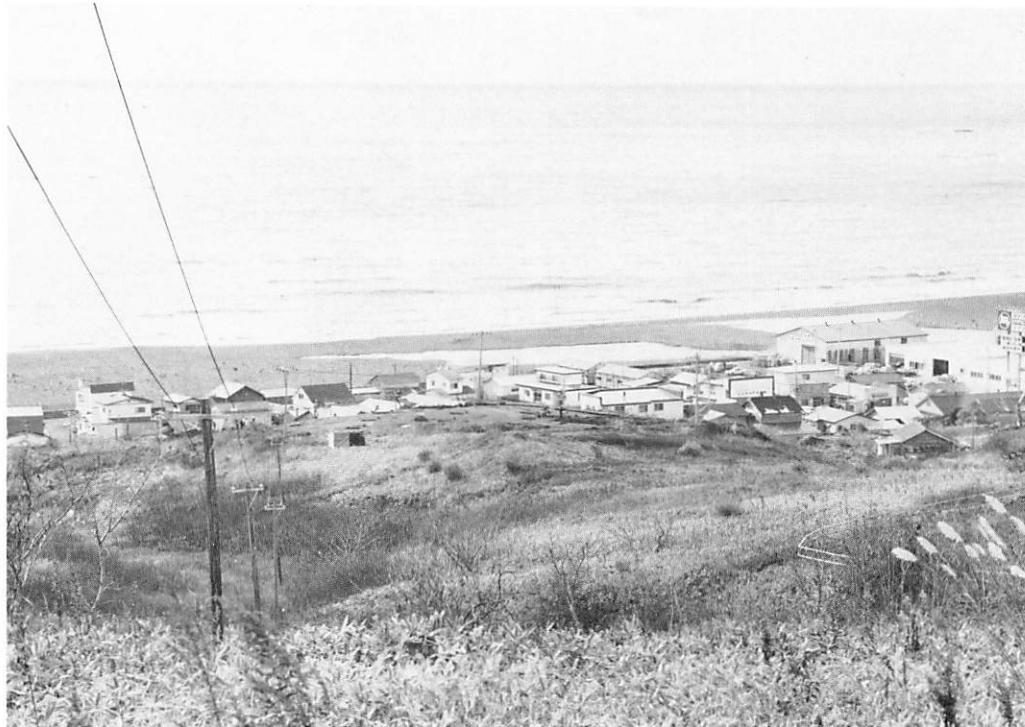
1



調査前状況 (NE → SW)

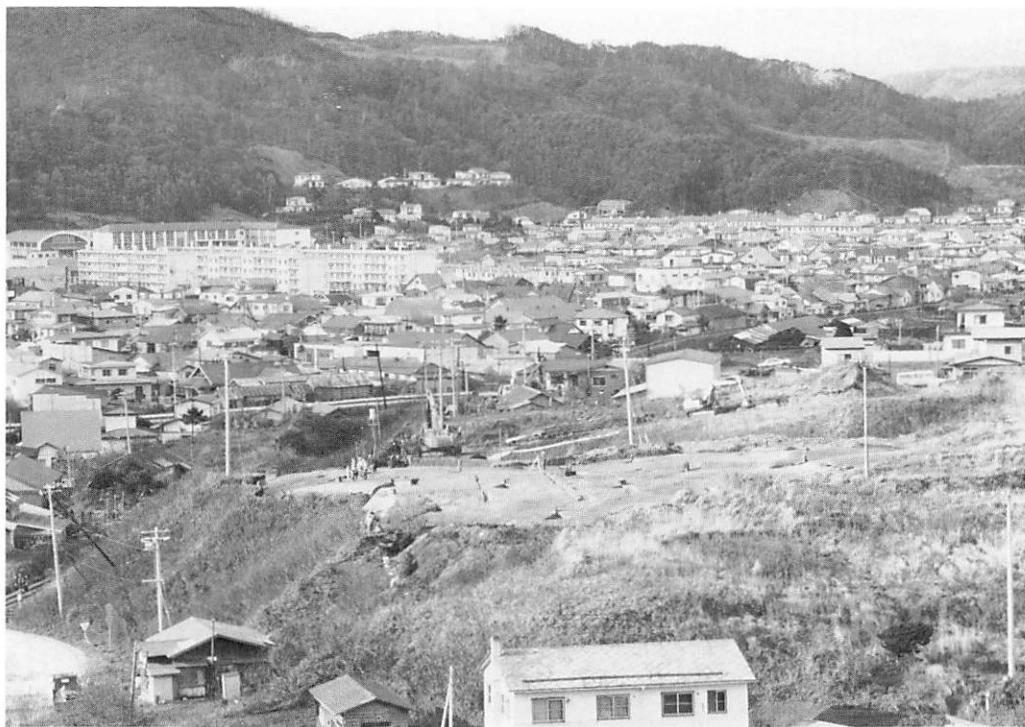
2

図版 2



調査後全景 (SW → NE)

1



調査後全景 (S → N)

2

図版 3



作業風景 (SW → NE)

1



調査進行状況 (NE → SW)

2

図版 4



P - 1 (E → W)



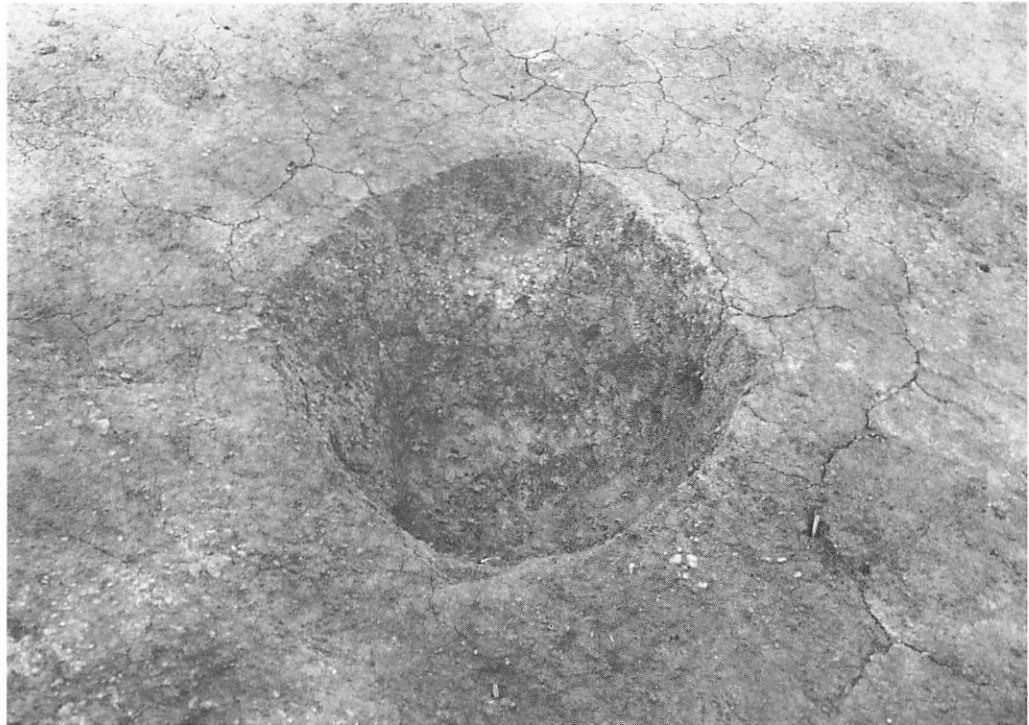
P - 2 セクション (E → W)

2

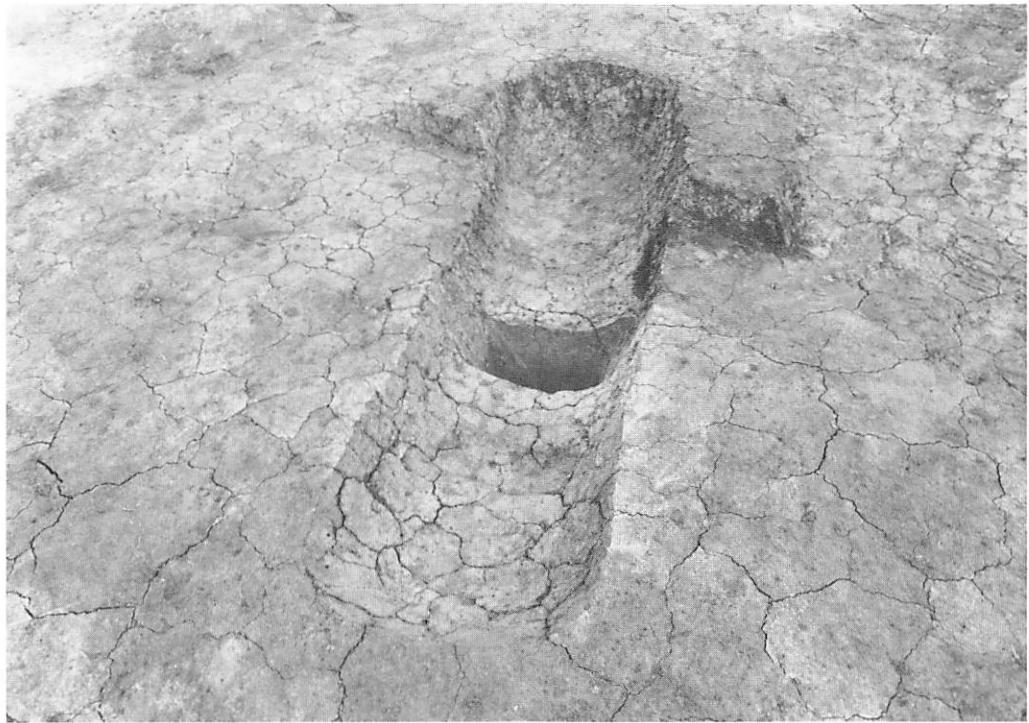


P - 2 , 3 (NE → SW)

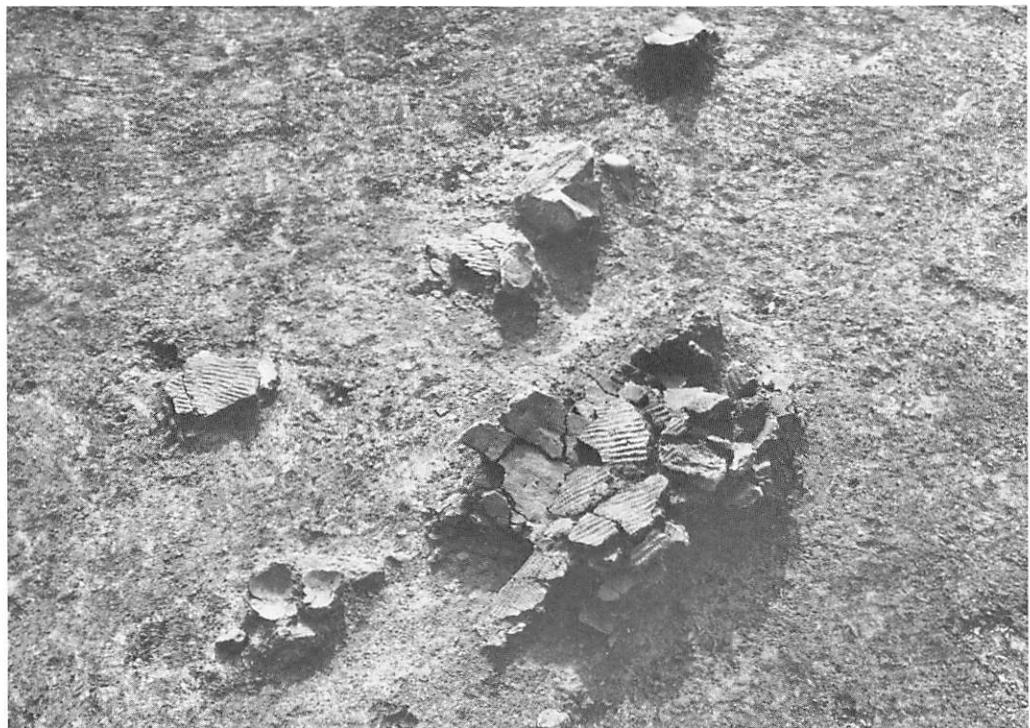
3



P - 4 (NW → SE) 1



P - 5 (W → E) 2



D-4-d 土器出土状況 (NW → SE)

1



E-7-d 土器出土状況 (SE → NW)

2



F - 6 - C 土器出土状況 (S → N) 1



G - 7 - a + b 石器出土状況 (SE → NW) 2



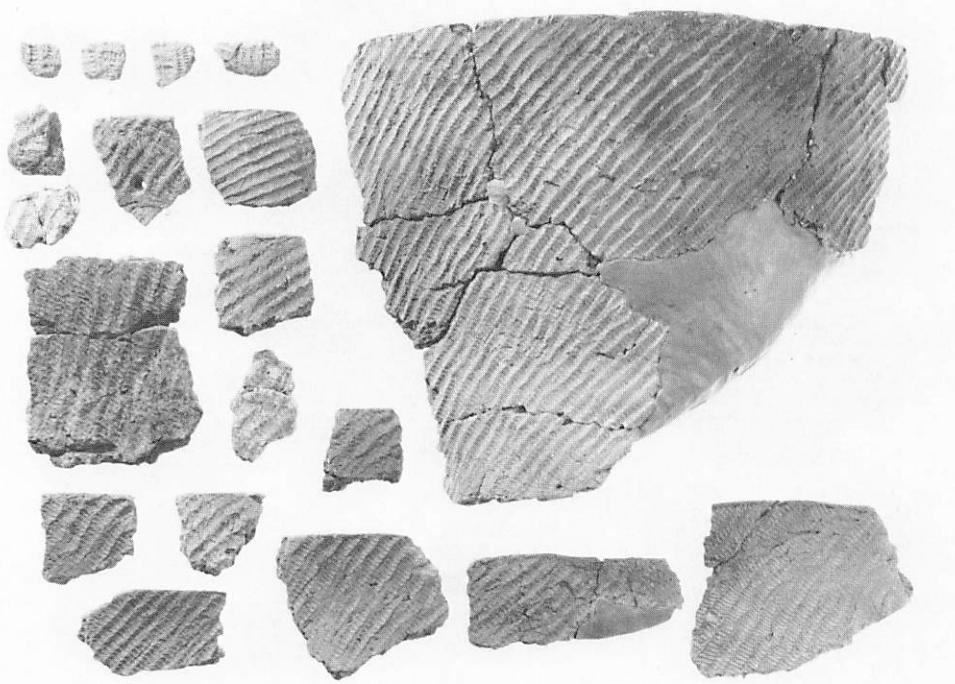
1



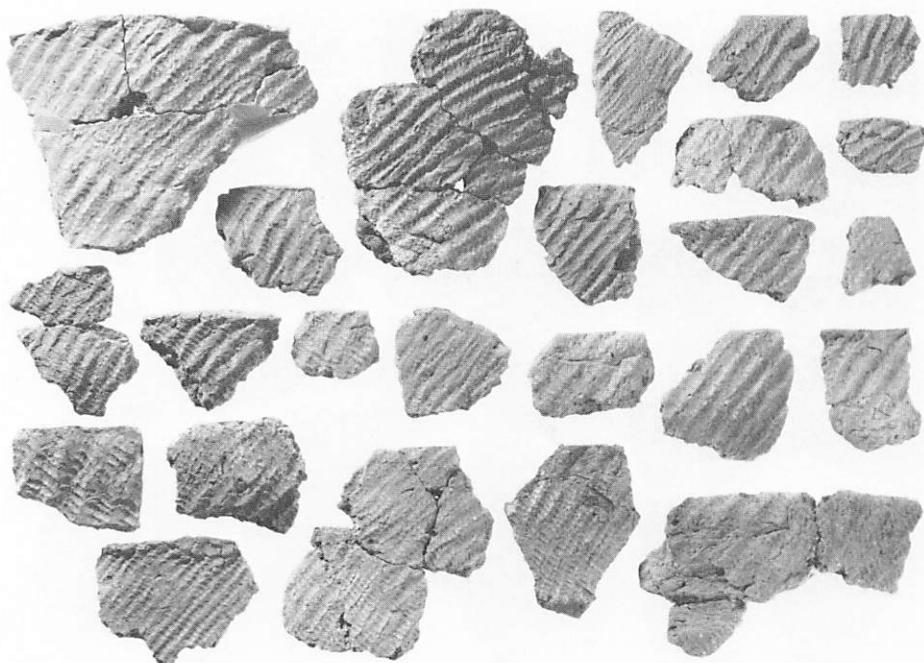
2



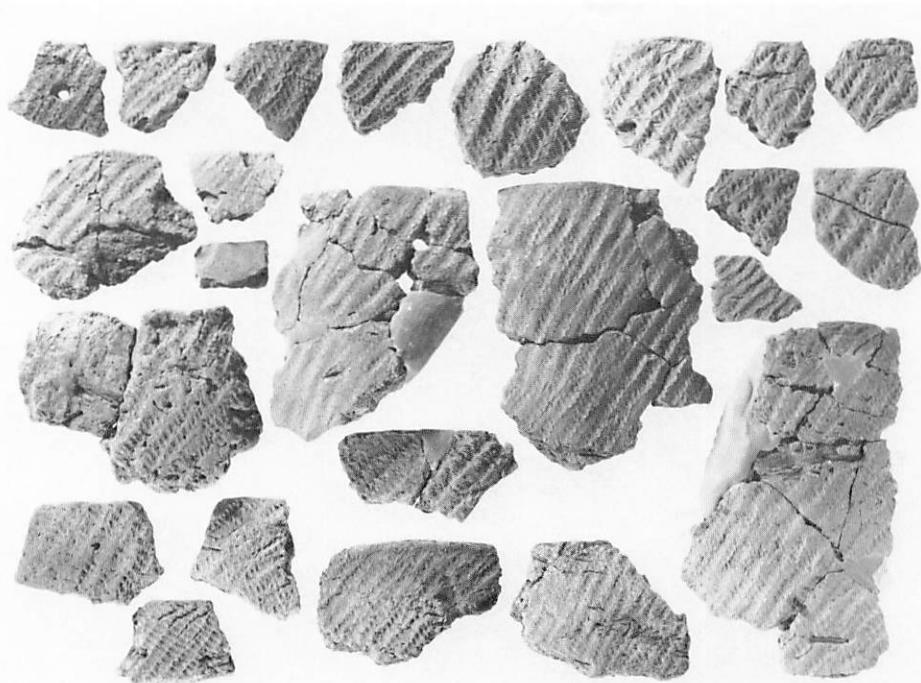
3



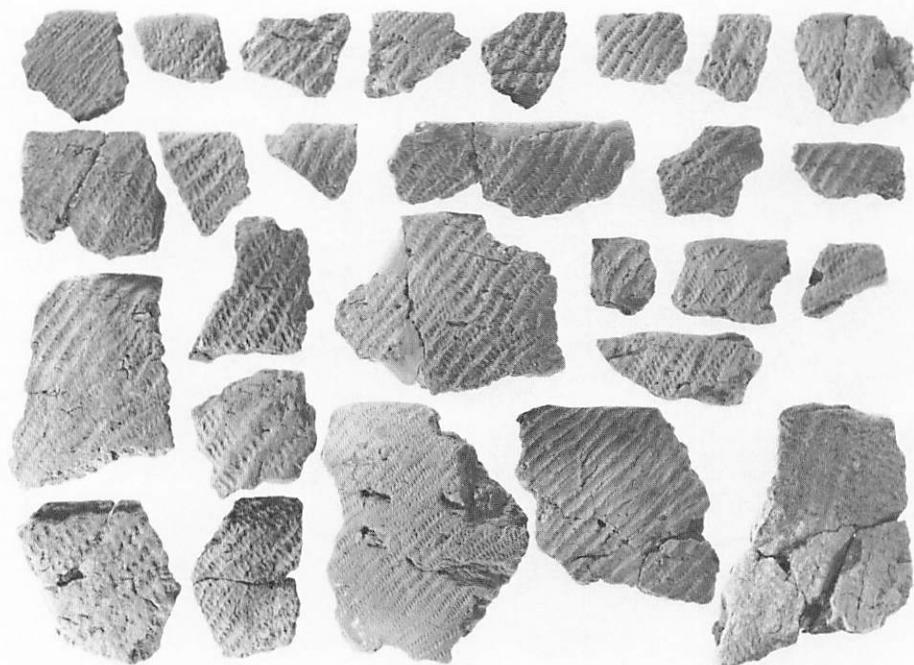
1



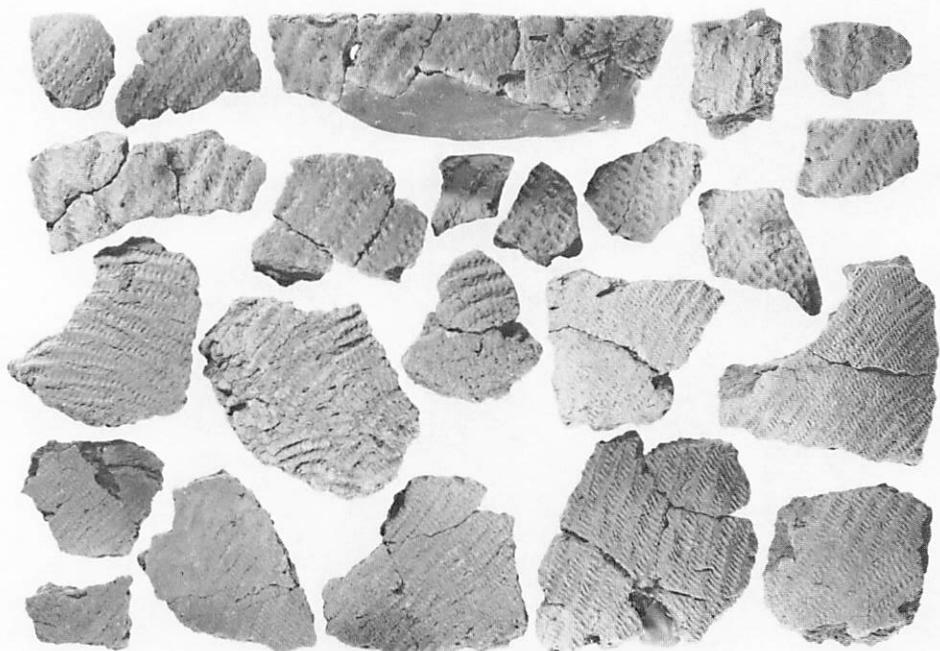
2



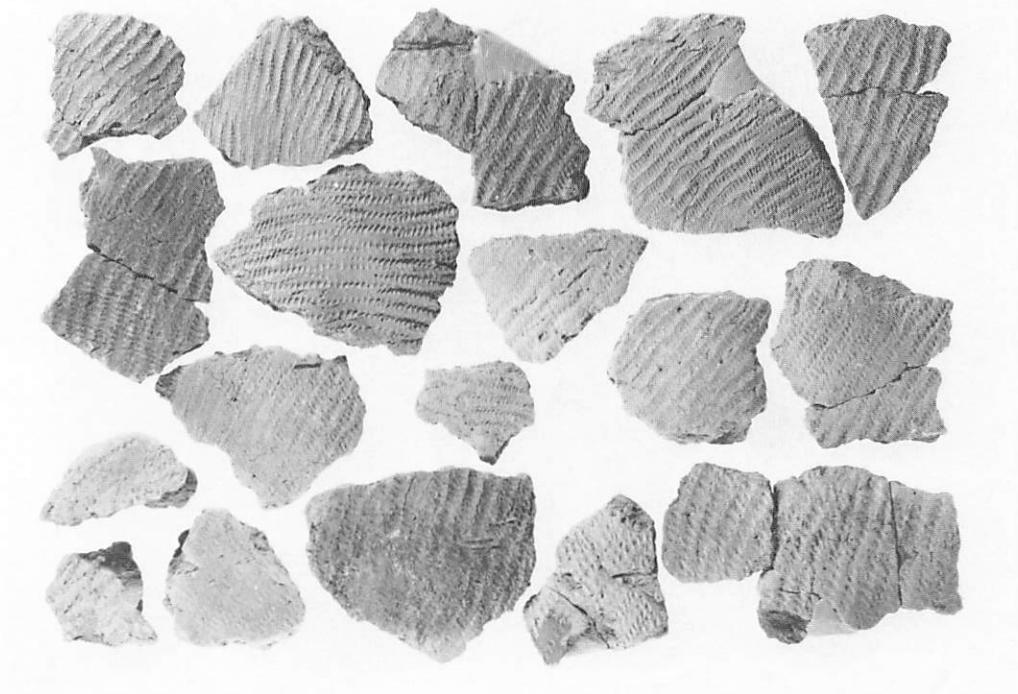
1



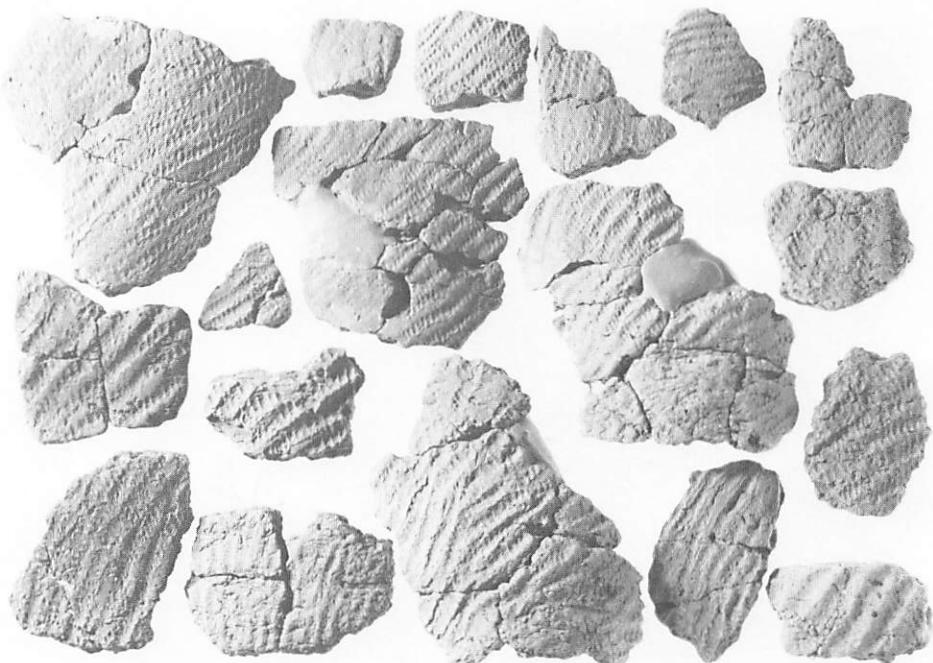
2



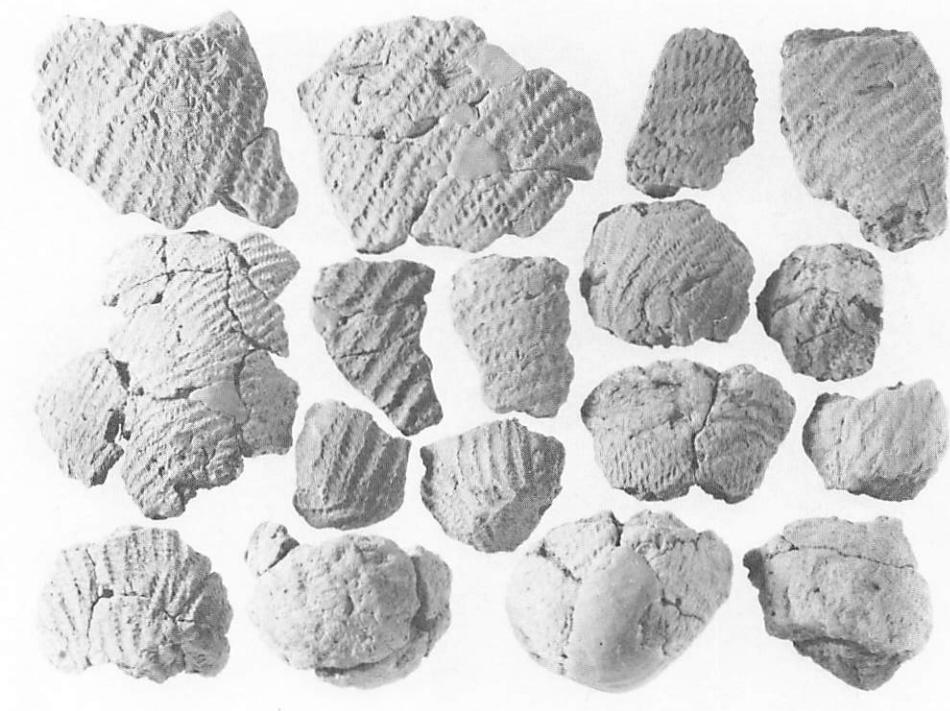
1



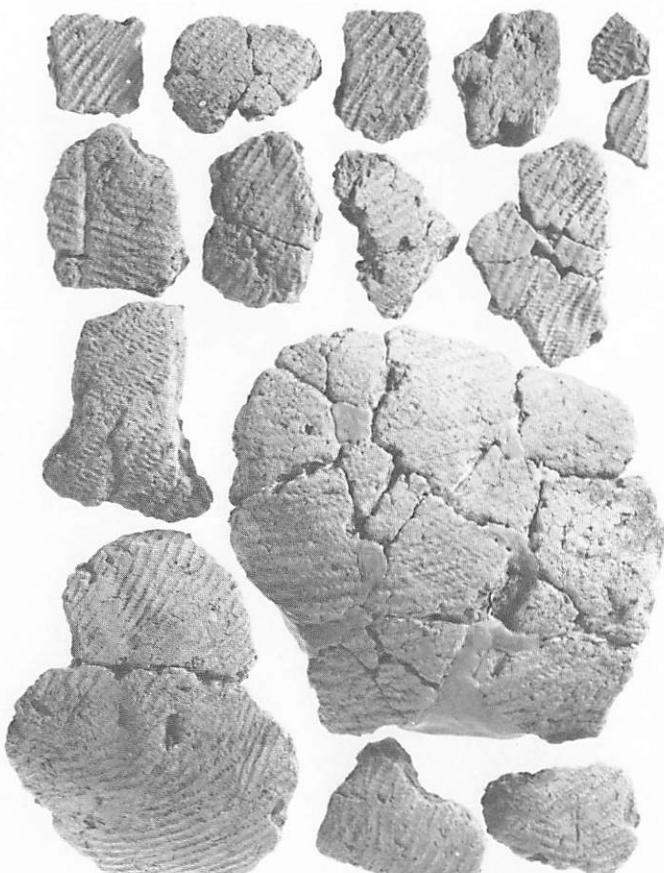
2



1



2



1



2

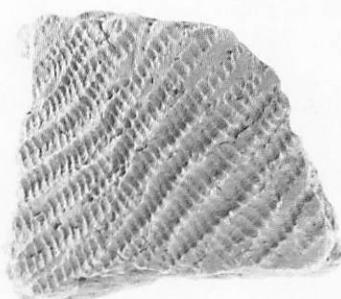
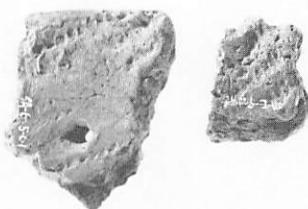


胎土中の纖維混入状態(1)

1

胎土中の纖維混入状態(2)

2

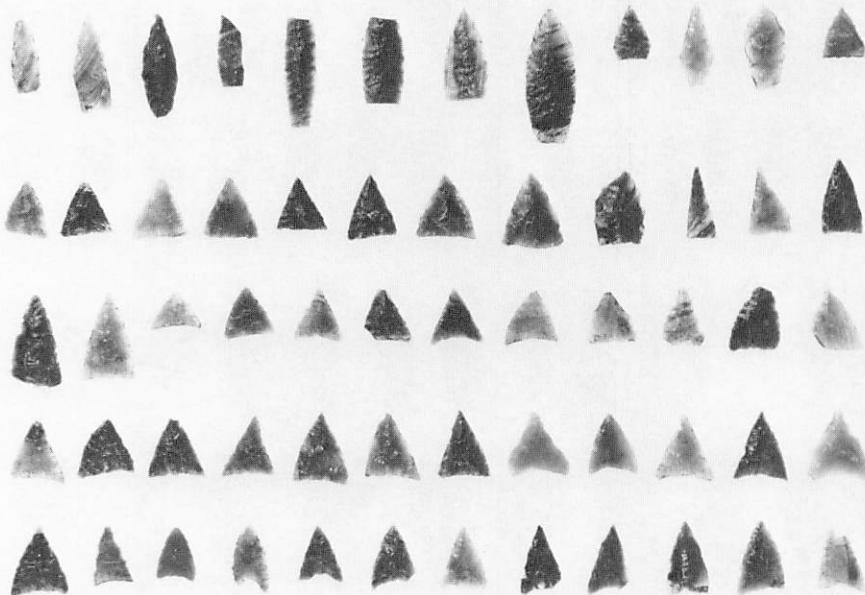


土器内面の縄文

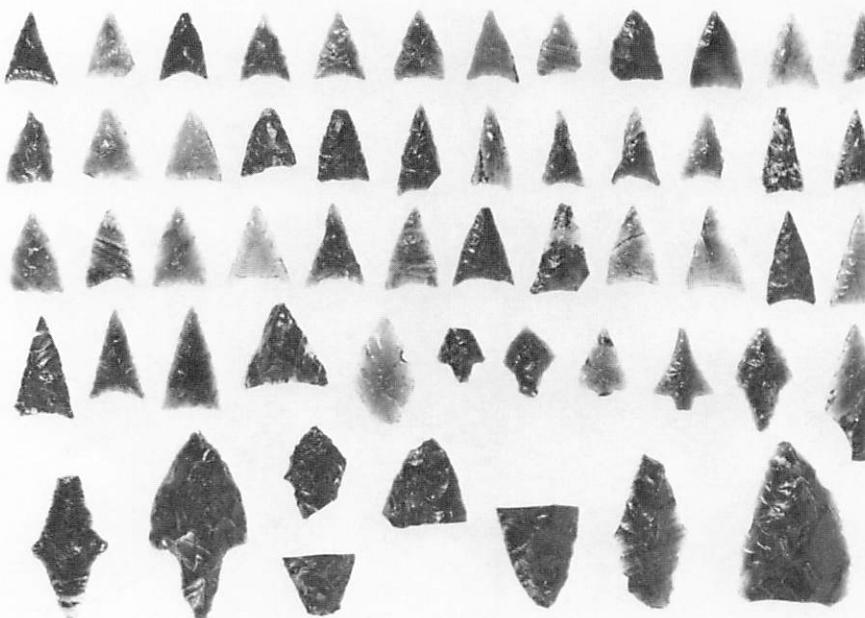
3

縄文圧痕

4



石鏃(1) 1

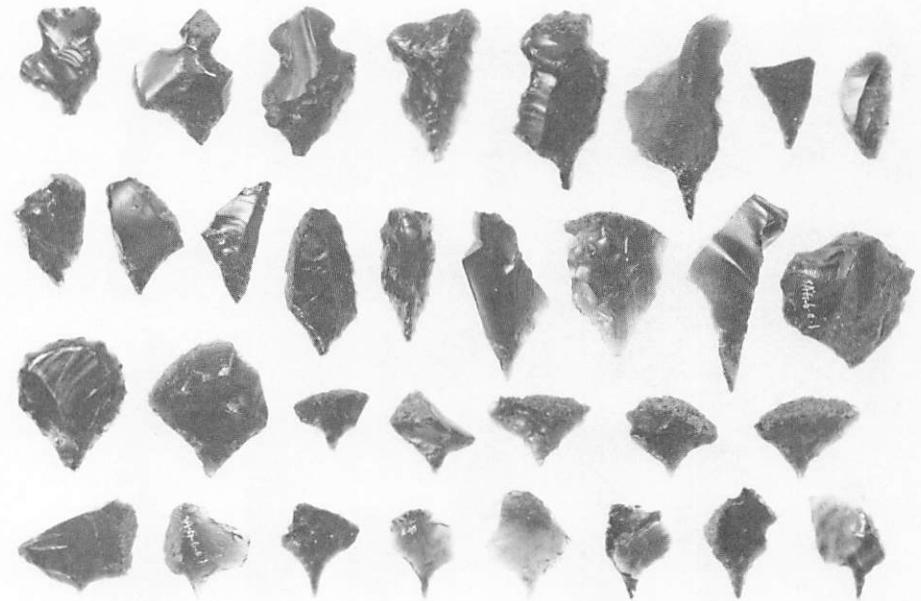


石鏃(2)・石槍 2



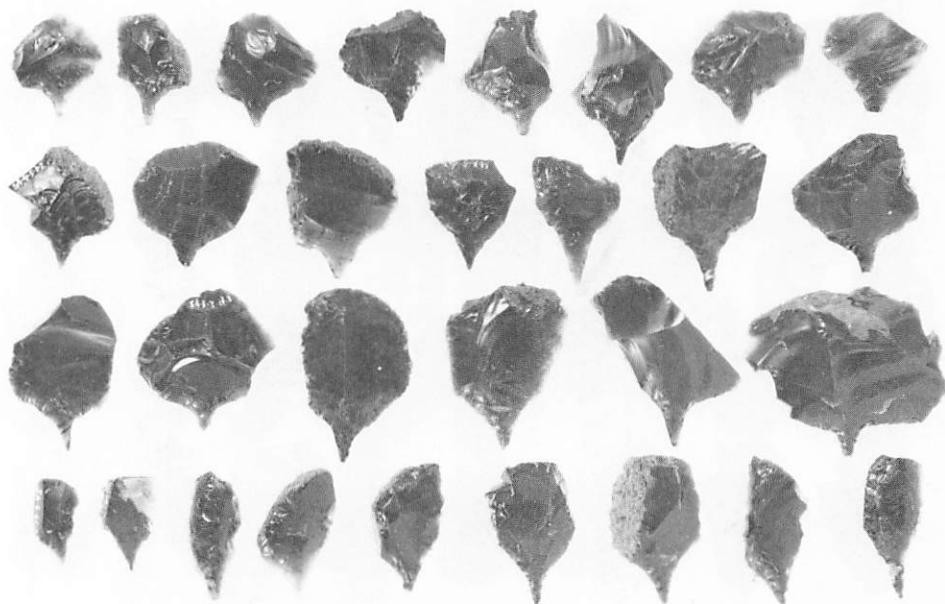
石錐(1)

1



石錐(2)

2



石錐(3) 1



石錐(4) 2



スクレイパー(1)

1



スクレイパー(2)

2



スクリイバ—(3) 1



スクリイバ—(4) 2



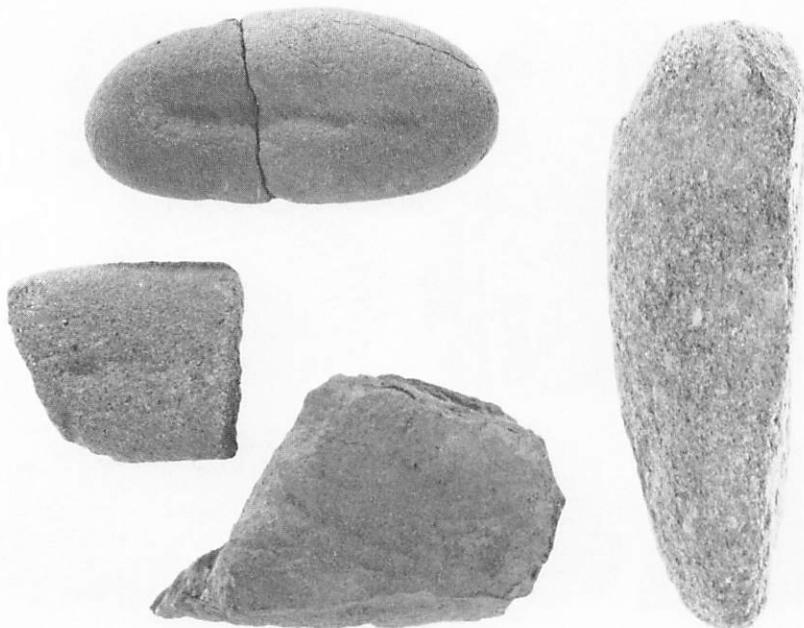
石斧(1)

1



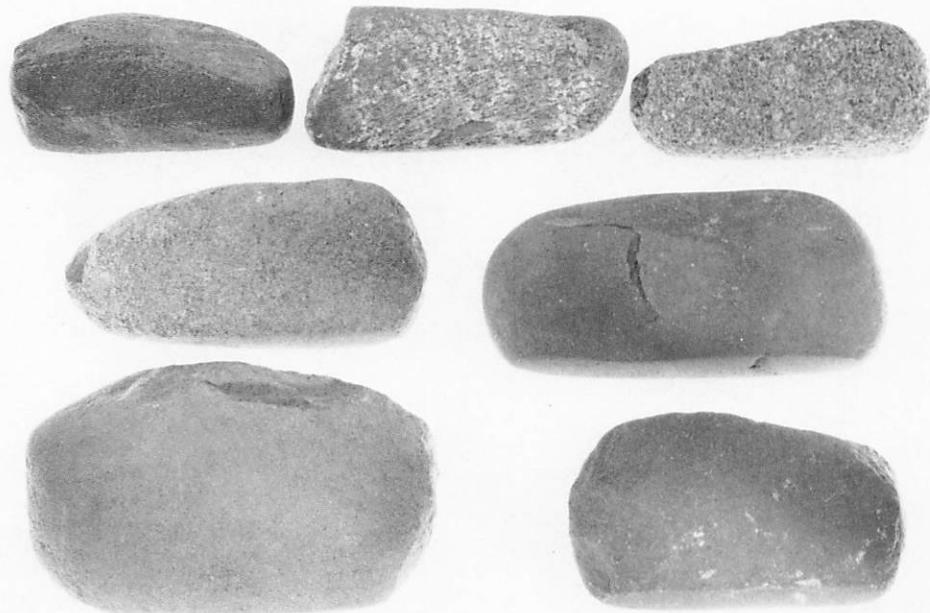
石斧(2)

2



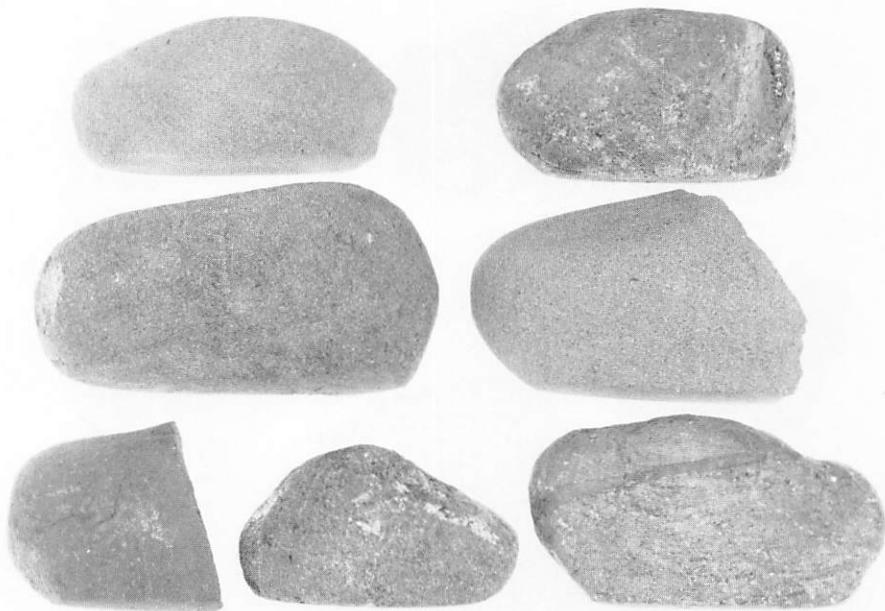
たたき石・台石

1



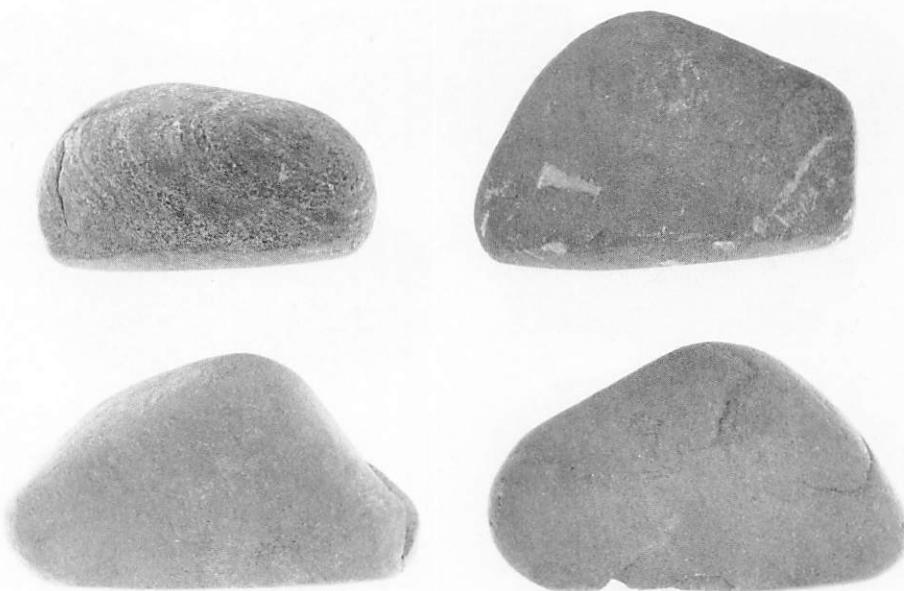
すり石(1)

2



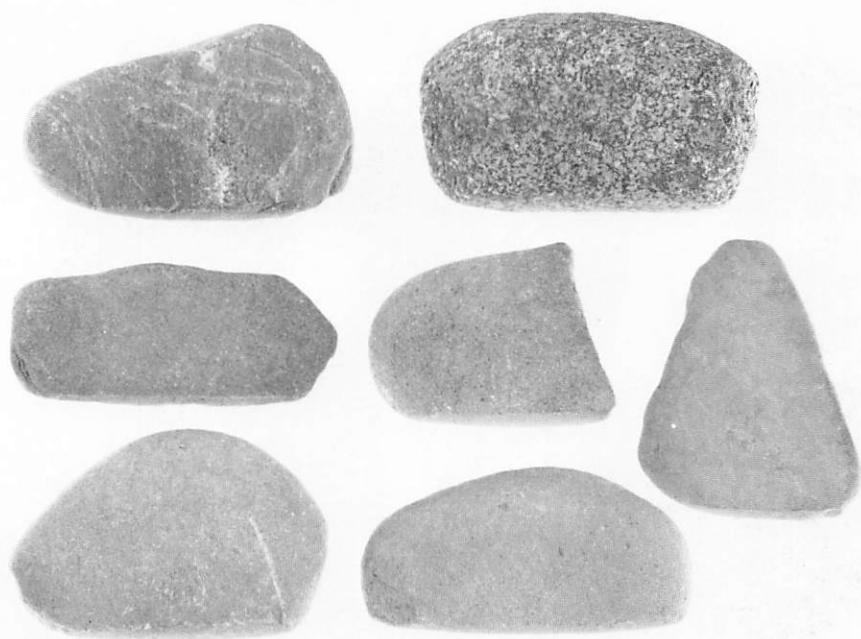
すり石(2)

1

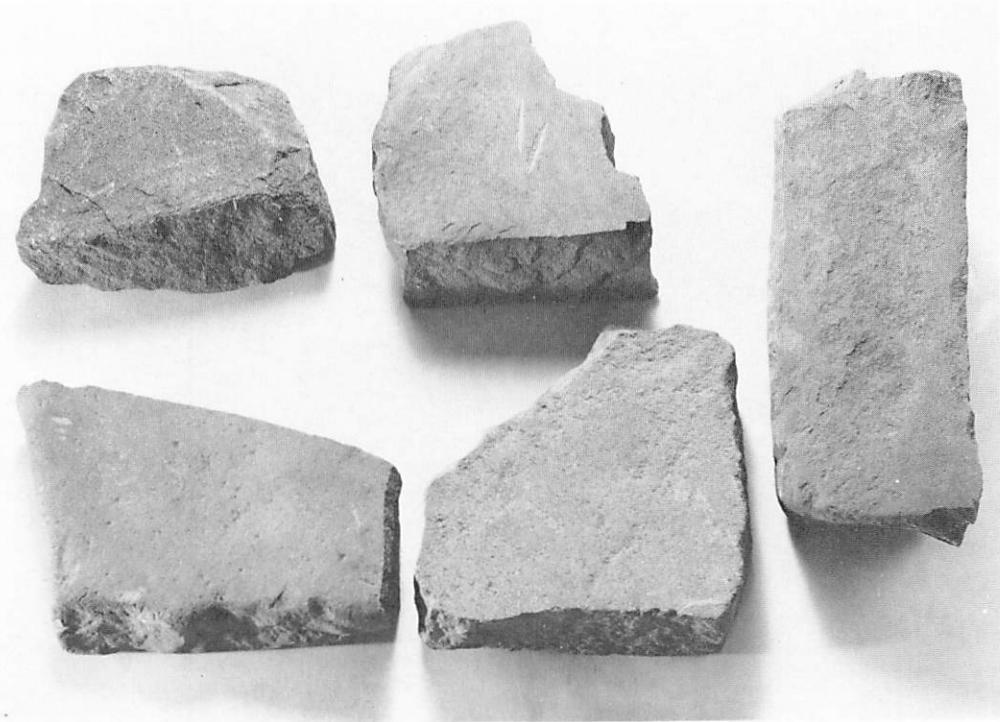


すり石(3)

2



すり石(4) 1



石皿(1) 2



石皿(2)・砥石(1)

1



砥石(2)

2



(財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告第16集

栄丘遺跡

——日高支庁庁舎移転改築用地内

埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和59年3月31日発行

編集・発行 財團法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL. (011) 561-3131

高速印刷センター

札幌市西区曙2条5丁目2-48

TEL. (011) 683-2231



10016985

北海道埋蔵文化財センター